

取材記録集

掘り起こそう わがふるさと

総集編

波賀町教育委員会



刊行にあたって

波賀町長 中田 耕一郎

私達の小学生の頃、毎年師走十四日の義士祭、つまり赤穂浪士討入りの日は、朝から勉強なしで校長先生等から忠臣蔵の話聞く、学校の楽しい年中行事になっていて、堀部安兵衛などの武勇伝を聞くのがたまらなく面白く、我を忘れて聞き入ったものです。そんな影響もあるのか、私は昔話を聞いたり、歴史書や時代小説を読むのは好きで、そのためか地域の歴史や成り立ちについても関心は深く、まだまだ知りたいことが沢山あって、長寿時代だと安心していても次々に届く、先人古老方の訃報のたびに、しまった、あの頃のあの事を、又地域の人脈や系譜などのことを、もっとよく聞いておけばよかったと、取り返しのつかない悔恨の念に駆られるのもしばしばであります。

私は地域の未来は歩んで来た悠久の歴史の延長線上にあり、人々の生業なりわいや産業や文化も、その地の歴史の潮流に大きく逆らって将来を展望することは難しいと考えておりました、その意味からもメイプル大学院の皆さんが、歴史にも御造詣の深い浅田耕三先生というすぐれた指導者のもとに「掘り起こそうわがふるさと」という一貫したテーマを持って、すでに十年、郷土史や民話などの調査収集に励まれ、ここにその集大成として総集編を上梓されましたこと、迫る町村合併のことも含め今後の地域づくりへの大きな示唆を得ることになるのはもちろん、正に、物の豊かさよりも心の豊かさが求められる時代背景にもしっかりと応えてくださる快挙と深い感謝と喜びにたえません。

波賀町メイプル大学院の更なる充実発展を祈り刊行にあたってのごあいさつといたします。

刊行を祝して

元波賀町教育長 中原 哲 男

メイプル大学院の皆様方の大変なご努力により、十集にわたる取材記録集『掘り起こそうわがふるさと』の第一回集大成として、ここに、その「総集編」が刊行されました。

心からの祝福と感謝の意を捧げます。

過ぎ去った十年の歳月の流れの中で、創設当時の事を私情も混じえながら様々に追憶の糸を辿っていると、「よくぞ、ここまで」という思いがあふれて参ります。

四年間の町民大学を修了された方達に、更に元気で学習意欲を持って、人づくり・まちづくりに頑張って戴きたいという趣旨から、大学院創設案が出たのですが、果たして参加してもらえるかとか、学びの内容はどういうものにするかとか、また、どんな方を指導者にお願いすればいいのかとか、派遣社教主事を中心として教育委員会生涯学習課でいろいろと悩みも抱いての出発でもありました。

見切り発車のような形でスタートしましたが、いよいよ町民センター二階の第一研修室での開校・開講式は少人数ながらも厳粛に行われ、学長（町長）さんの式辞の後、私は来賓として祝辞を述べさせてもらいました。（町民大学は町長が学長・「かえで学園」は教育長が学長と決めて運営していました）

大学院の指導には、文学研究者として、又小説家として知られている浅田耕三先生をお願いしてのスタートでした。

今思い出しても講師先生に「良き師を得た」ことが成功のポイントであったと思います。

学びの成果については、私がとやかく申し上げる余地は勿論なく、「ふるさと」の人々の生活の姿を、時には一人で、ある時はグループで古老の方を訪ねて話をお聞きしたり、時には残された記録を転写するなど、それぞれのテーマの完成には人知れぬ努力が刻まれていることを私は行間から読み取りたいと思います。それだけに後を引き継いで充実して行くのは後輩の務めであると考えます。

私事に及び大変恐縮ですが、私も教育委員会退職後、四年間の町民大学を多くの人に支えてもらって卒業し、本年四月からはメイプル大学院の新入りとして皆様のお世話になることになりました。先輩の方々、講師先生、教委の職員の方々にもお世話になります。よろしくご指導・ご交誼をお願いいたします。

ご承知のように、全国的に「町村合併」の問題が急を告げています。しかし、波賀町というわが町の行政施策に於て人づくり・まちづくりのためにとって戴いた決断と実行の生きた姿はいつまでも受け継ぐことが大切だと考えています。それだけに感謝の思いは尽きません。皆様のご健康とご活躍を祈り、更なる「ふるさと探訪」が続けられることを信じて祝辞といたします。

目次

刊行にあたって

波賀町長 中田耕一郎

刊行を祝して

元波賀町教育長 中原哲男

本編

一、民俗、生活

六部部 1

名付け祝い 1

食い初め 2

お正月の行事 2

婚 礼 3

たべものこと 3

日見谷見聞記 4

かもんさん 5

戸倉の習慣 6

口碑おぼえ書き 7

子供のあそび 7

栃 餅 9

農家のくらし(その一) 10

「原」の習わし 12

農家のくらし(その二) 18

盆 踊 り 21

還暦祝い 22

流れ灌頂 23

石つき 24

冬の生活歳時記 26

田植事と田の神祭り 28

トチ餅をつくる 30

雑魚とり 31

お産にまつわる風習 35

柿渋と張りっこ 38

あの頃の結婚式 39

とんど世につれ 41

水車小屋の風景 44

こんやくづくり 46

年桶行事あれこれ 47

季節のならわし しきたり 49

ふるさとの歌 50

二、文化財

原の川そそさん 51

我家のまつりごと 51

チャンチャコ踊り 52

飛石伝説 58

水谷明神社の獅子舞 59

安賀宮坂の庚申さん 60

お盆にまつわる諸々の行事 62

浮雲神社(若宮さん) 64

ザンダカ踊り 65

建て替えられた西之堂 69

亥の神 70

三、行政・教育

学校は時代と共に 71

天明の木箱 78

西谷村、奥谷村そして波賀町へ 79

今市町営住宅用地の経緯 81

四、産 業

木馬のこと 83

鉾山のこと 86

追跡 森林鉄道 87

原の製鉄所 88

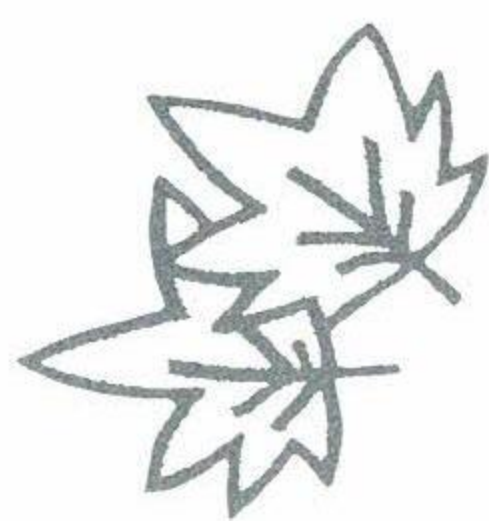
山のこと 89

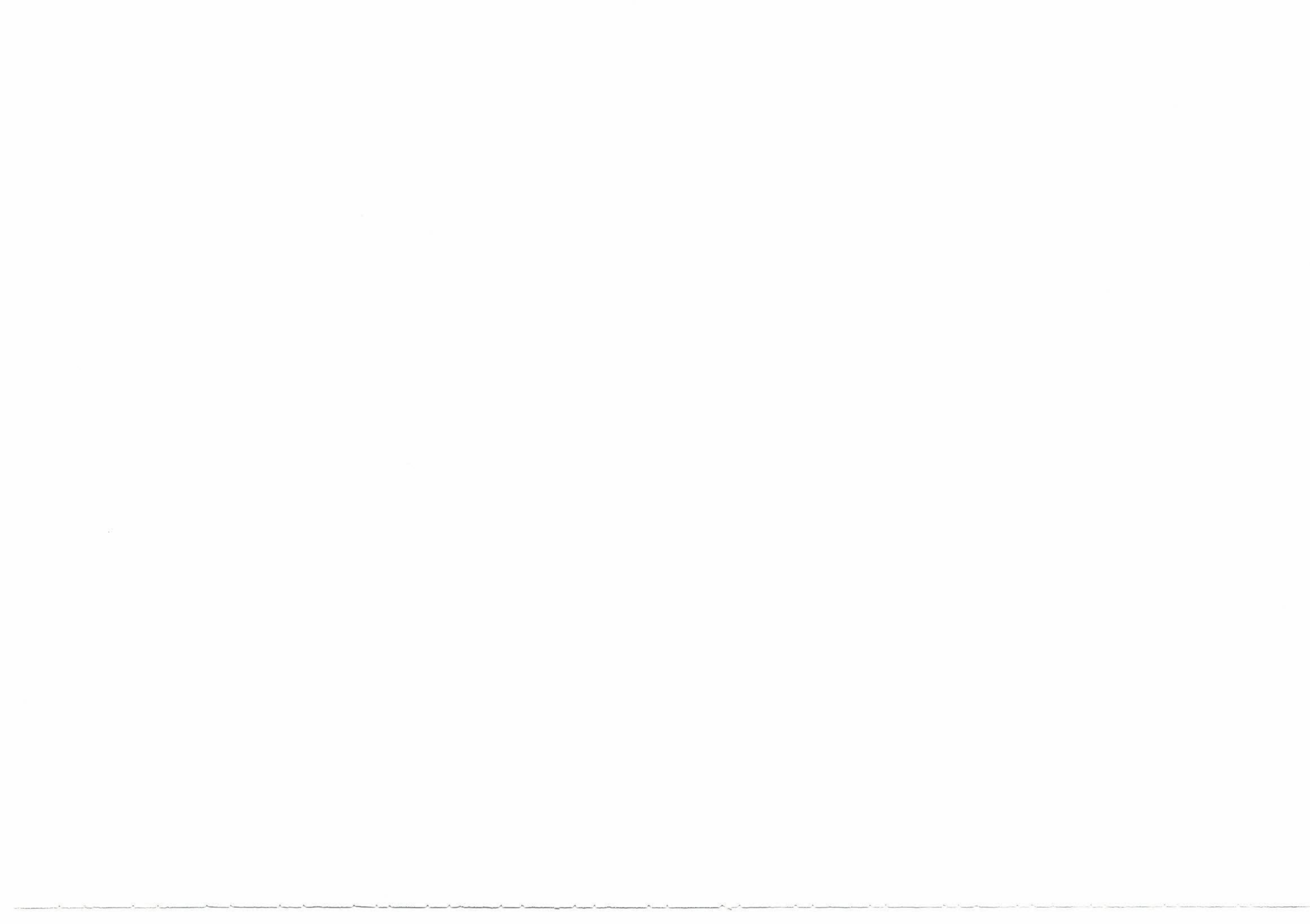
炭焼き夫婦の回顧 89

ざつ 炭俵	91
天気と農作業	92
牛	94
我家の養蚕	95
私と牛飼	96
石工さん回想記	97
道 谷 笠	99
昔懐かし桶屋さん	101
自然薯作りの楽しみ	104
鍛冶屋さんの思い出	106
穴粟三尺胡瓜	109
昔の農作業(上)	110
仔牛市物語	115
昔の農作業(下)	117
むしろ機	122
馬力挽き	123
干し柿たのしや	125
道谷の歩み	127
日見谷の農地騒動と修養団	128
旧街道と木戸のこと	130
引原村字小原地区	132
宝殿神社の秋祭りと奉納相撲	133
飯見集落の移り変わり	134
乗合馬車あれこれ	135
飯見橋の変遷	136
名久城の由来	137
上野笹山の大きいのしし為篠王のこと	139
沼谷の伝説	140
茅葺き屋根	140
私の村 飯見	143

加茂新明神社の歴史を訪ねて	145
小野からの筏流し	146
監視 哨	148
千人針	149
兵隊さんの毎日	150
西谷の沿革	153
昭和二十年の大水害	156
村の名医 有岡先生のこと	158
戦時中の学童疎開	160
乗合バスの青い煙	161
上野劇場	165
半世紀を回顧して	167
ラジオ体操	169
写真の記憶	170
ホワイトリリー楽団	171
お講でコミュニケーション	173
大洪水の思い出	174
原有賀ウツノミ谷の水	176
献穀田田植式	177
小野のことあれこれ	180
ダムと隧道	182
戦時下の村	183
貧しい時代	186
『江戸時代の飢饉』 浅田耕三	187
写真資料	193
発行によせて 下川洋一・藤井司郎	235
付 録	
メイプル大学院の歩み	236
協力団体等	238
監修・編集委員	239
編集後記	

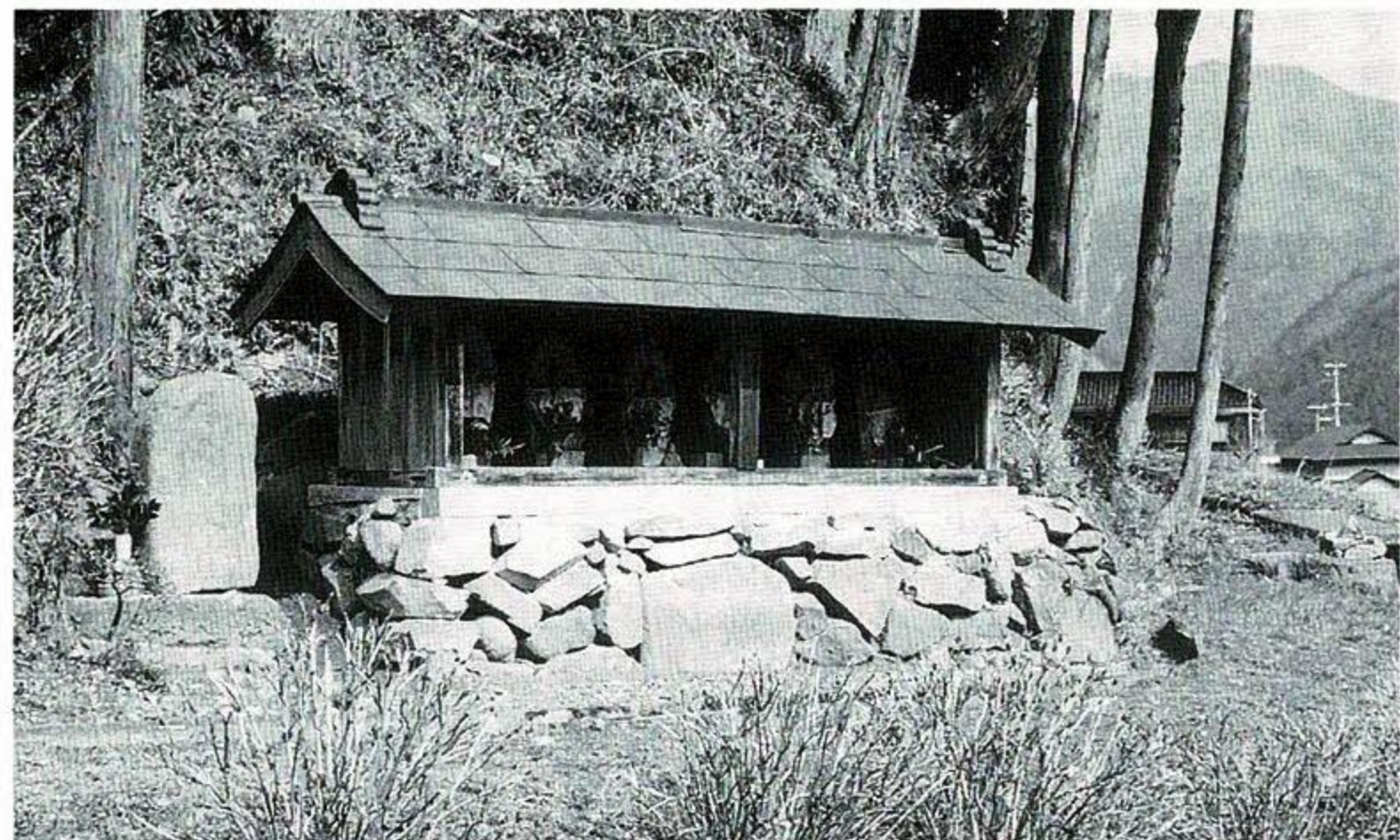
一、民俗、生活





六部

大谷 幸子



今から丁度二百年も昔のことである。日本全国六十六ヶ所の霊場に法華經の写経を納めて修業行脚する修験行者がいた。服装は鼠木綿の着物に手甲、股引、脚絆を付けて、死後の冥福を祈るため鉦を叩き、鈴を振り行脚した。彼らのことを世に六部と呼んだ。時は寛政六年（一七九四）のある秋

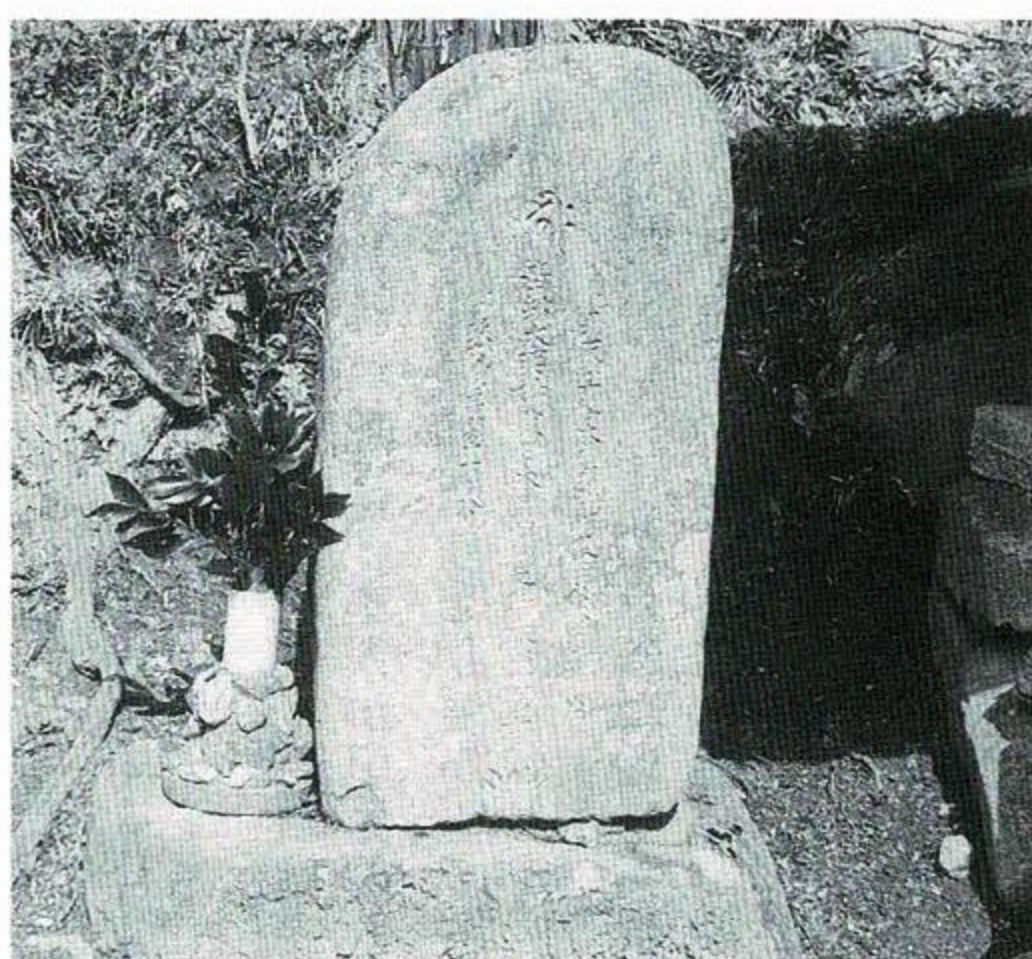
の日、この飯見の里に辿り着いた一人の年老いた六部があった。彼の名は俗名を平治といい、九州天草の出身であった。彼は長い旅の疲れと老衰のため、とうとう道端に倒れ込んでしまった。この人を家に担ぎ込み最期まで手厚くお世話をされたのが、現在の竹上邦男さんの先祖であり、邦男さんから数えて八代前の八兵衛さんであった。彼は享和六年七月二十日に当時としては稀にみる長寿の九十歳で亡くなっている。それはこの六部との出会いから八年後の事であった。

さて八兵衛さん宅に担ぎ込まれ、献身的な看護をうけた平治老人であるが、容態は日一日と悪くなっていた。そこへ彼を追ってもう一人の六部がこの村へやってきた。彼は後に平治老人の死後、葬式の一切から石碑建立まで色々と力を尽くした庄蔵という六部仲間であった。庄蔵は衰弱した師の姿に最後を予感し、京の弟子達を呼び寄せるため慌てて村をあとにした。それから数日後、庄蔵を先頭に幾人も六部達がこの村にぞくぞくと集まった。そして、とうとう寛政六年十一月八日、平治老人は八兵衛さんの家の一室で、多くの六部や村人達に見守られながらその生涯を閉じたのである。平治老人は生前によほど徳を積まれたのだろうか、各地から多くの六部がやってきて葬式

の行列は彼の死を悼む人々で長く長く途切れることなく続いたそうである。飯見集落の南のはずれ、ヨナギ山と長尾の田圃の境のあたりにお祀りしてある六地藏尊のすぐ隣の地に一基の苔むした石碑がある。あれから二百年、年は移り世は変わっても変わらぬその石碑にはいつも草花がお供えしてある。

大乘妙典日本回國道行本源信士
九州天草大嶋郷之住人 俗名平治
寛政六寅年閏十一月八日
石碑世話人 江戸庄蔵
龜右衛門

と碑文に記す。



《第一集所載》

名付け祝い

大成 みちよ

子供が生まれて七日目に名付け祝いをする。第一子の場合は、母方の両親と近所の女の人を招待し、祝いの膳をもつ。

食膳には、お赤飯、鯛の尾頭付き、煮しめには、大根、人参、れんこん、しいたけ、こうや、こんにゃく、里芋等根菜類が多く蛋白質等が多く使われ、黒豆の煮豆も縁起ものとして必ず作り、酢のものや汁物も並ぶ。

招待客が席につくと、母親が子供を抱いて上座の中央に座り、母方の両親もその両脇に座る。

父親が命名した名前を半紙に書き、居並ぶ人たちに披露する。この日をもって子供の名前はきまるのである。お膳には父親が清い流れの川から小さな丸い青石を拾ってきてつけるのが習慣である。

石のように硬く・強く・丸い型のように、温厚な人間に成長してほしい願いからであり、この石は百日目の食いの初めの膳にもせるのである。第二子からは家族だけで祝い膳をする。

《第一集所載》

食い初め

大成 みちよ

生後百日目に食い初めの席をもつのである。

この日のために初めて子供用のお膳や食器をととのえる。

お膳には尾頭付きの魚、煮しめ、お吸物、黒豆の煮豆等、そして名付け祝いの時の丸い青石もつける。この石には誕生日を記入し母親が大切にしまっておく。

家族みんなが揃って膳につくと母親が子供の口へ一粒だけご飯を入れる。これは歯の丈夫な子供に育つように、又乳離れも順調に行くようにと、そして一生食べ物に不自由しないようにとの祈りを込めての行事である。



《第一集所載》

お正月の行事

片山 きぬ代

元旦から十一日までを注連の内しめなまのうちという。

年神様という神様が山から里へ降りて来て各家に入り、その年の無病息災五穀豊穡を守るといわれ、年桶としづけに注文しめなま縄を付け、お供えする。その年桶の中身は、米一升二合、鏡餅一重小餅十二重とお金を入れる。お金は十二円、もしくは百二十円と十二の数が用いられる。額は各家庭により違う。柿、黒豆、シダ、昆布、ユズリ葉、ダイダイも一緒にお供えする。シダは裏白うしろしろともいう。裏が白いため、心の潔白を意味する。葉の付き方は、夫婦の相性の良さを示すとされ、ダイダイは、前の年に実った実が次の年に色づくまで元気に枝に付いていることから子や子孫が成人するまで、親が健在でめでたいもの。昆布は、縁起をかつぎ喜ぶに通じる。年桶にこれらの物を入れ、新しい年への願いを込めて、床にお供えする。年神様に元旦の朝早く、戸主が新調の桶と杓を使って井戸水を汲んでお供えする。これを若水を汲むという。その水でお雑煮を炊く。その時のたき付けには、豆がらを使う、お雑煮ができ上

がると、一番に年神様にお供えする。その後家族を起こす。そして皆でお祝する。正月三日間は、主人が早く起きて雑煮を作り、神祭りをしてから、皆起きる。正月三日間は、ほうき、包丁の類は使わない。そのためにおせち料理を作っておく。風呂は、元旦は入らない。その習慣の意味は一年中で三日間位は女性、嫁を休ませてやりたいという先祖のやさしい気持ちから出たものではないだろうか。

一月七日

七草ぞうすいを作り年神様にお供えする。七草ぞうすいとは、春の七草、すなわち、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ、を入れて作ったおかゆのこと。ぞうすいを食べるのは、正月の御馳走を食べて胃が疲れているのを癒やすため。

一月十一日

年桶おろし。年神様にお供えした年桶の中身の子餅で雑煮を作り神様にお供えしたのち後、いただく。

一月十五日

トンド。トンド柴を前日に刈り、トンドの場所に持ち寄り、山のように積み上げておいて当日大きな火をたく。

年桶にお供えした鏡餅を焼き、そのお餅であずき粥を作りお供えする。又焼いたお餅をかき餅に切り、干しておいて一年の一番早い雷が鳴った時に焼いて食べる。これは、雷が落ちないようにといいことらしい。

二月三日(節分)

ひとえ正月ともいう。一夜まつりで、年桶を正月同様にしてお供えする。いわしを焼きひいらぎといわしを竹の串に刺し戸口に刺す。これは悪魔を払うため。玄関の戸は少し開けておいて福の神様が入りやすいようにする。

二月四日

年桶おろし。年桶の小餅で雑煮をして食べる。これで正月は終わり完全に年を越し、年神様も又山に帰られる。

《第一集所載》

婚 礼

大成 みちよ

婚礼の当日、花嫁の荷物は婚家へ運ばれる。午前中に、仲人と迎え女郎と花婿は花嫁の家へ行き、嫁方で出す料理を頂く。荷物は近所の人たちの見守る中を長持歌等を唄って運ばれ、婚家では近所の人たちも手伝って運び込まれる。

花嫁の支度が大体出来た頃、花婿と迎え女郎は帰って行く。

花嫁は実家での最後の食膳に箸をつけ、親戚近所の人たちに御礼を言い、仲人や両親、兄弟、親戚の人たちと揃って家を出る。地区によってはこの日嫁に出すのを惜しんで地区の外れに木や板等で障害物を作って通せんぼをしたりすることもあった。

花嫁は近くへの縁であれば歩いて婚家に向かう。又貸し切りバスでの嫁入りやハイヤーでの嫁入りをしたものである。同じ地区内で同日婚礼のある場合には、両家で話し合い時間の調整をした。

婚家へ向かう途中で前もってお嫁さんがみたいから見せてと言われていたら、その地で車を止めて花嫁さんを見ることが出来た。

婚家の近くになると車から降りて少々明るくても、みんな提灯をともして行列をつくって婚家に向かうのである。

少しの距離ではあるが歩くので大勢の人たちに迎えられ見てもらうのである。小さな子供は花嫁に近づき「きれいやな」と言いながら着物の袖にさわったりすることもある。この時花嫁のお土産としてお菓子をふる舞う。

婚家の庭に着くと二、三人の人が長持歌等を唄って家に入る。この時、玄関からは入らない。座敷に近い縁側から座敷へ上がっていく。

婚家では婿方の両親、花婿、兄弟、親戚の順に並んで迎える。

すべて仲人の指図によって進められ、先ず最初にお仏壇に詣り、この家の人間になることを御先祖様に誓うのである。

次に両家の家族、親戚が両側に並んでお茶を頂き小休止した後、別室（納戸）に入り、親子夫婦の固めの盃、すなわち三三九度の儀式を交わすのである。

この時、陰謡といって謡曲（高砂、四海波、千秋楽）が入る。三三九度の盃は男蝶と女蝶（近親者で両親の揃った子供）がする。この時男蝶が「お魚これにー。」と一声高く声を出して酒を注いで儀式は終る。

披露宴は本職の料理人が出張してき

て作る。親戚、縁者は夜通し祝いの宴を盛り上げる。

終わりに近づくと一升入る赤塗の大盃が出る。上り盃と言ってお客みんなに順番に飲んでもらい、少なくなると再三注いで飲み、宴が最高に盛り上がる。

朝方になってやっとお開きになるのである。日を改めて花婿の勤務先の同僚達を招いたり、幼なじみを招いたりして婚礼から一週間位は祝宴をもつ。

花嫁は婚礼の翌日親戚の叔母様に連れられて氏神様へお詣りする。

三日目には初歩きといって実家へ舅と行きその日のうちに舅と一緒に帰るのである。

たべもののこと

田 住 三 一

《第一集所載》

食生活について一言書いてみたいと思っています。大正から昭和にかけては麦御飯につけもので、たまには生いだしをたきびで焼いて食べたり、干いだし又へしことといういわしを食べ海魚といってもこんな程度の物でした。一日の食事は三回としたものですが当日一日に四回、五回と食べていました。こんな時代がありました。牛を置

ている関係で朝、東の空が白みかけたら朝草を刈りに行き、かえってから朝ごはんを食べ、田畑へ行ってそれから昼御飯を食べ、ひるねを二、三時間して起きて食べ又夕食を食べ一日に四合、五合、中には一升めしを食っておりました。又各戸とは言えませんが、部落の四十%の家庭ではにわとりを飼って卵を食べ滋養を取っていいこうと、四苦八苦をした時代がありました。正月には、ブリを食べなければ正月がこんな言うことがありました。一匹のブリを買うのにも困難でした。正月にブリの切身を食べてよかったなということがありました。

昔の者は早く死ぬということをかねがね言いますが、やはりどこの墓地に参っても昔の人は四十代、五十代で死んで行かれるように感じています。働き過ぎることと食事がまずいということとです。現在は一変して生活が安定しはがらから又一方ではカロリーを取ったり、たんぱく質を取ったり誠にけっこうな時代になって来ました。現在は男七十五歳、女は八十歳が平均寿命と書いていますが、ほんとによい時代が来たなと思います。しかし食物は大事にしてほしいものです。私の生きがいはてきとうな仕事をする事、それから旅行をすること、又カラオケで歌うこと、暇さえあれば私の作った苗を植

えた山の木立の成長を見ることがなにより楽しみです。

《第一集所載》

日見谷見聞記

河野 トミエ

先に発刊された『波賀町誌』に、昔からの波賀町の凡ゆる文化や生活の状態が詳しく掲載されておりますが、私達は現在の世代に生きている一員として今の暮らしのあり方や昔から続けられて来たしきたりや風習などを年配の方にお尋ねして、急ピッチで変わりゆく現代の若者達が、こんな事もあったのかと、目を留めてくれればと思つて書き留めてみました。

日見谷は一時期、大正十年前後から昭和の初期にかけての小作騒動で大変な時期があったらしく、村内の先駆者の皆さんの努力により前進の一步をふみだし、当時の若者は二十五才迄は禁酒、禁煙を守り部落の美德として守り続けていました。このような習慣は昭和十年から十六年頃まで続いたといえます。

御大師様をお祀りした経緯

大正四年に穂前鹿太郎さん（穂前稔

さん宅）という方が、四国に渡り八十ヶ所の土（御砂）をもらつて来て、日見谷の裏山に御大師様をお祀りされました。ここは元から観音様が祀られていた場所なのでそこにお祀りされたそうです。この御大師様をお祀りするために村中の皆さんが一致団結して大きな力となり一つの事業を成し遂げられたのです。

毎月二十日の御大師様のお祭り日には遠くからも沢山お参りされるようになり、お祭りが終わるとお賽銭箱のお金を集めて廻る程であったと聞きます。こうして村の内もだん／＼と和やかな村へと発展して行つたのです。

日見谷の年中行事

正月

正月のお餅は大体暮れの二十九日に作り二十八日はさけます。今では昔からの歳桶に祭ることを止めておられる家が多くなり、お餅は三宝でお供えす

る。昔は若水はやはり男の人が三日間とも汲んでおられた。これも簡易水道が出来てより自然と汲まなくなったようです。若水を汲む時のお唱えは「どんぶりや、どんぶりや、どんぶりや、今年も一年くすりになるお水を下さい。」と言っていました。お雑煮の火は豆幹で火をつけていました。十四日は荒神様にてお日待を行う。十四日のほじよりは二カ所で行っていました。ほじよりの灰を家の廻りに振るのは、長いもの（へび）が家の中に入らないようにとのお呪い（まじな）です。正月送りは昔から日見谷ではやりません。

囲炉裏は家庭教育の場で有り、家族の絆（きずな）です。囲炉裏を囲んで自然と見たり聞いたりする見聞教育の場であつてこのようにして昔の子供は成長して行きました。大人どうしも又縁側がコミュニケーションの場であつたが、現在のサッシ戸に変わり、次第に話し合いの場もなくなつていきました。

四月（ひなまつり）

四月三日（旧曆三月三日）のひな祭りのひなあれは日見谷では今も尚続いています。子供は袋を持ってどの家も廻りお菓子をもらう。大人はほほ笑ましく見守っている。子供の楽しみとして続けてほしい行事の一つです。

五月

五月八日（旧曆四月八日）の花の日は門先に花を立てるのがお天とうさんへのお供えであつたのですが、今は外に花を立てる家もほとんどなくなり、初花の家へお参りするのは今も続いている。現在では皆で花見をします。

春は部落全員で運動会を行い村人の親睦を深めます。

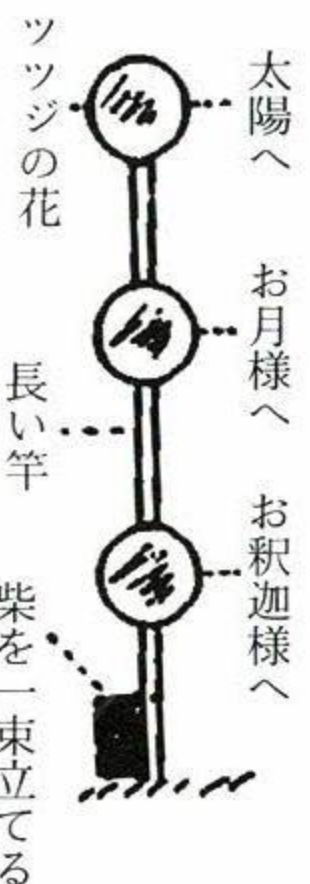
溝浚え

これは日見谷と一宮町の杉田部落と一緒になつて行つた行事であつて、井堰（いせき）を作りそこから水田へ送る水を取ります。五月の田植えの前に行うが、現在は田植えが早くなつたので溝浚えも早くなつてきました。

六月

田植えの卯の日とは、卯の日には田を植えないという言い伝えはみんなが労働から体を休めるために作られた休日であつたらう、今の日曜日のようにと言われる。

田の神様



昔は田圃の水当口ひらうぎに日扇と栗の葉と、たか草(これは山にある菅蒲のような草のこと)を敷いてお餅をお供えしました。お餅は揚げだんごといってお粉で作ったお餅である。大人がお餅をお供えて拜むのを待って子供がついて廻りそれを頂いて帰ります。その当時ではこうした行事も子供の楽しみであったと思います。田植の終わった後の亥の日に行われていたようです。

早苗上り

田植が終わると苗を一握りきれいに洗って神様にお供えをしてご馳走を作って食べていました。塩鯖が一番のご馳走でした。労働の慰安会とも言うべき行事だったのです。

お盆

お盆の十三日になると夕方迎え火をたき、松明たいまつをかざし精霊を迎える。十四日には株内の親戚が集って揃ってお墓参りをします。隣保内の初精霊さんの家へも参りお経をあげます。精霊送りには、昔は十五日の朝早くに送り火をたいて送っていたが今は十五日の午後五時頃に送ります。十四日の晩は初精霊さんの家で盆踊りをしていましたが、少し経ってからは広場に写真を持って行き広場で踊るようになり、現在は消防団とか婦人会が主体となって八月十七

日の観音様のお祭りの日に観音様で踊ります。
数珠廻ししじゅうまわし

数珠廻しも観音様で行う。数珠廻しの行事の様子は昭和四十三年八月二十四日の神戸新聞に詳しく掲載された事があります。数珠廻しの由来は、流行病で大勢の人が苦しんだ時と、風水害の祈願のために行われました。二百個の玉が二メートルの縄に通してあるのです。

現在も続いていて婦人会が中心となりとても賑やかに行われております。今後共続けてほしい行事です。

お祭り

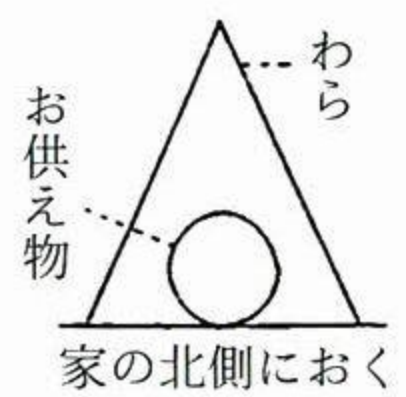
十月二十日の本祭りは一宮町西安積の八幡神社であり、五カ村部落が当番制で行います。十月二十八日は荒神社(火魂神社)のお祭りです。

荒神様と山の神様の五カ村が集められて小宮様として祭っております。

いのこもち(珍しい行事の一つです)
藁を縄で結んで家の門先でたたいてお餅をもらって廻っていた。

神ごと(これも珍しい行事だと思えます)

これは十一月に家の主人の干支えとの日に神祭りをする家のお祭り事です。



藁を両方から立て、三角のようにして中におこわ(赤飯)と魚をお供えする。その日の中に野のものに食べてもらえたらとても良いと喜び、残ると又場所を変えて置きます。

庚申こうしんさんは二カ月に一度祭る日があります。庚かのえの申さるの日です。

昭和十七年に現在の国道が開通しそれまでは岸根さん宅の前の道が本道でした。

ご高札所があったという。掲示板のことである

大畑に武家屋敷があったと言う。伝説に侍さんが居た屋敷であり、災害に流された時は火打ち石が泣いていたという事です。

安積城あさかぎの落武者おちむしやの墓が所どころにあつて、豊臣秀吉が攻めた時の人達だと言う。無縁さんとして、その土地を持っている人が祭っています。

お大師講は二カ所で毎月二十日に今も続けられています。

村内に重病人が出た時はみんなで神参りをし千巻心経をあげて祈願をした

り、相互助け合いの精神で見守っています。

火の用心として子供会の夜警は、子供の行事として続けてほしいです。

このように色々貴重なお話を聞かせて頂き有難うございました。これからも続けられる行事は続けてほしいと思います。



《第一集所載》

かもんさん

大谷 幸子

今から約四百年程前の天正年間、二人の落人がこの集落(飯見)を訪ずれ、加藤(後の可藤)家に落ち着いた。二人の落武者の名は主人を重次元次、従者をかもん伝兵衛といった。

重次元次は可藤とみという後家さんと夫婦になり、仲良く田畑を作って平和にくらした。

再び戦の知らせが届いたが、元次主従は出陣を断念した。

次の戦の時のことである。重氏は朝一番鶏が鳴けば出発することにして仕

度をしていたが、一番鶏がとうとう鳴かなくて戦に行くことが出来なかった。誰が何のためにしたのかわからないが、鶏の首には縄が締められていたので鳴かなかつたらしい。

戸倉の習慣

河野 トミエ

部落の動き

昔は戸数が二十戸程あったが現在は十三戸に減っている。子供には勉強をさせるために地元で就職が出来なくて、若者はだん／＼と都会で勤めるようになり、親達も年をとるとどうしても子供のいる都会に一緒に出て行くことになり次第に村は過疎となってゆく。此の問題が一番深刻である。

スキー場は昭和三十三年から三十四年頃に神姫観光と村が合同で事業を始めた。昭和三十五年に高松の宮様が来町されて、上垣健さん宅に泊まられた。この時スキー場のリフトの事が話題に出て、翌三十六年の十二月にはリフトがつくようになった。リフトがつくまではスキー場の山の上までご飯をおひつで背負って運んでいたと言う。その頃は雪も沢山降っていたので一晚の内に、一メートル位は積もることもあって、そんな時には二階から家の中に出

以来可籐家では鶏を飼育しなくなつたといひ伝えられている。

(現中田町長さんのお母さんの生家での話で中田ハルさんの談)

《第一集所載》

入りをしていた。

国道工事は昭和三十二年頃より始まり、三十五年頃に出来上がった。国道が開通するまでは、お正月の買物にも引原まで歩いて行っていた。但馬の方へも越して魚を買いに行っていた。

戸倉の風習と年間行事

昔は旧暦で正月をしていた。正月の若水は男の人が汲んでいた。年桶を祭るには床の間に新しい筵を敷き米俵を置いて年桶を置く。年桶の中には、番茶、お餅は鏡餅と小餅は十二重とみかんも十二個、柿とか栗も入れる。六さい木を門松に立てる。六さい木とは、一本の木を六つに割ってそれを束ねて作り、がえをさす(がえとはかやの木で作る)。これは無病息災の意味で立てる。こんなこともスキー場が忙しくなつてからはあまりしなくなつた。

正月行事としては、お日待をお宮に

籠り祈願する。十四日には、「きつね狩り候」と言つて青年が雨戸をたたいて村中荒々しく回つた。

節分祭は臼餅をして祭る。

山の神様は御幣を切つて参りお餅は生もちといつてお粉でお餅を作つてお供えをする。山の神講には、料理屋からご馳走を取つて皆で食べる。これは今も続いている。昔は煮込みご飯などを炊いて食べていた。

愛宕講は米を五合ずつ出し合つて賄をしていたが今はやっていない。

伊勢講を作り二人ずつお伊勢参りもしていた。

五月の節句には粽を天井に吊しておいてそれを眺めては仕事に出て行つたと言う。

お盆は、十三日に迎え火を焚き精霊を迎え十四日は御供物をして十五日の午前中に送る。精霊を送つてからは精進落しと言つておじやを炊いて食べていた。十四日は傘揃いと言つて区長さんの家で踊る。ザンザコ踊りをお宮で踊る。ザンザコは戸倉弁で、ザンザカは道谷弁である。

お祭りは十月九日が戸倉大森神社の秋祭りである。祭りには當子があつて男の子のある家ばかりで行い、當子とは神主さんへの取り次ぎをする手伝いの男の子のことである。當子は祭りの主役で旦那役は当番制で家の順番に廻

して行い賑やかにご馳走をする。宮田はお宮の田を小作で作り、祭りの費用に当てる。お祭りの行事も戸数が少なくなつたので當子もなかなかなくて行事を続けていくことが困難になつてきた。

伝説として戸倉の由来は、氷ノ山のお寺から戸だけを持ち帰つたので戸倉としたという。

明治二十七年に戸倉に大火災があつた。その時戸倉の村がほとんど全部焼けたが、山根家が一軒だけ焼け残り炊き出しをした。

戸倉名産に戸倉箸がある。水木で作る箸で祝事などに使う片箸であり、水木は白い木である。戸倉下駄も大正の頃には作つていた。

スキー場が盛んな頃が村が一番活気があり民宿も一杯になり上野辺りまで依頼することもあつたという。その当時に眺めた寝具が今は使うこともなく家の中に眠つているということである。スキー場が出来て多くの人の出入りがあるようになってからは人情も薄くなり村が変つてきたようだ。

《第一集所載》

口碑おぼえ書き

道谷日傘

昔は農家が雨の日野良に出るには蓑と道谷日傘で出ていました。この日傘は肩迄かかる位の大ききで、日傘雨傘に丁度もってこいの笠でした。

笠の材料は笠木と云って、音水や引原の山迄も切りに行っておられたそうで良い木一束で八十枚位も取れる木もあったようですが、岩山や崖などに生えている木は駄目であったようです。

笠木は小刀と口でくわえてへぐるので中々苦勞もあり、年季がいったようです。

冬の間の仕事でいろいろの火の明かりでひと冬に一人が二百枚位も編んで、笠組合という組合に納品され、おもに但馬方面へ出荷されていたそうです。

戸倉箸

材料はみづきという木で、白の丸い上品な箸でした。今でも但馬の横行では白箸を作っておられるとか。

戸倉のお宮様より奥へ入って、又道谷の赤谷より氷ノ山の奥は皆横行の山です。

中谷こめ

引原ヒゼン

ヒとヒで語呂がよかつただけでしょう。

原の疫病

川の水を飲用していたので疫病に罹りやすかつた。原部落は一番早く水道が引かれました。

野尻の大声

部落が下垣内、林、向、と離れているので自然に大きな声を出していたようです。

飯見の心経

昔から日照り続きの雨乞い、又は病氣平癒祈願等集まってよく心経をあげていました。

皆木の将棋

昔は田畑の仕事で何の娛樂もなく野休みなどには将棋をして楽しんでいました。又皆木の一番上に観音様がお祀りしてあります。旧曆の八月一日（現在は九月一日）が縁日になっていて、そこに集まって将棋をしておられたそ

うです。

上野の小相撲（子供の相撲）

宝殿相撲が盛んでしたので、それにちなんで小相撲も盛んでありました。

有賀の長口上

この部落は挨拶の長かつた人があつたのでこういわれたと思います。

齊木のナスビ雑炊

齊木は日当りが良いのでナスがよく生り又、台風の際もなくナスがよく取れました。昔の事とて雑炊にもして食べられたと思います。

安賀の早ずし

八幡神社のお祭りが十月二十一日です。それより早くおすしを作っておられたのではないのでしょうか。

今市の三人五人

小村であるが意見がなかなかまとまらなかつたようです。

小野の大酒

お酒をよく飲む人がたくさんあつたようです。

谷の長羽織

昔は男の人も着物に羽織を着て出かけておられました。奥谷の方の旦那さ

んが長羽織で出かけておられたとか。

日見谷はなかつたようです。

取りようによっては、おとしめたり、からかいのように読まれる方もあるかもしれません。これはゆっくりと時を刻んでいた古き良き時代に生きた私達の先祖のユーモアであつたと思ひ、あえて探し出し、筆にいたしたもので、他意はございません。

《第二集所載》

子どものあそび

大成 みちよ

遊びをする事によって友だちがふえます。友だちと遊びを考えます。自分たちで決めたまきまりであるから守るようになり。遊びの中で体をきたえる事も出来ます。

最近の遊びは大分変化してきました。体をまるごとぶっつけてあそぶようなことは少なくなり、ファミコンのように器具を使う遊びは手先を使い、頭を使い良い面もありますが、同時に大勢友だちと楽しむにはやや不向きだし、なかなかいつでも、どこでも遊ばせません。遊びの場も屋内に限定されます。しかし昭和中期頃迄のあそびは、殆どが屋外でのあそびで、それも自分たちで作った道具を用い、あるいは大勢

の友だちと決まりを考えての遊びでした。しかし男の子の中には親分の子がいて、采配をふり子分を作って大将となっていた子もいました。

そして男の子のあそび、女の子のあそび、男の子も女の子も一緒にあそべるものも沢山ありました。

例えば男の子のあそびは、ブチゴマ、車輪まわし、水鉄砲、くす玉鉄砲、ちゃんばらごっこ、戦争ごっこ、炭やきあそび、ターザンごっこ、等々。

女の子のあそびは、お手玉、おはじき、ままごとあそび、あやとり、まりつき、ゴム飛び、石けり、野花あそび、ハンカチ取り、等々。

そして男の子も女の子もあそぶものは、缶缶けり、竹馬、くぎさし、鬼ごっこ、しりとりあそび、下駄かくし、竹とんぼ、ぶんぶんごま、けんけんば、お天気占い、猫とネズミ、おしくらまんじゅう、ビー玉あそび、ぱっちゃん、等々。

次にあそび方をかいてみましょう！

かくれんぼ

(唄) かくれんぼする者寄っておいで、とか、かくれんぼする者この指にぎれとうたいながら友だちを集める。

- 1 かくれてよい範囲をきめます。
- 2 じゃんけんで鬼をきめます。
- 3 鬼になった者は木や壁等に顔を当

て目をつむって両手で顔を覆います。

4 鬼は大きな声で「もういいかい。」と言います。

5 かくれる者は「まあだだよ。」と言いつながらかくれてゆきます。

6 何回か鬼の者と、かくれる者と互いに云いながら進めます

7 みんながかくれると、「もういいよ。」と言いますので鬼は探しに出ます。一人みつけると「○○ちゃん

みつけた」と言って鬼は最初目をつむっていた所へ走って行ってポンとたたきます。

8 鬼が探しに行っている間に誰かが出てきて鬼のいた木の辺りへきて木等をたたくと又かくれる事ができます。

9 みんなみつかると一番はじめにみつかった者が鬼になります。

くぎさし

1 石の少ない場所を選びます。

2 それぞれがくぎを持って集まります。

3 じゃんけんで順番を決めます。

4 人数によっては始める形を作ります。

5 くぎを地面に打ち立てるように、くぎの頭を持って思い切り土にさせるように投げます。

6 くぎの立った点と前の点を直線で

結び自分の陣地を広げて行きます。

* この遊びは大変危ないのでみんな気をつけて遊びます。

ぶちごま

このこまはそれぞれ自分で作ります。直径五糎位のこまが一番よくまわりま

す。桜の木はかたくてしっかりしたこまができます。

鉛筆のように、しかし鉛筆よりはずっと大きく削ります。紐は藤かざらを使

います。長さ五十糎程の棒にかざらを結びつけてこまをたたくようにしながら起こしていき、棒の扱い方でこまの廻る速度が変化します。

ぱっちゃん

マンガの絵や、戦争の絵が描いてある丸いボール紙。大きいものもあれば小さいものもあってあそぶ時各自がぱっ

ちゃんを持ち寄り地面に並べます。

相手のぱっちゃんの上へ思い切りたたきつけると地面に置いてあるぱっちゃん

は裏返ります。

軽い風圧でふぁっと浮いたりします

のでぱっちゃんに蠟を塗ったりして分厚くしたりたたきつけた時の風圧を強くすることもあります。

あやとり

一米五十糎位の糸糸を用意し輪を作

り両方の手の指にかけて色々な形を作り出します。

二人一組で互いに崩さないように取り合って行きますが少しでもまちがった糸をとると崩れてしまいます。

お手玉あそび



(おしと・おじゃみともいいます)

手作りのお手玉を十個位もっていろいろなあそびが出来ます。

◎二個であそぶ方法

- 1 両手に一個ずつ持ちます。
- 2 右手のお手玉をほうり上げます。
- 3 左手のお手玉を右手に移し、落ちてきたお手玉を左手で受け取ります。
- 4 これをくり返します。

又右手にだけ二個もって一個をほう

りあげ落ちる寸前もう一個をほうり上げ落ちる寸前もう一個のお手玉をほうり上げ片方の手だけで二個を上手にほうり上げ受けていきます。

五個あそぶ時には一個を上へほうり上げている間に一個つかんで落ちてきた一個と一緒に手の中へ入れ、つかんだお手玉だけ下へ置きます。次に一個をほうり上げている間に二個つかみ一個の時と同じようにします。三個も四個も同じようにし最後に四個つかんでほうり上げていた一個を手の甲にのせます。お手玉が十個ありますと色々とあそび方を考えていきます。

(唄) おひとつ落としておさら
おふたつ落としておさら
おみつつ落としておさら
おつかみおつかみおさら
又いちりんこいちりんこおさら
とも唄いながらあそびます。

まりつき

(唄) いちれつ談判はれつして
にいで日光東照宮
さんで讃岐の金比羅さん
しいで信濃の善光寺
いつつ出雲の大社
むつつ村々地蔵さん
ななつ成田の不動さん
やっつ八幡の八幡さん
ここのつ高野の弘法寺

とうで所の氏神様

これ程信心したけれど

浪子の病気はなおらない

唄をうたいながら自分たちで色々ともりをあやつり、ついてあそびます。

《第二集所載》

栃餅

大谷幸子

栃餅の作り方について書いてみます。私が初めて栃餅を食べたのは子供の頃で、近所のおばあさんに貰って食べました。

村の神社の森に一本の栃の大木がありました。おばあさんは、少しづつ落ちた実を拾っておいて作られたのだと思います。当時のことですからあまり餡は甘くはありませんでしたが、柔らかくてとってもおいしい餅だなあと思いました。

まず初めに、栃の実拾いをします。栃の実は樹齢百年以上の古い木でないと生りません。このあたりでは、国有林の水ノ山くらいでしょうか。栗とは違って、山の頂上の方には栃の木はなく、山裾に生えています。実が生るのは栗と同じ時期で十月頃です。その頃は熊が冬眠前に餌をさがしているときですから、用心をして行かないといけ

ません。腰に鈴を着けて行けば良いと言われております。家を朝暗い内に出ます。

栗の実よりも大きいので、成り年の時は一度に一斗以上も拾うこともあります。それを背負って山を歩くのはなかなかの重労働です。又生りの悪い年は、一升くらいの時もあります。

実を拾ってきたら筵むしろに広げてよく乾くまで干します。よく乾かしておかないと虫がついてしまいます。実は大変に苦いにがです。栃餅を作る時はよく乾かした栃の実を八十度位のお湯に浸けて「栃へし」という道具を使って上手に

外の鬼皮だけを取り除きます。私が最初に栃餅を作ったのは、嫁いでからで、義母と二人で近所の方に教えてもらって作ってみました。鬼皮の取り方を二人共あまりよく知らなかったので、実を熱いお湯で少し煮ました。すると実が柔らかくなりすぎて、中の実がころりと剥けずにこまかくなってしまいました。爪で一つ一つ丁寧に義母と二人で鬼皮を取ると、爪が痛くて困ったこともありました。今は義母一人で上手に皮を剥きます。

皮を剥いた栃の実は流水で十日ぐらいさらします。すると、あくの為に泡の水が出ます。次に樽や櫛の木を焚いて取った灰をお湯で硬めにねって、栃の実をまぶして三日か四日ほどおきま

す。この時、灰のあくがきいていないと実の中が黄色ではなく白い色になってしまつて、餅を機械に入れた時に栃の実だけがごろごろとしてなかなかつぶれません。灰はとても大切です。米一升五合に対して栃の実は一升くらい入れます。もち米をセイロに入れて上に栃の実をのせて蒸します。あとは普通の餅を作る要領と同じです。



《第三集所載》

農家のくらし (その一)

河野 トミエ

現在の農村は急速な発展に伴い、田舎らしさがなくなったのではないかと
思う。自然の移り変わりや、四季の
変化には昔も今も変わりはないが、農家
のくらし及び農作業などは本当に想像
もつかなかった程の進歩に依り、すべ
ての農作業も機械化されて、若い人達
に昔の作業の仕方を言っても理解でき
ないだろうと思う。

これは、今年八十四才の御老人にお
聞きした話である。だから言葉も昔の
人達の訛や方言が入っている。暦では
新暦もあつたが、祀り事や農作業は旧
暦に基づいて行われていた。新暦であ
れば大体一ヶ月遅れの同じ日となる。
気候の変化とか農作業の目安なども旧
暦(陰暦)の方が季節によく合ってい
るようである。明治、大正時代、昭和
の初期はあまり変化はなかった。大正
十三年頃、此の辺りに電灯が灯った。
私が生まれた頃である。各家庭に電灯
が灯り、ランプやカンテラの生活が一
変して明るくなったが、当時の祀り事
や農作業にはあまり変化はなかった。
昭和の戦争により、人の心のあり方や
戦前の道徳心も民主主義に変わり、だ

んだん希薄となったが、このような流
れの中で、昨年の阪神・淡路大震災で
失われつつあつた人々の心のふれあい
や、助け合いの精神が甦つたのではな
かろうか。

(注) 旧暦で書こうとすると日の間隔
がずれてわからなくなり、何月とか
言うのが間違っているかも知れませ
んがお許し下さい。

年中行事と祀り事

年中行事と祀り事については、この
冊子の第一号や二号の所々に記載して
あるので少し書かれていないことを書
く。

齊木地区では、正月三日の間に宮参
りをする。氏神様にお参りして一年の
無事を祈念し、家内の無病息災をお祈
りする。

元旦は現在のようにテレビもラジオ
もなかったが、あまり隣近所へも行か
なかった。

二日、朝早くから起きて、仕事の仕
初めと言って、農家では殆どが藁仕事

なので縄のない初めをする。子供は書
き初めをする。

三日、三日間は戸主である男が神祭
りもしていた。これは女の人を休ませ
るための思いやりであつたと思う。三
日は浮上と言つて、男も女も休みの日
であつた。

七日、七草雑炊「七草粥」は、お正
月からお餅を沢山食べているので、胃
を休めるために色々な野菜を食べて栄
養のバランスとか体の健康を考えてい
たものと思われる。

八日、昔の役場勤めの人達など官庁
の出始めの日であつた。

九日、山の神様を祭る日となつてい
た。山の神様は所々にあつて、山仕事
をする人達がほとんど信仰していたの
で、その日はみんな山仕事は休みお参
りした。山の神講もあり御馳走をして
食べていた。

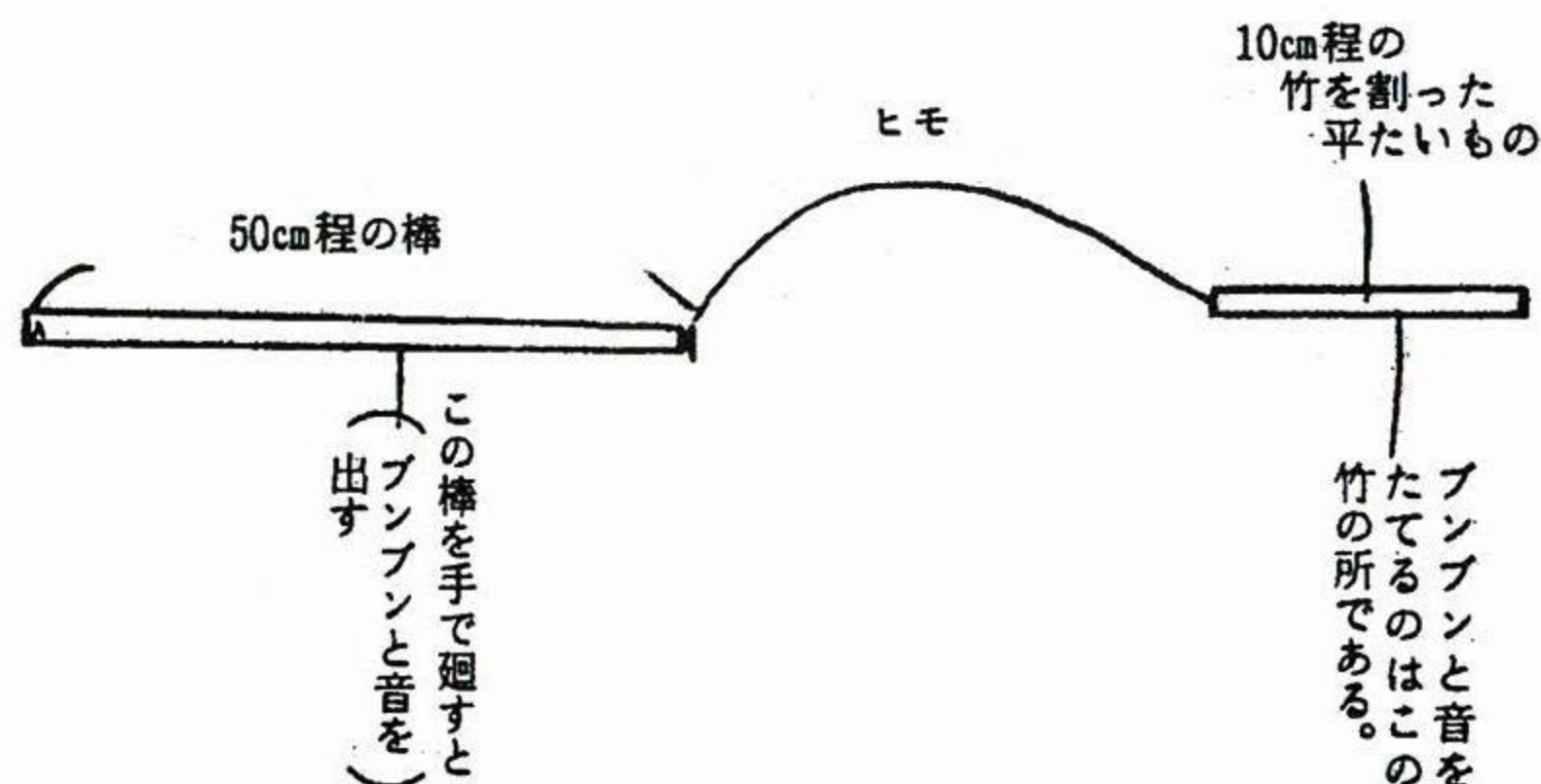
十日、戎さんの日であるが此の辺り
ではあまりお参りする者はいなかった。

十一日、年桶下ろしをする。そして、
神様のお花を立て替え、注連飾りを取
つてこれで松の内が終わる。農家では綱
打ちをしていた。

十四日、火浄事。私達のところでは
「ほじより」といつていた。十一日の
年桶下ろしで下ろした神様のお花や門
松、お札さんなどを持ち寄って焼く。
大体辻とか三叉路などで行つていた。

これは家から離れて火の用心の事も考
えての事だろうと思う。子供は二日に
書いた書き初めも焼き、煙に乗って高
く揚がると習字の手が上がると言つて
喜んだものである。牛も引いて連れて
行き、とんどの火に当たらせていた。
とんどの灰を額につけると風邪を引か

正月十五日に使うブンブン



ないと言うので皆灰をつけて輪になって当たっていた。焼けた松の枝を拾って帰り、戸口とか牛小屋の戸板に差していた。これは悪魔除けの意味である。又、灰をバケツなどに入れて帰り家の回りにふると蛇が入らないとか清めの意味もあるのだと思う。これは現在でも行っている。

十五日、小豆粥あずきがゆを炊いて、神様にお供えする。屋敷内の柿や梅の木には木の又の所にも粥をすえる。果実が多く生るようにとのことである。

厄払い、ブンブンと言うものを作り村外はずれまで廻しながら行き、村の境界の辺りに立てて帰る。「餅も柿もないぞー」と声を合わせて叫びながら廻し出る。

正月送りのことだろう。この日は、村の人が集まってお日待も行う。

二十日、二十一日はお大師講である。土井内で当番の者が米一合を集めて廻り、小豆御飯を炊いて皆で食べる。一合なので茶碗に二杯の御飯を食べる。心経三願さんがんを繰くってから食べる。お大師講は今も続いているが、毎月一回のふれあいや隣保の集金日として夕食後集まり茶菓子程度で話し合う。

二十三日、稲荷講を行う。小豆御飯を炊いて藁わらづつに入れてこれを軒下に置いていた。稲荷講は、年三回、今も続いている。

二十四日、愛宕講あたごである。愛宕講は火の神様として祀る。火の用心のお札などを配っていた。この日は混御飯まぎりい（かやく飯）を炊いて食べていた。愛宕講も年二回今も行っている。

二月一日、一日正月ひとえしやうがつと言って、一夜祝をして一日だけの正月で、お正月と同じようにお祭りをする。二月一日は村では大日講を行っていた。昔は牛のいる家だけが参加して講を作っていた。当番の者がお寺へお参りして、お寺ではそうめんを出して下さって、そうめんをよばれて帰る。今は、うどんを頂くとか。今では牛のいる家もなくなつたので、交通安全の祈願として村内全員が参加して親睦会として行っている。

二月三日、節分祭で氏神様や各部落のお宮様で大きな火を焚きお参りする。二月四日は立春。

三月三日、節句。ひな祭りひなまつりで女の子の節句である。昔は土で作った人形が主であった。掛け軸のひな人形になったのは大正の初期から昭和の前半である。菱餅ひしもちやあられ、押しぬきおしぬきやあげずあげずなどがすえてあるのをたばって（頂くこと）ひなあれひなあれをしていた。

三月二十一日、お大師様のご縁日

あり、日見谷のお大師様に大勢で連れ立ちてお参りしていた。お接待などもあった。

四月八日、俗に四月の花と言って、お釈迦様しやくかを祭る日で、昔は戸々の庭先に高い棒を建てて、山から取ってきたつつじの花や、藤の花、山吹や石楠花の花などを竿の先に括りつけて、根元には薪を一束置いて水をかけながら拝むいわゆる天道花である。又、近所の去年亡くなられた家へ花初はなはじめとしてお参りする。

五月五日、菖蒲節句は男の子の節句である。菖蒲の根で角結びつのむすを作り男の子にはち巻きをしてやる。牛の角にも結んでやる。菖蒲、すすき、よもぎを草屋根に刺して屋根葺きかぶせと言っていた。風呂にも入れて薬風呂いすずにしていた。ちまきを作って食べる。ちまきは、台所の水がめの上などに吊しておき、頭が痛くなった時食べるとよいと言われていた。

六月は、田植えが終わると早苗さなほ上りや野休みなどで慰労なぐさめをしていた。若者達は農繁期いそひが終わると適当に区長さんに休みの日を願ねがい出て、願ねがい休みをしていた。若い人達の交流の場を作りクラブに集まって石を持つ力持ちなどを

して遊んだり、盆前の休みには盆踊りの稽古きこをしていた。

田たの神祭かみさん、田植えが終わった最初の亥の日には、田の神祭が行われた。ひおうぎの葉に栗の葉を添そえて、水当口みずあてぐちに置きだんごをすえる。大人がすえて拜むと子供が籠かごを持ってたばって廻るので、大きい人と小さい人が一緒に歩いていると、田の神祭かみさんだと笑ったものだ。

七月三十日は、川そそさんで千保川と齊木川の合流点でお祀りしていた。当番は齊木の一区地区が順番に祀っている。現在も続いているが、今は齊木部落全体の行事として部落の役員さんも手伝ってお祭りをしている。

お盆は十三日の晩は迎え火を焚き、精霊せいりやうさんを迎える。十四日、十五日と祭り、十六日の朝早く齊木川の流ながれに送っていた。今はゴミ問題などで流さなくなっている。夏とは言え早朝さあけの川の水は冷たくて、とても清々すがすがしい気持ちであった。十日と十七日は、観音様のお祭りくわんおんまつりで、お坊さんにも参って頂き大勢お参りしていた。

お祭り、彼岸が過ぎ、二百十日が過ぎると五カ村の氏神様で、安賀の八幡様のお祭りである。お祭りはとても賑

やかで、特に名古屋はその筆頭の岡田家の馬が出るし、一番御子の名古屋御子は田路株より出るのでお祭りは大忙しだ。賑やかなお祭りや宮相撲が終ると宮芝居である。お宮の舞台では、どさ廻りの芝居見物でお宮の庭や境内は座席を取る人で一杯になり、中入りに食べる弁当を持って大勢の見物人がつめかけていた。お祭りが終わると、稲刈りや秋の取り入れと忙しく、長い秋の労働が終わると亥子餅を作って食べる。

十二月は、十三日の煤払いをして、年末にお正月の準備をする。昔はお餅を沢山作っていたので二十五日や六日頃になるとあちらこちらでお餅を搗く音が聞こえていた。よもぎを入れたり、くず米で作ったお餅をたくさん作っておいて、お正月まではその餅を食べる。お正月には白いお餅で雑煮を炊いて食べていたので、少し大家族の家では餅を二斗とか特に多い家は四斗程も作ったと言う。餅は二十八日にはあまり搗かず、三十日までにはどの家も作っていた。

正月の準備は門松を山に取りに行ったり、神様のお花を取って来たり、雪の降らないうちに準備をした。

囲炉裏側の教訓

囲炉裏には三本足の五徳と言うものを置き、火を焚いて鍋をかけたたり、かす（茶を沸かすもの）をかけたたりするのには便利であった。天井には、火棚が吊るしてあり、金属で作った自在が下がっていて、茶瓶がかかっていた。囲炉裏には、大体座る場所が決まっていたようである。横座はその家の主人が座る。縦座は客人が座る場所であり、下座は火を焚く人が座り、女は棚元と言って給仕をするのに便利なように、戸棚の所に座る。こうした決まりの中で、世間話や、家族の話し合いが持たれ、自然と家族の統制や教訓が培われていったものと思われる。現在の家族には、そんな雰囲気はなくなったようだ。囲炉裏が無くなったのと共に：。囲炉裏は家族の団らんのもであった。

《第三集所載》



「原」の習わし

大成 みちよ

昭和二十八年頃記録されたと思われる書き物の中より伝統行事として現在も伝えられている習わしや、廃れて行った習わし等について記してみます。

宍粟郡の南部に位置する農村と比較してみないとわかりませんが、一年のうち二〇〇日から二七〇日余りも家を留守にし、山小屋での生活を送っている国有林労働者が大半を占めていました。

農業をしている家でも殆んど製炭などを兼業し、山での生活が多かったのです。家を留守にすることが多いので、男性は年中行事とあまり関係出来ない生活を余儀なくされる場合が多かったのです。

この村の年中行事は、すべて旧暦でありました。一度新暦に改めたことがありましたが、二月は雪のため働きに出ないので二月に正月を祝う方が便利であるといった理由で、再び旧暦に改めました。

神戸村（一宮町）より北部の引原川沿いの村々は旧暦を用いました。

歳桶 II 大晦日の晩、納戸に神棚を吊る。棚にはトシムシロという新しい

苙を二つ折にして敷き、その上にトシオケを置く。

播州一帯では歳桶と言うが、原地区ではシメオケとも言う。一斗入りの桶で高さ三十三・五糎、直径三十三糎、周囲には七五三の注連縄を張る。

桶の中には米一升二合を入れ、その上にお鏡餅、小餅十二重を入れる。閏年には十三重入れる。お鏡餅の上には橙か密柑を置く。さらに栗、干し柿、榎の実、小豆等を入れるが、小豆は他のものと混ざらぬように紙に包む。

又、その年に儲けた銭の中より、「祝い込む」といって歳桶に入れる。納戸のほか蔵のある家では蔵にも同じようにして歳桶を飾る。

蔵が二つもあると三カ所に飾る。この歳桶の祝い込みが終わらないと雨戸を閉めないで十二時迄に祝い込む。

歳取火 II 歳桶を祝い込むまでは、囲炉裏に火をどんどん焚いて寝ずに待た

ねばならないと言われている。この火のことをトシトリビと言う。

昔、鬼が毎年大晦日の晩に村に出てきて、人間を一人ずつ食った。

或る年、鬼どもがあの家にはジジイしかおらないので、今夜は蜘蛛に化けて囲炉裏の上から降り、あのジジイを食ってやろうと、話し合っているのを盗み聞いた当のおじいさんは、その晩村中の若い者に集ってもらって、囲炉裏の火をどんどん焚いて降りてきた蜘蛛を火の中に投げ込んで助かった。このため歳取火は沢山の木を焚くのだと言う。夜、蜘蛛を嫌うのもそのためらしい。

これは、原の渡辺金蔵爺さんの話である。

歳神さん 百姓の神様で女の神様だと言う。農家では、昆沙門天サンと言って拝むともいい、又、それを豊年サマとも呼んでいた。

床飾り デイの床の間に、正月の床飾りをする。オキジという木製の三宝にお鏡餅二重、その上に串柿、その上のみかんを置く。又、栗や榎の実を餅の横にシャシャ木（ヒサカキ）や榎を押した花瓶を供え、その花の周りを注連縄で張り、ユズリ葉を注連縄に挿す。この時の注連縄は大晦日の晩に作る。又、床には歳徳神の絵入りの軸をかけたり、学校へ行っ

ている子供のある家では、天神さんの軸を掛けたりする。又、家によってはお鏡餅に昆布を垂らすこともある。

床の前には床神さんと別に脇に歳苙を敷き、その上に道具サマといって、道具を洗い清めて祀り、お神酒とお餅を供える。マエラにまつる家もある。道具は職業によって異なり、農家ではカマ、クワ等。炭やきはヨキ、ノコ、カナヤ等。杣人はヨキ、ノコ、サシガネ等。大工はカンナ、カネジャク等である。鍛冶屋は鍛冶場にまつり、床にはまつらない。

雑煮 雑煮はすまし汁で作る。雑煮碗を使い、ウワオキには、人参、豆腐、葱、栗、牛蒡をいれる。

三日間は雑煮で床神、カマド神、歳神、恵比須、大黒様に供える。

この三日間、神々にお供えした雑煮の餅の残りを串にさし、台所の棚にさしておき、初めての雷の鳴った時に食べると雷の災いを避けられるといい、これを夕立餅と言う。

若水 元旦の朝、明け方、主人が川に若水を汲みに行き、東を向いて汲む。その時、新しい杓を持って行き、普通は杓で十二杯、閏年には十三杯汲む。このため普段は杓を買わず正月に買う。

歳男 歳男の役は、若水汲みと、三日

間の雑煮ごしらえである。

歳取り 九日の朝、串柿を食べると年をとったという。

牛の祝い 元旦の朝、牛に餅と干し柿を食べさせて祝う。又、正月の丑の日に祝う家もある。

門松 原では殆ど門松は立てない。総代が、神社へ行って立てるだけである。特別に立てる家では竹囲いして松竹梅を立てる。この辺では、一般に松が乏しく、引原では榎を束にして門松とする。

元旦の神詣り 家族皆で氏神さまや地区内の神々へ餅と二、三合の米を袋に入れ、お賽米を持って詣る。

干支の休み 正月の三日間は仕事を休む。又、十二日迄の間に自分の年

「干支」の日は休む。

伐りぞめ 一日が仕事始めで、朝祝いする迄にハラ仕事といって縄や草履を作り、四日を伐りぞめ、こりぞめ、出ぞめといって明け方の山へ行き、薪を伐り、昔は伐った木の株に餅や茅を供えた。そしてこの日から仕事を始めるといふ。

三日の不浄 正月の三日間は、不浄といって外出しない。この日旅立つ必要があると二日に他家で泊まって三日に出立する。

七草の雑炊 雑炊に餅を入れ家内の神々に供える。又、農家によっては

七草のオジヤも生木（ナマキ）に供える。このオジヤを七軒廻って貰うと夏瘦せしないという。この日迄雑炊はしない。

七日 正月七日は日が悪いといい、カセギには出ない。家の仕事はする。

山の神 正月九日は山の神様の祭りで休んで山には行かない。この日の山神が山の木を数えるともいふ。又、種を蒔くともいふ。この日山へ入ると、木と間違えられて数え込まれるといけないからだという。囲炉裏の間にある神棚に餅を供えて山神を祀る。

歳桶おろし 正月十一日の朝、神々の飾り物をおろし、歳桶の餅は朝、祝いの雑煮にする。

とんど 正月十四日は、とんどといふ正月の飾り物を三カ所に集めて燃やし、家族みんなが行く。このとんどの火にあたるとマメ「元氣」になるといふ。又、灰を持ちかえって家のまわりや畑にまくと虫除けになるともいふ。燃え残りの木を数本持ち帰って粥を炊いたり、その木の火で灸をすえるとマメになるといって、その木を囲炉裏にくべて、ヤイトの火を作る。又、鏡餅を焼いて持ち帰り、小さく切って、家内の神々に供え、十五日の小豆粥にその餅を神棚からおろして入れ、その小豆粥を神々

に供える。

子供の書き初めをとんどの火にあて、煙や熱気によって遠くへ、又、高く上がって行くと字が上手になるという。この日、榊やユズリハを床神さんや家内の神々に供える。

小豆粥 正月十五日に小豆粥を作り生木に供える。又、家内の神々に供え、十五日粥といって、この日迄粥はたかない。

コモノ 正月十五日迄を正月と考え、庭から室内に入る所に菫をたらし、庭と奥庭との間にもたらず。

初大師 正月二十日に家々で祀り二十一日に大師講に詣る。

マユタマ祭り 正月十七日が年越しといつて、その晩マユタマ（柳等の枝にマユのような形の餅や縁起の良いものをつるした飾り）を作り十八日に近くの神々に詣る。又、家内の神々にもお供えする。

米の粉でマユの形に作ったり、小判形のものや、猫脚といつて、猫の爪先に模して厄除けのためのものを作る家もある。

恵比須講 毎月二十八日、大日さんといつて、大日如来を牛の神さんとして祀る。これは牛のいる家だけで作つたお講で、正月だけ特にエビス講と言う。

節分 新しく餅を搗き歳桶を祀る。二

夜二日といひ二日置いて三日目に歳桶をおろす。節分の日、年内に家を建てて家では、その土地に青竹を立て、シメ縄を張る。

星まつり 節分の夜、寺で行われ、年まわりの悪い人が厄除けをしてもらう。四国から行者がくることもある。

神様の正月 二月八日、この日を神様の正月といひ、仕事を休む。

ヒトエ正月 二月朔日のことで、朝、家内の神々に御飯を供え、氏神様に詣る。この日は仕事を休む。

初牛 村に祀っていないので他の村へ詣る。

ユンマト 二月十五日、ユンマト（弓的）といつて、初めて男の子供が生まれると弓を作り、子供に持たせて、母親が連れて氏神様に詣る。弓矢八幡と言うためであらう。

春亥ノ子 二月の初めの亥の日、農家ではオハギ又は、餅を家内の神々に供える。春の亥ノ子は夜供えると良いと伝えられている。

雛節句 三月三日の節句のことで、表の間にお雛さんや掛け軸を飾り、節句酒といつて桃の枝を挿したお神酒や、赤、青、白、或いは黄の三色の菱餅や、大豆や、ナンバキビの煎つた中に餅花といつてアラレを混ぜた

のを供える。

午後、ヒナ荒れといつて、子供たちはどこの家でも行つて食べ荒らす。荒れた程よいという。

金比羅サン 三月十日。

彼岸 彼岸の中日、彼岸団子といつて米の粉で作ら茹でた団子を佛様に供える。又、地区に祀つてある、八十八ヶ所に詣る。

花節句 四月八日を花節句といひ、七日に竹を採つてかえり、その晩、カド先に立てる。竿の先と、一間ほど下の所との二カ所に、山吹、ツツジ、藤の花を結びつける。

上部の花はお釈迦さんに、下部の花はマムシさんに供える。山で蝮にかまれないためにするのである。そして、八日に佛壇へ団子かオハギを供える。

行方知れずになつた人があつると、その花を焼き、煙の昇る方向を探すとよいという。この日地区の人は休む。

男節句 五月五日は男節句ともいひ、前の晩にヨモギ、ススキ、菖蒲を屋根を葺くといつて、結んだものを軒に挿す。タマキが七本（必ず奇数）あれば七本挿す。菖蒲の根のついたままを二本突き出すように結んで子供の額に当て、葉先を後頭部で結んで鉢巻きすると、年中頭が痛くない

と言う。又、菖蒲風呂に入る。

田植え 三月の節句前後に苗代作り、六月三日から二十日頃迄に田打ちして植える。卯の日に植えると悪いという。又、播種してから四十九日に植えることも忌む。並植でこれ迄は沢山収穫しようとして苗を五、六本以上植えた。

田植えの共同は十四、五年前迄、各組毎でしていた。地区全部の田植えがすむと野休みといつて区長がふれてまわり二日休んだ。この休みの日に田の神祭りをする。

田の神祭り 田植えのすんだ後の野休みに行く。シンコという団子を作り、デイの間に日扇と茅を立て、その前にシンコを入れた重箱を供え、家の神、田の神を祭る。

戸主が日扇二本と榎や栗などと一緒のシンコを重箱に入れて田に行き、水口に日扇を敷いてシンコを供える。亥の神として祀る。

この時子供たちがついて行き、お供えしたものを喜んで食べる。

大師誕生 六月十五日をお大師さんの生まれた日として祀る。

お稲荷 六月二十三日、お稲荷さんの祭りで、昼から晩にかけて稲荷社の前の広場で相撲をとる。

土用 土用の丑の日には鰻、セキショウ、ヨモギを食べると薬になるとい

う。

川ソソ祭り 新曆七月三十日に川ソソさんの祭りをする。青年たちが公会堂に蔵しまってある組立式のお堂を川原に出して建てる。氏神様に合祀してある祠を降ろして入れる。又、神社の土蔵にしまつてある、三種の神器を供える。この神様は女神であるが喧嘩好きでその夜は必ず喧嘩がある。

夜の八時頃より神主さんがこられて祭りが行われ、盆踊り式の踊りが男女によって行われる。

水神祭り 川ソソ祭りの日、川原に建てられたお堂の傍に水神さんを祀る。四斗樽の前に台を設け、その台の上に水神さんの祠を置き、お賽銭を供える。

七日盆 盆はこの日から始まると言う。この日に墓掃除をし、佛具類を川で洗い、米紛の団子を仏壇に供える。

盆花 盆の花といい、キキョウ、オミナエシ、カルカヤ、ミソハギ、シキビ、百日草で七日から十二日迄に山から採ってくる。

精霊迎え 子供がオガラに火をともして川に行く。十三日に迎え火をし、十五日は送り火で川へ行って送り火をたく。十六日に送る家もある。

無縁棚 無縁さんのこともショウロウという。十三日の昼、縁側の柱かその近くに棚を作り、棚には竹筒に盆の花を挿し、オガラで梯子を作り地面から棚に掛け、おショウロウさんが登るようにする。

この棚には佛壇と同じようにお供えをするが、栗、柿、山椒を供える。水を十三日の晩に一回供え、お茶は毎日三回供える。

墓詣り 十四日の朝早く、墓に詣り、盆花、水、線香、団子を供え、家族みんなで詣る。

盆の祭り方 佛壇からクリダシや過去帳を出し、別に台を設けて莫ごさを敷き、ソーメン、御飯、団子、チマキ、皮をつけた黍きび、茄子等の野菜類に、佛さんのオイコにするためだという葉や根のついたままのズイキ芋等を供える。十三日の晩はオチツキといて最初にソーメンを供え、晩は御飯、夜食に団子、十四日は佛様の御馳走日といい、朝は御飯、昼はチマキ、晩はソーメン、夜食にヒエナを和え物にして供える。十五日も同じ。

初精霊 初盆を迎える家に対して、親戚の者や近所から、ソーメンに線香を添えて、十三日にお供えする。十四日墓参りが終わってから、初盆の家へ行って新佛を拜む。お供えとし

て必ずソーメンは持って行く。

精霊送り 十六日の朝、佛様のお弁当だといって赤飯のおにぎりを作り、重箱に入れて川原へ持って行き、オガラガラの梯子を舟として、その上にズイキ芋を置き、おにぎりも二、三ヶ蓮の葉にのせて流す。残りのおにぎりは家に持ち帰る。又茄子は佛さんの馬だといって棒をさして馬の形にして流す。拜んだあと子供たちはお供物を取り合う。

二十四日盆 盆の終わりは二十四日で、二十四日盆という。この日をもって盆の終わりとし、子供たちは八幡神社で神楽踊りをする。又、各家の戸主は木を小さく割ったものを三束(氏神様の境内に三祠あるため)もって氏神様の境内の入口で火を焚く。マンドという。

地区のお大師さんや稲荷神社でも同じ事をする。又、畑の中でも虫除けだと言って、火を焚く。そしてこの晩氏神様で盆踊りをする。
チャンチャコ踊り 八月二十四日に行われる踊りで、この沿道の各村で行われ、この日は休む。

ハッサク 九月一日を八朔というが、何も行事はない。

芋名月 九月十五日の月見の行事はないが、この日を芋名月又は、豆名月ともいう。子供たちは、この日はど

この芋を取ってもよいと言われている。各家では、芋の入った混ぜご飯を作る。

二百十日 この日は厄日で、仕事を休む。二百二十日は休まない。
秋の彼岸 彼岸入りの前日にホガケをし、神棚と佛壇に供える。彼岸に入ると、佛さんに湯茶を供え、彼岸の中日に団子を作る。

氏神祭 九月十日は、氏神様の八幡神社の祭礼がある。この日から神様は出雲に行かれ、十月に帰られるという。

山ノ神祭 十月九日は山の神を祀り、一日仕事を休む。

金比羅さん 十月十日は金比羅さんで山崎の金比羅さんへ詣る。

亥ノ子 二番亥ノ子迄に農事がすんでいと、この日亥の神を祀るが片付いていないと三番亥ノ子を行う。ボタ餅を作り神棚に亥ノ神さんとして供える。この日には大根畑には入れない。それは大根の大きくなるブリーブリーという音を聞くと死ぬからだという。又、亥ノ神さんは秋の亥ノ日に家の中に入り、春の亥ノ日に山や田畑へ出られ、人々を護って下さるとも言う。この日炬燵こたつを出す。仕事は少し休む程度である。

冬至 この日南京を食べる。

オトコ朔日〓オツモノ朔日という。

鳥の鳴かない間に茄子を食べる。茄子を食べると、海や川に落ちて沈まないで、土佐衛門となって浮くという。その時の茄子は塩漬けや味噌漬けのものでとてもからい。

八日待ち〓十二月八日のことで請負師がこの日、豆腐代と油揚げ代を五十銭ほど出して、酒を飲んだ。各家でも、お汁やおかず類をして飲食する。

煤払い〓十二月十三日は、正月支度の初めとし、ススハキをする。雨が降っても行う。榊は雪の降らない日からは採ってきておく。又、その火の午後には採りに行くこともある。米粉の団子汁を作り、大根の輪切りを入れるが、イリや油揚げを入れることもある。この団子汁を雑煮という。その年に死人のあった家では祀らない。

餅搗き〓正月の餅搗きは暮れの二十七日か二十七日頃から行われるが、二十八日餅は悪いと言ひ伝えがあり、殆どの家では搗かない。

昔は一俵(四斗)位ついていたが、この頃では、一斗五升位から二斗位の餅搗きをする。

栗、栃、ヨモギの餅を作り、白餅と半々程度とする。お鏡餅は一番最初の白でとる。

次は、若連衆について記してみます。現在では、青年団というが、かつては小学校を出ると、すべて青年団に入ったものである。以前には、若連衆と呼び男は十三歳になると若連衆に入り、二十五歳になると脱退したものである。

仲間入り〓入る時には、酒一升を下

げて行って入れてもらう。あらかじめ仲間入りする若者の父親などが、若者頭に頼んでおくが、親のない者は、若連衆の誰かに頼んで、仲間に入れてもらった。入団式というようなことは特別にはしない。

謠い初めの会合に新しく仲間入りする者も参加するので、この会合が入団式にもなるのである。

謠い初め〓この頃は旧正月の二日に村の公民館で行われていたが、もつと昔は嫁をもらった家を宿にしていた。「家事と嫁入りは節季に多い。」と言われたもので、この村の嫁もらいは年末に多かった。

嫁をもらった家の中で広く大きな家を宿を選んで謠い初めをしたものである。何をしても初めてであるから「ウタイゾメ」という。酒宴の肴は、煮豆ぐらいのものであった。

若連衆の頭を「若者頭」といい、

仲間入りして二、三年までの若者を「ヒワカイシュウ」と呼ぶ。新しく仲間入りしたものに對しては、若連衆としての心得と称し、これを「言いきかせ」と言った。

青年団になってからは、支部長というようになったが、支部長の言うことは若者頭の言葉と同じように一同は神妙に聞き誰一人、不服を言う者はいなかった。

若者の制裁〓地区内の者への制裁ではない。他の地区の男が原地区の女の家へ遊びに通ったりした場合などに若連衆が制裁を加えたのである。

力石〓お大師さんの前に、六斗石や八斗石が置いてあった。米の目方に換算して名づけた石である。

大水で流されたことがあったが、若者たちが集まって、これらの石を持ち上げたりして、力くらべをしたものだ。六斗石を持ち上げたら、先ず一人前の力であるという。六斗石を持ち上げられる者は、十人のうち三人あれば良い方である。

消防組〓消防組の組織が出来たのは、大正九年で、この年はじめて消火ポンプを購入した。組員は、六十人程であるが、火事の時には消防組だけでなく、一軒の家から必ず一人は出動する。これはテンヤクでなくツトメである。

山火事の消火〓山火事の時には一軒から一人は必ずツトメとして出動し燃えている地域から少し離れた所へ防火線を二間か三間位の幅に木や草を伐り払って、火が広がらないようにする。火の勢いの弱い所は、消火棒で叩いたりトグワで土をかけたたりして火を消す。

お講

お大師講〓大昔は毎月二十日の夜から二十一日の朝にかけてのお講であったが、最近は二十日の夜七時頃から十二時近く迄になった。当番の家を宿にしてお講をする。原にはお大師講が四組あり、土居土居が一組になっている。原有賀は一隣保から三隣保迄が一つの組を作り、下地は四隣保と五隣保が一組、上地は六隣保と七隣保が一組、八丁は八、九、十の隣保が一組となっている。

以前は、上地土居と下地土居、つまり本村で一組を組織していたので、有賀組、本村組(川東組)、八丁組(川西組)と呼び、三組であったが、戦時中隣保が出来た時から四組になった。

お講の日には各家から一人はお詣りする。宿をする家が講の組うち全部にふれて廻る。宿をするのは順番にまわる。

接待には小豆御飯、一合位を茶碗に盛り、大根、油揚げ、芋等の煮物を出す。

山の神 毎月九日にお講をする。まわり当番で宿をする。一人当たり、一合の割で酒を買い、大根の煮たもの位で御神酒を頂く。性の悪いのが山の神と言われる程でお掛け軸の絵は天狗のような赤い顔をして怪しい姿である。

秋葉講 旧暦の毎月二十八日に、大日講と一諸にしていた。

大日講 秋葉講と同じ日にしていたが、秋葉講はやめて大日講だけとなった。大日様は牛の神様といって、牛を飼っている家が全部参加していた。このお講の講帳には規約らしい事が記されている。

- 一、毎年、牝出産の家は、売上高の百分の一を出金するここ。
- 一、毎年、旧一月二十八日の講費に使用すること。残金は貯金すること。
- 一、毎年、正月のお講は世話人二名と講宿で世話すること。

なお、このお講は引原の長源寺にある大日尊に参拝者を出し、昭和十一年のお講では、十一年以下十六年迄の参拝者を定めていたようである。

講帳に別記されている講員の姓名の上に十一年参りとか十六年参り等の文字が小さく記入されている。又、参拝についての規則書もある。

参拝者 長源寺大日尊

- 一、参拝人数三名とす。
- 一、参拝賽銭一ケ年一回の参拝に付き参圓持参のこと。
- 一、参拝の時大日講箱に講銭不足の場合は参圓に達する迄徴収す。
- 一、参拝先変更につき参拝くじ引きは、全部改めに付き十一年本より始め、このようにして昭和十一年から、毎年三名ずつ参拝者を出し、昭和二十年には二名の参加者を出しているところまで記入が途絶えている。

稻荷講 毎月二十三日に廻り当番でしていた。以前は盛んなお講であったが、次第に廃れてしまった。

明神講 昔から続いているお講で、一

月、五月、九月の十八日にする。講員は三十戸程で、宿は廻りの当番で、講当日のお神酒は宿の負担とする。講にお参りした者がお賽銭をあげるが、戦前には大体三銭から五銭位で、そのお金を残しておいて第三者をたてた。

第三者を定めるのは、以前から正月講の席上でくじによって、二人を決めたものである。選ばれた第三者は、四月二十日に養父大明神にお参りした。

この神様は、養父の付近にある。原から行くのには道谷を通り、但馬の若杉峠を通過して出て行くので、片道約十里はある。昔は歩いて二日ばかりで参ったものであるが、その後自転車で参ると、日帰りが出来るようになった。

このお講は猪の害が甚しかったので始まったお講だと言われているが、養父大明神を信仰しはじめてからは不思議に猪の害が無くなったとか。

エビス講 旧の一月十日にするお講である。牛を飼っている家で作っているの、大日講と全く同じである。エビス講と大日講との違いは、大日講が大日様に牛の健康を祈るのに対して、エビス講では福の神であるエビス様に収入の豊かなことを念じてのお講だという。

牛の放牧 六月末から一ヶ月間と秋には九月二十日頃から雪の降る前迄、放し飼いをしていた。

放牧の牛は見覚えで誰でも一目見てどこの家の牛かわかっていた。以前は、耳の上に木札をつけたりして見分けたものである。

原では文政年間に丸井半右衛門牛と言われたもので、原の牛は良い牛だと言われていたそうである。

原地区は古くから定住した山村として、僅かではあります、農耕を行っている関係からまとまった形式において伝承され、田の神祭のような農行事をみる事が出来ます。しかし純農村ではなく、生活の殆どを林業に依存していたため、他の農村が行っているような農行事は行われていなかったようです。

その後生活様式が大きく変化し、四十余年経った現在は、受け継がれている習わしもあれば、自然に廃れていったものもあります。

私の母からよく聞かされた言葉に原地区は川幅の広い引原川を中心民家があり、山村地区としては、大変平穏な村であるのだと。そして地区の決まりも守られているそうだと。

数十年前に原の川原で、バスを待つ間母と水を手にすくいなながら聞いた時の情景や、安泰さを思い出しながらまとめさせて頂きました。

農家のくらし (その二)

河野 トミエ

農家の仕事・農作業

農家の人々は働き者であった。正月の二日からもう縄の綱初をした。

綱打ち

十一日は、綱打ちの日と決められていて、どえ（土井の訛りだろう）の人達、近所同士とか隣保内の人が集って藁を打ち、牛に着せる鞍を引っ張るための縄は太くて一人では出来ないのので、綱打ちで大勢集まって作っていたのである。綱打ちで作るのは、

腹帯―はるびという

胸がえ―胸かけのこと

水尾―犁を引っ張る綱のこと

胴引き―まぐわなどを引っ張る綱

これだけの四本をそれぞれ皆で一諸にこの日に作っていた。共同作業であ

綱打ち

天井から吊すつば
を作り縄の綱初め



三人の人が縊りをかけながら縄にしてい

る。綱打ちは、天井に引っ掛けるつばというものを最初に作り、それから三人が三本の縄に分けて縊っていき、この作業を綱打ちという。

春の農作業

茅場焼き 春に青草が出ない中に茅場の山焼きをせねば、又良い茅が刈れないので、村全員が出役して隣接の山に火が入らないように草や雑木を切り倒して、境界をきれいに掃除をしてから火をつける。この山焼きまでに、昨

年の秋に刈って山に立てている茅を家まで取り込まねばならない、茅負いである。遠いゴソロ山までは歩いてばかりで、一日に二回しか通えない程の道であり、狭い道を長い茅を背負って横歩きしながら通る所も多くあり、大変な仕事であった。当時の農家はほとんどの家が茅葺き屋根であるため、冬の間にも雪などで傷んだ屋根の修理のため屋根葺きが行われた。屋根葺きには沢山の茅があるので自分の家だけでは足りない、茅講もあって助け合いをしていた。

畑打ち 春先は桑畑やこんにゃく畑

を打つのも大仕事であり、農閑期の養蚕に備えて桑畑も広く大変だった。畑が終わると田圃のこしらえである。

苗代、田植えの準備

苗代の準備にかかる前に先ず籾種を水につける。池とか、川につけたり桶につけたりして、十日程水につけると籾種がよくふくらんで、芽をふく気配になると水苗代の準備である。苗代は四月下旬で、二十五日頃から始めるが、八十八夜のおと苗代といって、立春から数えて八十八日目頃では、一番遅い苗代ということである。それより遅いと苗の育ちが遅くて田植えに間に合わないという目安である。新暦では五月の初め頃である。

苗代ふみ 田を起し、水田にした

田に青草を刈り込んで踏み込むと、青草が発酵して肥料となり、苗の成育が良くなるので入れる。春先の青草と言え、キツネのかみそり、つまり曼珠沙華の葉しかなく、それを沢山刈って水田に入れて女籠の尻で押し込むのである。

種蒔き 苗床は畝の両側から種籾を

むらなく蒔く。一週間程で芽が出始める。

お茶摘み 苗代が終われば、女はお

茶摘をしたり、田植えの準備である。男の人は田圃鋤をする。田ごしらえで

ある。

田起こし・荒起こし 一回目の荒田を鋤く。

中耕 荒起こしをした田に肥料をふって二度目に鋤く。それを馬ぐわで一度ならして又、犁で畝を立てて鋤くと、中耕で畝を立てることにより、水当に溝が出来て水が入り易い。

中作り 水を当てて、鋤き畝を立てているのでそれを崩す。はじめ畔の方だけを鋤いて畔土を寄せて畔塗りをしてから中を鋤く。畔草も刈る。

代鋤 田を植える前に鋤く。

代掻き 代掻き馬ぐわでならし、え

ぶりで代をして田植えの準備を終わる。田植えの前の溝刈りをゆで刈りといい、その水路に関係のある者が出て用水路とか溝をきれいにしして堰を作る。

田植え 田植えの日は朝暗い中から

起きて、苗取りをする。ほでを下げてブト除けである。その日の田植えに使う苗を取る。女の人七人が取る苗を括るのが男の一人前の苗はよしだと言われている。男の人は苗代より植田まで苗籠で苗を担って運ぶ。

女一人が一日に田植えをするのは五畝（きたなか）植えれば一人前と言われている。山田の田植えが終わると、麦刈りをしてから成る田の田ごしらえである。山田の田圃は水が冷たくて稲が出来ないので、冷寄と言うものを作っ

て水の冷えるのを防ぐ。

麦落とし お天氣の良い日に門一杯に筵を敷き、田圃で麦こきをした麦を干す。そして、唐棹でたたいて麦の穂と実を分ける。麦落としは稲の籾よりはしかゆい仕事であった。

畦豆植え 田植えが終わると畦土の柔らかいうちに大豆とか、小豆を田の畦に植える。一人が棒で畦に適当な間隔に穴を開けて行くと後から誰かが豆を二つずつ入れて行き、田の中の泥を少しとって蓋をするように覆ってゆく。兄弟や親子で一諸に行っていた。田植えが終わると村中一斉に野休みをする。区長さんがふれを出されて皆休む。

田の神祭の際に、水口に敷く栗の葉は稲熱病の予防になると言われている。水口より栗の葉の汁が田の中へ流れ込むのが稲熱病の予防になることが立証されて今の葉が出来たという。このように昔の人が行って来たことは、科学的にも理に叶っていることが多い。

夏の作業

朝草刈り 田植えが終わった頃より野山(草刈り山のこと)へ朝草刈りに行く。草を刈る村山が大体戸別に分けられているので、朝早くから行ったり昼から刈りに行ったりする。牛も連れて行く。牛は四十キロ程も背負ってくれるので人間の倍も草を持って帰ること

が出来る。山道は牛にも藁で作った牛のくつをはかせてやる。お盆前になると山草の荷の上に、キキョウ、おみなえしなどの盆花を取って乗せて帰る。盆花が草の上でゆれているのが思い浮かびそうである。

田の草取り 田植えが終わって十日程経つと、田返しをしたり第一回の田の草をとる。第二回、三回とお盆頃までに四回程の田の草取りをする。炎天下の暑い中を田の草をとるのはとても重労働である。田の草が終わると、畦刈りをして、干草を作り、冬の牛の飼料にする。草刈りや田の草をとる頃になると昼寝をする。

夏間の女の仕事 夏間に草刈や田の草取りをしながら昼の間の暑い中は家に居て、ふとんの洗濯をしたり冬着の洗い張りといった仕事が沢山あった。家族全員のふとんを洗って縫い上げる。昔のふとんは大体かすりとか縞柄の木綿の生地なので、ふとんの綿を取り出し、生地も表と裏をはがして、綿はよく干し、布は木灰を煮て、灰のアクを取り、そのアクにつけて置いて洗うと汚れがよく落ちてさっぱりとする。今のように、石鹼粉もあまりなかったものでこれは昔からのおばあさんの知恵である。洗った生地は庭に筵を敷き、その上に糊付けをした布を張りつけて乾かす。色とりどりの布が各家の門先に

干してあり、当時の農村の風物詩だったと言えよう。夜はその生地を縫い合わせふとんを綴じて出来上がり。

張りっこ張り 秋の取り入れに便利に使える張りっこは、籠やそうけの少し破れたりこわれたりした物を柿の汁で作った渋で紙を張り、何回も重ねて張ってあるので丈夫であり、穀物入れや柿むきなどにとっても便利な道具であった。柿の渋は、渋柿の青いものを台風などで落ちた柿を拾って、よく潰してその汁で作る。

分け取り 稗引きである。稗は稲より早く穂が出るので、穂が稔って種が落ちない中に引き抜かねばならない。

焼つ米 今はあまり作らなくなったが、とても美味しく懐かしい味である。水な口に少しづつ、水な口もちが植えてあり、その分を刈り取って、少し実の入りかけた籾を強火で炒って、臼で碾くと籾殻が取れるのでそれを選別して食べる。神様にもお供えする。

肥負い 田圃の水な口の焼き米に刈り取った所に、厩肥を積む。それは家から田圃まで女籠でみんな負って積み上げる。稲刈りが終わると、元肥として田にふる。重い厩肥を少しづつ負うのも大変な重労働である。

差し稲架 差し稲架は農作業の場であるが、角には必ずという程、厩肥が積んであった。この肥も、雨ざらしに

すると肥料の効き目がないのでこうした屋根のある所に積んでおく。

俵編み

男の人も農閑期には、秋の収穫の準備に俵を編んでおく。外俵と中俵とは、寸法が少し違っている。棧俵と違って俵の両端の口を止める丸いものである、これも沢山作っておく。小作の場合も年貢米も皆俵で納めるので、米俵は沢山作っていた。

秋祭り

八幡様の秋祭りは旧九月二十日であり御旅があると八幡様から檀原の御旅所までは、田圃の中を御旅道としてそこだけ稲が刈り取られ縄を引いて道が作られていた。

秋の作業

稲刈り 秋祭りが終わると家族全員で稲刈りである。鋸鎌で皆並んで競争のように刈って行く。一日中刈ると翌日は、足が痛くて困る。刈り倒した稲は、藁で括っていく者や、稲架に掛ける者、稲を運ぶ者と見る見る中に稲架がいくつも並んでゆく。一週間か十日程乾燥すると、稲扱きをする。

稲扱き 足ふみの稲扱きがこの辺りに入ったのは、何時頃かわからないが、大正の末期か、昭和の初期だろう。そ

れ以前は、金扱きだった。足ふみの機械が入ってからは、田圃まで機械を運んで行って扱き、持ち運びの出来ない田は稲を家まで背負って帰り、差稲架で扱いていた。

麦蒔き 稲扱きの済んだ成田は麦を蒔き、稲の裏作として作っていた。麦はほとんど自家用と牛の飼料にしていた。霜の降りる頃になると藁ぐつなどを履き、麦ふみをする。根が丈夫になり、大きな穂をつけるためである。

苳干し 稲扱きをして籾を負い込むと、お天気の良い日は門干しをする。乾燥機などはない時代だから、すべて天日に干さなければならぬ。陽の当たるところは、少しの場所でも余まらずに、箕の中までも籾を干す。しぐれや、俄雨でも降ってくると、大あわてで苳のふたをせねばならず、籾を濡らさぬように縁に提げ込んで大変な騒ぎで、自分の家が早く終わると必ず隣の分も手伝って取り入れて終わるとやれやれと言う。私は乾燥機が出来てからも、しばらく苳干しを続けていたので、道通りの人は珍しがって写真に撮っていた。

夜業 門干しをした籾は、筵を縫い合わせて作った、たてと言うものに入れて置き、少しずつ土臼で碾く。男の人の仕事であり、どうしても夜業仕事になる。

お米の選別



土臼ひき

①土臼碾き籾すり（籾殻をとる）

②唐箕に掛ける（籾殻を飛ばす）

③万石に掛ける（米をより分ける）

万石にかけてより分けたい米を丸い木で作った一斗升で計り、俵に入れてゆく。四斗入りの俵は検査を受けて、検査米として年貢に納めたり出荷をしたりしていた。

こうした作業は、差稲架でしていた。夜業が終わると混御飯を食べて休む。小芋を入れた混御飯はとても美味しかった。夜食である。

かちもん 土臼碾きやらお米の選別が終わると、豆扱きや小豆落としての仕事がある。これをかちもんといって、あの家は早かちもんが済んだげな、などといったつまでも豆や小豆のはぜを田に残して置くことは恥のようにいつて精出したものである。

柿むき かちもんが片付くと、柿むきである。干し柿は当時の好い現金収入であった。此の辺には本当に柿の木

が多くて、田圃のきせ（雑地のような所）には必ず柿の木が植えてあった。今あるような富有などの良い柿はあまりなく雑柿が多かったが、それでも甘柿も柿買いの人が来てよく買っていた。渋柿は勿論干し柿にして、串柿は百個で一連と言ひ、十連で一束と言って、何束も売れる家が多かった。沢山の柿をむくのも夜業仕事である。張りっこや、そうけに沢山取った柿を入れておき、カミソリの古いものが柿むきの道具である。囲炉裏を囲んで家族揃ってむいていた。上手な人は手の中で玉を転がすように早くむいていた。

牛市（べいこ市）

仔牛のことをべいこ市という。秋が終わると、べいこ市が一宮町（神戸）で行われていた。旧十月二十五日から二十八日位までである。大正末期頃のべいこ一頭は二十円程で、牝牛の良い牛は、五十円から六〇円だったという。これが一年間牛の世話をした報酬である。

茅刈り

旧暦で、十月の終わり頃秋が片付くと三日間ゴッロ山の口開といって、茅刈りが始まる。農家は殆ど茅葺き屋根であるために、屋根の修理には、毎年茅刈りをして茅を溜めておくのである。

茅刈りの日は、朝暗い中から山に行き、六時より一斉に刈り始める。良い茅が生えている所へ早く行くために、場所の取り合いであり、人が刈っている近くにはあまり近寄らない。同じ場所に自分が刈った茅を一諸に十束ずつ括って立てる。一日に多く刈る人で、百束か百二十束は刈っていた。これを皆山に立てておき、春先に家まで背負って帰る。

冬の準備

雪が降らない中に冬の間の薪の準備をしておかねばならない。

薪こり 先ずゆりだの木をこる。この木はあまり火力が強くないので、お正月のお餅をするのに使う。お餅を蒸すのに適当で、うるしの木によく似た木である。薪こりを沢山すると、一坪積んだとかいって喜ぶ。年末にはお正月用の松の枝やゆずり葉と神様用の花の木などを雪の降らない中に取っておくこと。

出稼ぎ

秋の取入れが終わると、男の元気な人は灘行きとかそうめん屋に出稼ぎに行っていた。灘は酒造りで、神戸の灘区や御影方面である。そうめん作りは揖保郡のあたりだった。そうめん屋行きは、初め頃であり、灘行きは一月の

終わり頃に出かけて行った。小作農家の人は多く行っていた。

養蚕(蚕飼い)

春蚕は田植え前頃より繭の仕上げは田植えが終わった頃になる。夏蚕は、盆上がり頃、晩秋蚕は秋蚕である。忙しい農作業の合間に、蚕飼いをして現金収入を得ていた。蚕を飼う間は、桑摘みやら家中に蚕を飼っているの、家の中も大変だったが、それでも蚕様様と大事にしていた。

栗拾い 此の辺では、栗の落ちる頃になると、蔦山の官公林小茅野の国有林へ袋を背負って栗拾いに行っていた。上野の営林署の事務所で鑑札を受けて、入山料は当時一人分で五十銭程だった。弁当持ちで行っていた。拾った栗は、栗御飯にして食べたり、おやつに食べたりしていた。実は小さいが、甘くてとても美味しかった。

焼畑(かりよ刈り)

かりよ刈りはお盆前頃に行う。杉や松を伐採した山で、去年木を切った山をかりよにしていた。枝は、大方薪にこって、あとの杉葉などを焼き、その後大根や蕪を蒔いていた。良い大根が出来るので、秋は又、大根負いに重くて足が痛く困ったものだ。かりよ焼きは、大勢の人が行って焼き、焼け

跡をみんな山分けしてくじ引き等で決めて自分の所に大根を蒔く。焼けた灰の多い所や、良い土の所は大根が良く出来ていた。

牛の飼い方

牛の飼い方は、一日に牛桶に三杯の餌をやる。米糠をまぶして干草を切っ入れてやったりして食べさせる。朝の一回は牛の水と言って、牛桶に菜葉を入れたり、春先はタンポポやあざみの葉を摘んで入れてやる。それを煮込んで吞ませる。産後には、よく温まるようにずいきを入れてやる。春のあざみ摘みなどは、子供の仕事であった。夏の間は青草をやる。

牛の使い方 田を鋤くには、犁と、馬ぐわ(土をならすもの)があり、牛に鞍(くら)をかけて引張って使う。牛を使う号令、

止まれ——ぼうぼう
右——しこいしこい
左——あいしあいし
後——後へ後へ

一日に一回は川へ水入れに連れて行ってやり、運動を兼ねてきれいにしている。このように家族の一員として大事に飼っていた。

縁側のコミュニケーション

近所の人とは立ち話をするより、一寸縁に腰をかけて世間話や、牝牛の事など、きざみタバコに火をつけて吸いながら話し込むのも一刻の楽しみであった。こうした風景を思い出す時は必ず、亡き父が縁側でタバコを吸ってくつろいでいた姿が思い出される。現在は、どの家もサッシ戸になり、一寸したコミュニケーションの場がなくなっただと思う。昔は、重労働の中にも、どこかゆとりのある長閑な暮らがあり、懐かしく思われるこの頃である。

故 大坪憲一先生の版画です



《第三集所載》

盆踊り

大成 みちよ

戦時中若い男性は兵隊に、若い女性は軍事工場に働きに出たので、盆がきても騒がしい程の賑わいもなかったが、中高年の人々が旧盆の十三日には、夜遅く迄太鼓を叩いて音頭をとり、踊り手は小さな鐘をそれぞれ叩いて踊り、盆踊りは盛り上がったものである。

旧西谷村では上野地区が人口も多いので一番盛大で、次いで齊木地区、安賀地区、小野地区であった。その頃は音頭をとる人が大勢いるとよくはすみ、踊り手が少なくても、音頭とりと太鼓と鐘で拍子をとりながら踊るとよく続いたものである。

終戦を機に若い男女が帰郷し、村の中が活気づいてきた昭和二十一年頃より盆踊りは盛大になってきた。どこの地区では何日に踊りがあると伝え聞いて、その日を待ちわびたものである。

若者は浴衣を着て、手拭いを首に巻き下駄をはいて、大勢連れだつてゾロゾロと土道を歩いて盆踊りに行った。西谷村だけでなく隣村の旧神戸村の閨賀や曲里、西安積迄も行き、どの村でも終わる迄踊ると夜中の二時頃になることがあり、着物は汗と埃で大変な

汚れよう、下駄はすり減ってしまう。一夏によく踊りに行くと、下駄は二足や三足はすり減らしたものである。

音頭とりの上手、下手で踊りのはずみようはちがった。

音頭とりの上手な村では、踊りは長く続く。それは踊り手をみながら音頭を変えるからである。下手な音頭とりの村では、踊り手は退屈して踊りの輪から一人又一人と出ていくのである。

音頭とりのない村や、はずみのない村では、他の村から音頭とりをたのんだりもした。

音頭とりは四、五人檜の上で一人が約一時間ぐらいうたうたのである。たえず踊り子を見ていて退屈してくると、テンポの速いうたに替えるようにし、疲れてくるとテンポのゆるいうたに替えたりしながら、踊りやすいようにたえずリードするのである。時には変装して観客を楽しませたり、お互いが楽しんでものである。すげ笠をかぶったり男性が女性の着物を着たり頬かむりをして「あっ。」といわせ、大衆をわかせたりした。

音頭の文句は八木節が母体である。国定忠治のうた等は大変人気があった。踊りは「さえもんおどり」と「よかわおどり」が主体である。

「さえもんおどり」はテンポが速いので、最初にこの音頭から必ず始めて

大衆の踊りたい気持ちを引き寄せ、盛り上がりを作っておいて、少し疲れがみえてきたら「よかわおどり」に替えて、又、「さえもんおどり」に替えるといったように音頭とりがリードする。それで盆踊りは盛り上がって行く。このように若い男女が大勢連れだつて盆踊りに行っていると、気の合った男女がお互い好意をもち始め、ロマンスが芽生えてくるのは当然の成り行きであった。

特に戦時中都会に出ていた人は帰ってきて馴染みがないので淋しい思いをしている時、優しく声をかけてもらったり、盆踊りの手解きをしてもらったりしているうちに、お互いが好きになり、恋が芽生えてくるのである。そうなるとうつ会いに仲良くなり、出会うのが待ち遠しくなってくる。盆踊りに行くといつて家を出て、二人だけの時間を楽しむようになり、次第、次第に仲間にも知れわたり、やがて結婚されたカップルは少なくないとのことである。

現在七十歳を越されたある御夫婦に尋ねると、「あの頃はとても、とても楽しかった。なんぼ踊っても疲れることもなく、お互いが好きになってくる」と親に嘘をついて二人が逢引きをするようになり、それが本当に楽しくうれしかった。恋愛なんか考えられない時

代であったが、盆踊りが二人を引き寄せてくれたと思う。」とのこと。

ご主人がとても奥様を大事にされていると日頃から聞いていた御夫婦だったが、よもや盆踊りがとりもった縁だったとは知らなかった。今も相変わらず仲の良いお二人なのである。

戦後の荒廃していた世相を思い出す時、盆踊りから生まれた愛のカップルに拍手をおくりまします。

《第四集所載》

還暦祝い

森下 元次郎

正月に知人の還暦祝いがあって、よばれて行った。私の青年期、六十年くらい前のころの還暦祝を思い出して正に今昔の感あり。その頃は祝いの出来る人は稀で、それは大変なものだった。

案内を受けた人達は朝からその家に集まり、料理のお手伝いをする者と島台といつて杯ごとに使う飾り物を作る者にわかれた。飾り物の組は田の畔に出てくす玉を取って来て、紫色のくす玉と小豆の赤、大豆の白を扇型の台の上に貼り付けたり、大根で人形を作ったり、料理のお手伝い組は近所の器用人が頭になり、献立表を作り、炭火をおこし焼き魚の段取りや材料集めを

し、その頃はよく山鳥を使った。山鳥のあらを叩いて糊状にし、つみれを作ってお吸い物にした。これがとてもうまくて、その味は忘れられない。またお金をかけた大祝になると、二葉亭の権さんという人がいて、この人は料理名人で、そうなると儀式も料理も料理人の指示で進行する。近頃の祝いと変わらず、お客はただよばれるだけである。そこで古老が残された儀式についてのメモを紹介するが、

- 第一献 最初石の盃でおみきを。
- 第二献 お神酒の残りを爛した酒。
- 第三献 樽の封切り樽開き朱の杯。
- 第四献 上がり杯のこと。
- 第五献 祝儀の杯のこと。

杯の献毎に肴はつきものである。

第一献

着席したら最初に石の杯でお酒を戴く。主人はあいさつ。上座から次々と戴く。

第二献

主人はお神酒の残りを爛をし、お客はそれぞれ酒を酌み交わす。主人は客がある程度酔った頃に次の杯の用意をする。

第三献

主人は正座しょうざの前に朱の杯を出し、「正座様並びに御一統様。この度御大儀に預かりましたお酒と一緒に、私の方でも準備して居りますお酒を爛致しました。」と挨拶する。そこで正座は、「当家何々様の還暦又はご婚礼、御目出とう御座います。お祝い申し上げます。お祝いに一献お受け願います。」と申し出る。

主人は辞退する。「正座は戴けません。」と繰り返す。結局主人は、「それではお言葉に従いまして私の方から、つきましては正座の方でも一献始めて戴きたい。」酌人は一献を正座に残し、一献を主人の前に酒をつぐ。

その時正座はお肴を。「塩から」ともいう。そして謡曲「高砂」を。この時、正座の前の杯に酒をつがぬように注意。

主人、正座からの杯を乾杯したら、「御両人様、大変遅く成りました。」と正座に酒をつぎ、お肴（塩から）を小謡うたいで「ゆるすゑ」を出す。

これで封切りが出来たので、一般来客は歌う。杯は正座から次から次へと下る。杯が主人まで下がれば三献終了。大いに歌って盛大に盛り上がる。

第四献

主人は二台の杯を正座の前に揃える。肴は尺鯛一対。島台が作ってあれば一対。酌人は銚子を温めて指示を待つ。

主人挨拶。「御両人様、お酒の爛を仕直しましたのでお受け願います。」

正座、「最前は私の方から始めましたので、今度は、ご主人様の方から。」と断わる。結局主人より始める

この時酌人は、正座に二名分だけ魚を分配して全部肴も島台も主人の前に置き、正座の指示により酒をつぐ正座は「お肴を。」と挨拶、「高砂。」

杯は両側を次々と登る。

正座は昇り杯を拝借して料理人呼びをする。

料理人呼び、

第一献 「庭のいさご」

第二献 祝儀

この時料理人に祝儀を出す。再び昇り杯で正座まで昇れば、正座が乾杯して第四献終了。

大いに歌い盛大に盛り上がる。

第五献

正座は「ながながと頂戴しました。」と取りを要求する。主人「それでは献が合いません。まだ時間も早いので、もう少しどうぞ。」

結局、正座とも四、五人に杯をまわして昇りつめて、第五献終了。

二台の杯は主人の前に。

正座、「お肴を。」

「高砂」か「四海波」を。

この杯は広く廻す。盛大に乾杯。

正座、「お肴を。」大納め小納め。

酒類一切を引き、主人「お茶づけ。」

と言うて茶碗で御飯を出す。

近頃還暦祝は内輪にするよう申し合せが出来ているようだが、六十一才の厄落としをしてもらうんだと盛大に行われた昔が懐かしい。しかしその反面、今でも祝いは行われている。人それぞれで良いのではなからうか。

カラオケの流行で今のスタイルもなかなか良い。私もよく歌う。それでも必ずという程、謡の二つや三つは出るがそれで式らしく、祝典らしくなり引き締まって良いように思う。

正座に座ったら式の進行に気配りが大切で、謡も習ったかと困るし祝儀も出す。

私達は謡曲同好会にお願いして、昭和五十三年一月に岸脇繁一先生に十人余りの人数で寒稽古を付けて戴いて、皆大変喜んでいいる。この際、文化協会と謡曲同好会の皆様に御礼申し上げる。

《第四集所載》

流れ灌頂

かんじょう

船積 三二

高野山の御廟の前を流れる玉川のみかへり橋のたもとで、川の中にかくさんの塔婆を立て、川の中に入って供養をされるそうです。これは、この世を去られた人の霊を慰め、又、人類が幸せになるように、願いを込めて供養をする習わしがあります。

身重の人が死ぬか或いはお産で新生児が死ぬと、このナガレカンジョウをします。「私が死んだら流れ灌頂を頼むぞ。」と言い遺してこの世を去られた人の霊を供養するには、川の中に塔婆を立て、これを白木綿で巻き、そばに小さな備え付けの杓を添えておきます。家族、親族、通る人が川へ下りて水を汲みかけます。

見る者は哀れさを催します。死んで七日のうちにおじゅっさん〔住職〕を招いて、親族が集まって、この前で供養をします。流れ灌頂をせねば、死人が血の池から浮かばれません。そのため後を引くといって行われるのです。

死んで七日は新仏さんがさまよう時間で、その間に供養をするのだそう、忌明けまでに穢れを洗い流して、清らかな仏で成仏ができるようにと供養さ

れたそうです。

波賀町にも三カ寺ありますが、それぞれ形式があつて、寺々では幾分か違つておりました。各寺の先住さんは、流れ灌頂をされ供養をして来られた方だそうです。

長源寺の檀家の古老に聞いてみました。

「戦前から戦後だろうかな、流れ灌頂を見たことがある。」と話され、原部落で供養をされたのは、川の中に竹を四本立てて、白い布を巻きつけて、小さな杓で水をかけて供養したそうで、「その頃には一つの流れ灌頂を見たことがある。」と話して下さいました。

安養寺の檀家では、川の中に四本の杭をたてて、四十五センチ平方くらいの白い布に梵字が書いてあるものを杭に付けて張って、その字が消えるまで備え付けの杓で家族をはじめ親族、また道行く人々が川へ下り立って、水を汲みかけて供養をしました。又、隣の部落にも流れ灌頂があつて、見に行つたことがあるそうです。

「それは昭和十年前後くらいだろ。」と話して下さいました。

「昭和三十一年頃に身重になつて亡くなられた方が、家族の人達から申し出がなく、流れ灌頂をしてやる事が出来ず、可哀相に、成仏が出来ていれば良いけど未だに心残りで・・・。」

と残念そうに里の老婦が話して下さいました。

満願寺の檀家の人に聞いてみますと、「今までに、皆木部落でも二つ見たことがある。」と話して下さいました。

皆木は川まで遠いので、田の用水路で、塔婆を四角に立てられ、備え付けの杓で水をかけ、家族、親族をはじめ道行く人、又近所の人達で供養をしたそうです。

高野山へ月参りをしておられる牛谷さんは五十回余り参拝して、その間に流れ灌頂を度々見たことがあるそうで、多いときには三組くらい川に戸塔婆を立てて供養してあるのを見られたそうです。「戦後は地方では見たことがないが、高野山へお参りしていると、見ることが出来る。」と話して下さいました。

安養寺の十九世の増円和尚さん（先住）は、流れ灌頂について詳しく、色々なところで人を救い、又、樹木を蘇らせるように祈念をされました。

明治の末期か大正年間くらいでしょうか、谷部落において山の樹木が次から次へと枯れかけたそうです。

村の古老達が集まり、不思議に思い、何か変わったことでも起こるのではなしかと心配になったそうです。それではみなでお寺へお参りして、増円和尚さんに相談されたそうです。増円和尚

さんは、早速流れ灌頂で祈願されました。少し経つと、枯れかけた樹木が次第に勢いを増してきて、見る見るうちに元の青々とした樹木になったそうです。

「流れ灌頂の供養が有難いことは、言うまでもない。」と住職さんが話して下さいました。

流れ灌頂は、真言宗の供養の方法だそうです。

《第五集所載》

石つき

河野 トミエ

石つきについては、私は実際に見たことがないので、詳しくはわかりませんが、色々聞きながら書いてみました。

家を建てるのには、現在は一週間ほど前もってコンクリートで土台の基礎工事を行い、その上に柱を建てていきます。

しかし昔は、茅葺き屋根の家が主で、コンクリートもなく、クレーンなどの機械も使いませんでした。

基礎工事は、柱を建てる所に平たい石を置いて、その上に柱を建てていき、その石が家を建ててから動いたり狂ったりしないために、石について

安定させておく「石つき」という行事がありました。

石つきは、戦後昭和三十年前後までは行っていたようですが、次第にコンクリートに変わっていききました。石つきは、大抵親戚や村人達の天役でした。

天役

天役とは、賃金を払わないで掛かり合う（手伝い合うこと）、今のボランティアのようなものです。現在は天役行事もだんだんと少なくなってきましたが、お葬式などは今も隣保とか村で天役で行っています。

昔は、部落有林の手入れなども天役で行い、下刈りや枝打ちには一年間に何日も出役し、又草刈り道とか学校の通学路なども、年に二回は天役として直していました。

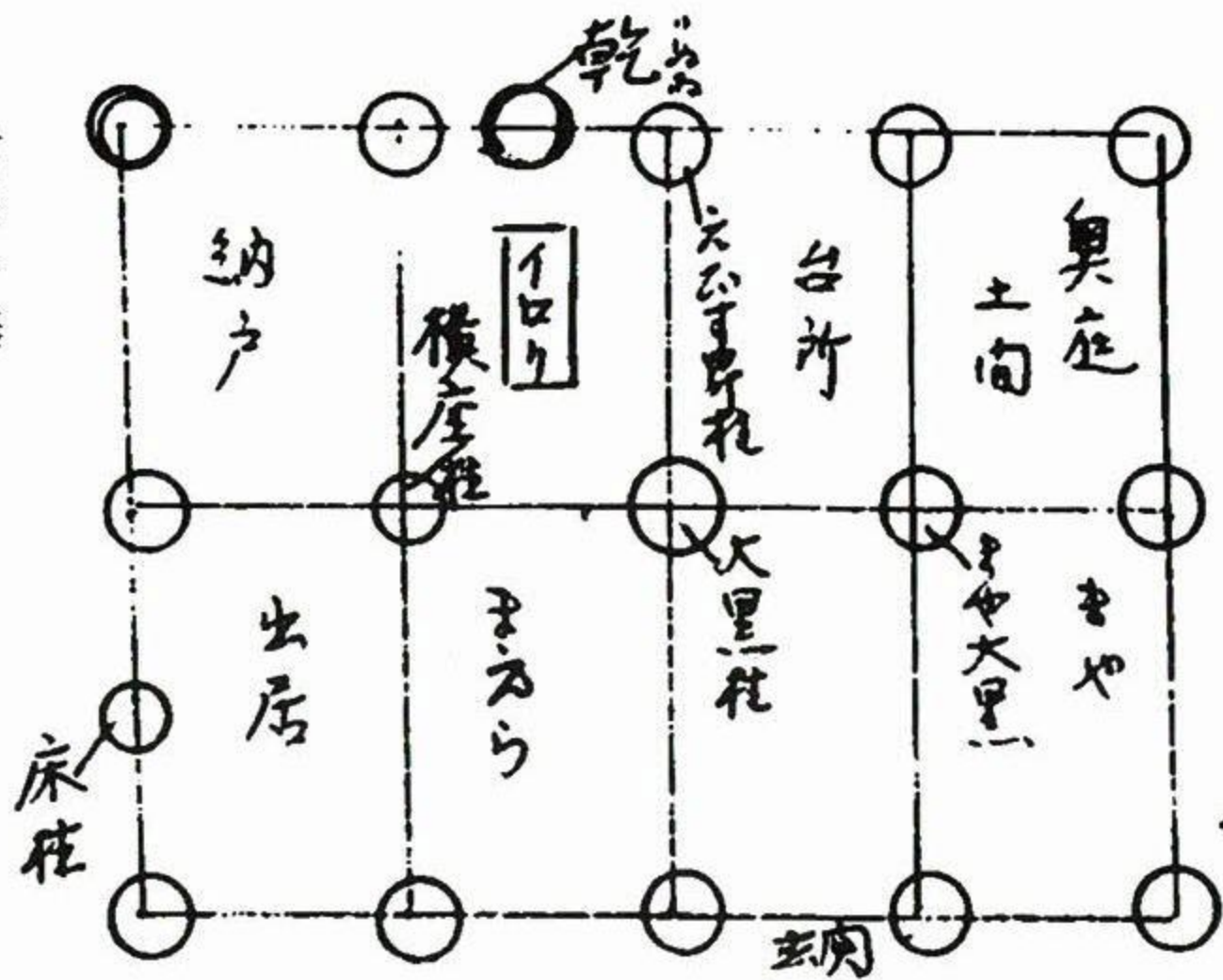
石つきに使う石

石つきを行うまでに平たい適当な石を拾っておきます。

川石の中でも青石は水分が多くて柱が腐りやすいことから使わないが、川石でも青石でないものは使っていました。

山石は、目が粗くて水はけが良いので、山石のほうが良いと言われている。

石を置く場所



石つき棒

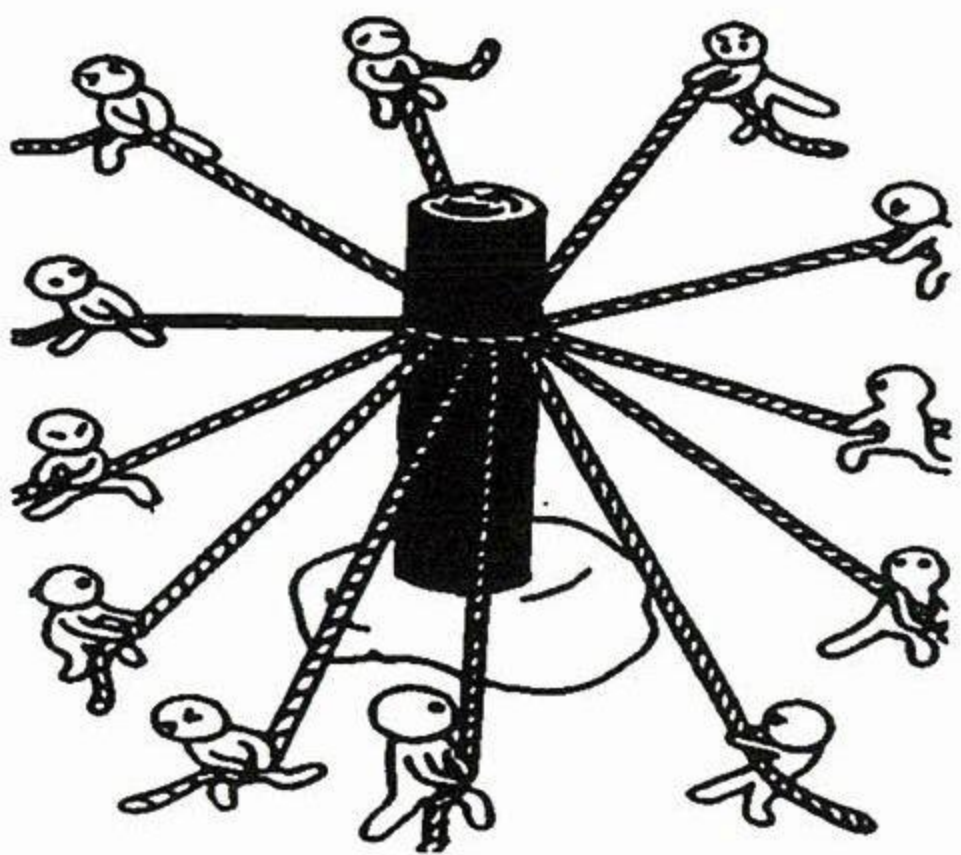
石つきをする準備として石つき棒を拵こしらえておきます。

その木は松の生木が良いので山の木を切って出しておきます。末口が二十五センチ程で四メートル位の木である程度の重さが必要です。

松の木は縁起が良くて末代までも続くようにという意味があり、割れにくいことから多く使われていました。

石つき棒の作り方

- 先ず棒の上には御幣を立てる。
- 石つき棒の上の方に直接太い縄を巻



きつけて、その縄に四方へ引っ張る長い綱を括りつけ、四人で引っ張っていく。石つきの際に棒が倒れないように引っ張るものである。移動する時も倒れないように持ち運ぶ。

● 縄を巻きつけた少し上の所に竹で作った輪を入れる。この輪も石つきの際に石つき棒が輪の中を上下して倒れないように支えるもので、竹の輪には三方に竹の竿を付けて、それを地面に挿して支え、動かないように人が持つておく。

● 棒の一番下にも竹で作った輪を入れておく。これは直接石をつく所の石つき棒が割れないように入れるものである。竹の輪は上の細い方から入れてよく打ち込み、動かないようにしっかりと入れる。

● 下に入れた竹の輪よりも五寸ほど上の所に、石つき棒に横から直角に短い杭を四方から打ち込んでおき、その杭に掛けるように太い縄を巻き付けておき、その縄に数本の引綱を括り付ける。その縄を大勢で引っ張って石つきをする。長さは一メートルから二メートルほどで、短い方と長い方を持つ者と二通りに持つ方が力を入れ易いという。

石をつく順番

先ず大黒柱からつきます。

大黒柱の所の石をつく時には、酒をかけて清めてからつきます。

「これがこの家の大黒柱、ついでご繁盛を祈ります。」

こんな歌を歌います。

次に馬屋大黒といって、馬屋の柱や戸棚の所の柱はえびす昇り柱といひ、横座柱など次々についていきます。

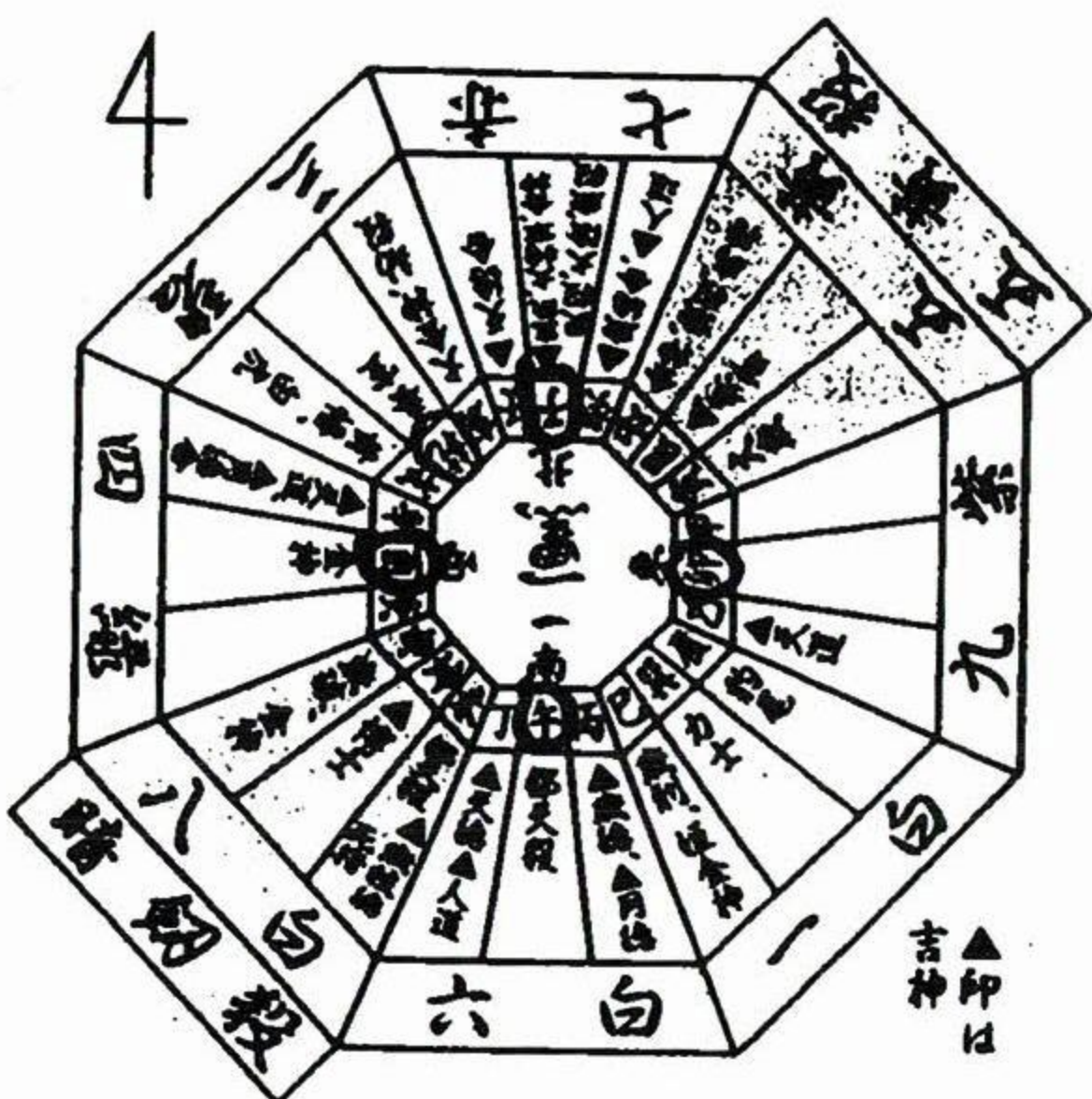
石つき歌

石つき歌は「目出度めでたくの若松様よ」の伊勢音頭などを歌い、色々な替え歌には「門前屋のばあさんが酒を量るに…」とか、「好いたお方とけっぱなついた石は、ああ痛かったと目に涙…」こんな歌を歌いながら引っ張っています。

縄を持ち上げる時は、「エトサツサ、エトサツサ」と言い、ドーンと下ろして、石をつく時には、「エトドン、エトドン」とはやしながらかを歌ったり、石に水をかけるとよく締まるので、水をかけながらついて水たまりをついたりします。お酒を呑んでいるので暴れながら泥んこになる者もいたりします。

最後に乾いぬい(戌いぬの方角の真ん中)の柱の所の石を残しておき、それをついて終わりとります。この石をつくときの歌は、「これがこの家の乾の柱、ついで納めりゃ末繁盛。」と歌って終わります。

歌を歌うのは年輩の人や外廻りで綱を引いているものが歌います。



若い人は石つきに廻ります。石をつく人達は重くて歌など歌えないといいます。

石つきは重労働であるから、大きな丸いお握りにきな粉をまぶしたものをたくさん作り、餅箱に入れて出しておきます。私も幼い頃にこんなおにぎりを食べた記憶だけが残っております。石つきは大体その日の一日で終わらせます。

以上のような、石つきについてのことを大勢の方に聞きながら書きました。聞き漏らしや間違っていることがあるかもしれませんが、その点はよろしくお願ひします。

《第五集所載》

石つき



冬の生活歳時記

平成十年の初春は……。

私が初めて経験したほどの雪の少ない冬でした。

町内どちらかと言えば南部に近い所に住む私の経験ですので、北部の戸倉や道谷に暮らされる方達とはかなり違いがあると思いますが、毎年確実に雪の量が少なくなるように思え、又、国道や県道・町道などの除雪対策も進んで、雪と共に過ごした冬の生活にも大きな変化が起きています。

その変化の様子を思い起こし、昔の冬の生活の一端を記してみました。

最近よく耳にする「地球温暖化」とか「エルニーニョ現象」などとも関連があるのかもしれませんが。

参考までに実際に町内の雪の量がどうなのか、最近二十年余りの雪の降った状況を建設省に尋ねてみました。

表のように、この冬の降雪量は、これまでの観測史上最低の記録を更新しています。記録を見る限り、毎年降雪量が減少しているとは一概には言えないようです。けれども私達の生活の上では、道路も良くなり、除雪機器も進歩するなど、雪に対する負担がとて

年間降雪量 (戸倉雪寒基地) 単位cm

昭和49年	722	昭和56年	665	昭和63年	374	平成7年	1014
50	557	57	533	平成元年	450	8	606
51	822	58	1371	2	609	9	341
52	779	59	640	3	471		
53	387	60	618	4	628		
54	494	61	502	5	716		
55	729	62	629	6	803		

中田光子

も少なくなっていますので、昔の生活を振り返ってみました。

冬支度

師走に入ると、どこの家でも野菜畑のネギなどに藁屋根をしたり、根菜類には籾殻や土を覆って、冬ごもりに備えました。

子供の頃、十二月十四日の赤穂浪士討入りの日には、ほとんど雪が降っていて運動場は使えず、ストーブの廻りに集まって先生から討入りの話を聞くのがとても楽しみでした。

お正月のこと

年末のお正月の準備は、雪のある厳しい寒さの中で忙しかった思い出が強く、大晦日の神まつりは吹雪の中で花瓶の水が凍てつかないように工夫したものです。八幡神社や神明神社への初詣でも必ず雪を踏みしめての参拝だったように思います。

屋根の雪下ろし

毎日降る雪の重みで、家の中の建具の開け閉めが固くなる事が多く、屋根の雪下ろしも度々でした。

屋根の雪が庇に落ちて垂木が折れる心配から、庇を支柱で補強してある家も多くありました。

軒下の雪除け

積もった雪の上に屋根の雪も落ちて、縁側も裏庭も明かりが閉ざされ、真冬には家の中が暗くなることもあり、そのために軒端の雪除けは冬の大きな仕事でお年寄りには重労働でした。

元気な子供達は戸外に出て、日暮れまで雪遊びで、どこの家の庭にも雪ダルマや窠倉かまくらが作られ、軒下には雪まみれの雪そり（木馬）や竹スキーが立てかけてありました。

冬の履物

今、子供達は雪道ではカラフルな雨靴を履いています。

終戦直後では、ゴムの長靴を履いている子は良い方で、藁で作った深靴が主流でした。

雪が解け始めると藁が濡れて、下校時はとても冷たかったと思います。

防寒着

雪降りの日、子供達は幅の広いネルの布で縫った顔だけ出るマントを着て登校していました。その姿は色とりどりのダルマが並んで歩いているようにも見えたそうです。

又、大人も子供も母の着物を解いて縫った防空頭巾を被って雪や寒さを凌いだものでした。

通学路の雪かき

毎日のように降る雪の朝、登校路の雪かきは、冬中の村の伝統的な天役でありました。

子供達が出かける前に、各戸から大人一人は必ず出て、公民館に置いてある木製の大きな雪かき棒の先にロープをつけて、村人約五十人が、野尻小学校まで約三キロの登校路を雪をかき分けて引いて行きます。その後を子供達が一列に並んで登校して行きます。

冬の田舎の風物詩とも言えるこの仕事は、除雪車が走るようになる昭和四十年代まで何十年も続いたことと思います。

冬の水対策

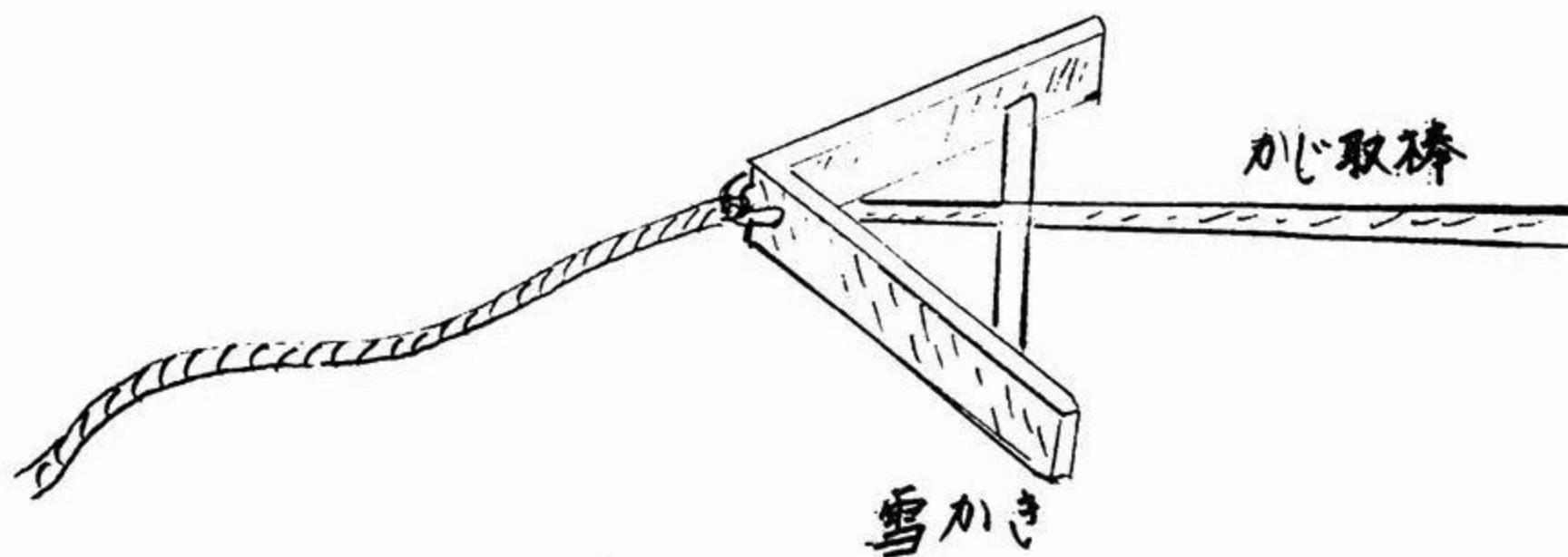
昭和四十年代に水道施設が出来るまで、どこの家にも井戸があり、生活の水利はすべてこの井戸に頼っていましたが、大雪の日は井戸へ行く道が雪で閉ざされ、炊事、洗濯、お風呂の水を確保するのがとても大変でした。

お風呂が沸き過ぎて、ぬるめるために庭の雪をバケツですくってお風呂に入れることもあり、子供達が大声をあげて喜んだことなども思い出します。

冬の燃料

冬支度の大きな仕事に、燃料の確保があります。秋の取り入れが終わると、

どこの家でも柴こり、木こりが始まり、雪が降るまでに柴小屋や軒下にクヌギ、ケヤキ、クリなど雑木の柴と割木をいっ



ぱいに蓄え、一冬の燃料と暖房対策にしていました。

冬仕事

雪の多い日、男の人達は出稼ぎに行かれる人も多く、婦人達は縫い物、編み物、藁仕事などパチパチと柴の燃えるいろりを囲んで、隣近所の人達も集まって世間話を楽しみ、村人のコミュ

ニケーション、心のふれ合いも図られて、親子の話し合う機会も多かったと思います。

雪の量や雪の期間が短くなったのと、生活の科学が進んで、昭和四十年頃まで雪と共に暮らしたあの頃の冬の生活の苦楽が懐かしく、その思い出と少年長の方のお話も交えて綴ってみました。

《第五集所載》



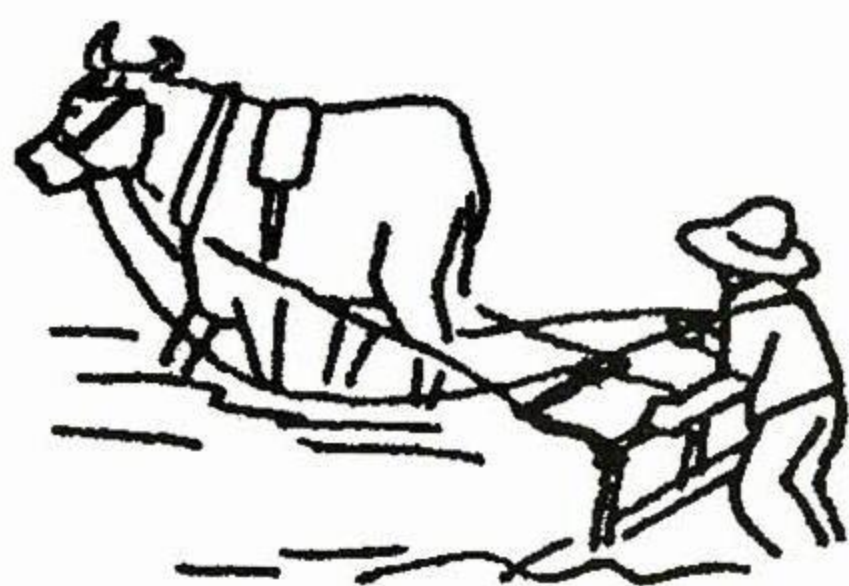
田植事と田の神祭り

中岸 幸大

苗代

四月中旬から苗代予定田では厩肥（牛の食べ残した草や糞と牛の尿や糞）が農家にとっては大事な肥料を田に振りまいてから、牛に「から鋤」を引かせて荒鋤をした。ある程度土が乾けば、また牛に「まぐわ」を引かせて土を細かく砕いたりした。

それが終わると田に水を入れ、畦に土を寄せて水もちのよいように人工の畦を作った。そして、また牛に「代かきまぐわ」を引かせ田の土をもっと細かくしたり、表面を平らにしたりした。それをじょうれん等で畝代を作



「牛を使つての田植の準備、代ずきの一場面」

り、軽く表面を平らにして、いつでももみ種が蒔けるようにする。

倉に大事に保管しているもみ種を出してきて、八十八夜（立春から数えて八十八日目、即ち現在の五月二日頃）を目安に苗代にまいた。

そして、じょうれん等で表面を押え、発芽するのを待った。もみ種の発芽の

様子や田の水温、病害虫、鳥類からの被害、水の管理、おどし等もして、苗の順調な成育を願つての気配りも大変だった。当時は病害虫がつきやすく、現在のようない速効性の農薬等はなかったのである。

田植

五月下旬から六月一杯にかけて、他の田すべてに田植えができるようにしたいのだが、実は裸麦や小麦が殆んど蒔いてあつて（二毛作）その麦類の刈り取りが終わらないと田植えの準備ができなかつたのである。当時としては少しでも農業収入を上げるために、殆んど農家は二毛作をしていたのである。従つて各農家は天候と麦の刈り取りと田植えの準備等で、次から次へと気の焦りと農作業の過重労働に追われるようになってくる。

麦の刈り取り後は田の荒鋤をして田に水を入れる。人工の畦を作る。水もちの悪い田は、牛に引かせて二回は代かきまぐわをかける。勿論田の土のさばけが悪い田は牛にまぐわを引かせて、田の土を少しでも細かくする。

苗代の苗が十五糎ぐらいに育つて伸びてくると、田植予定田の面積に応じて早乙女（苗代の苗とりや田植えをしてもらう女性）を依頼する。

田の苗取りをして束にする。苗束を



種まき（小倉公子氏提供）

苗取り (小倉公子氏 提供)



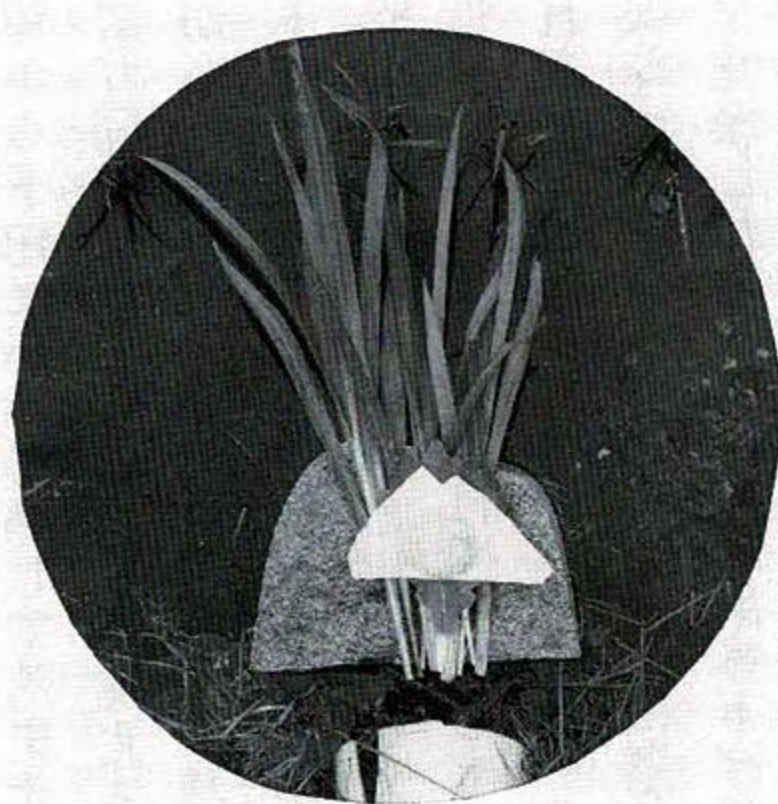
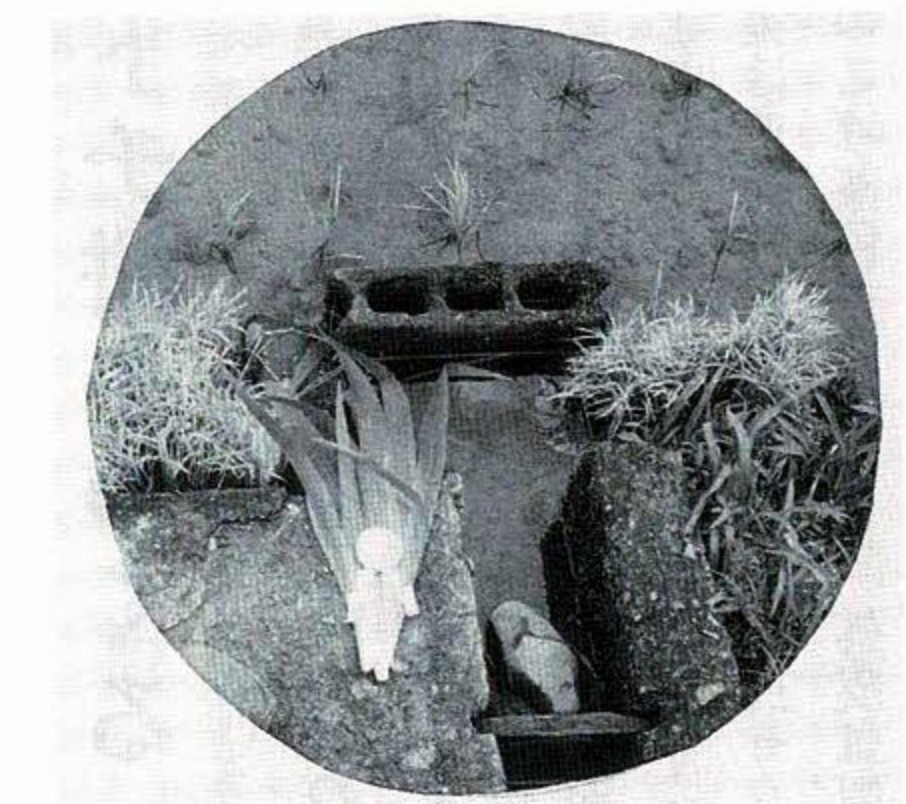
く見られるようになった。
早乙女の一人当たり一日に苗取りと田植を含めて、大体三畝位が能率相場と考えられていた。しかし、それも苗代の状態、苗の成育状況、田への移動距離、田の状況等によって違いがあった。

早苗上り

各家庭は自分の家の田植が全部終われば、今までの農作業への苦勞、一段落とした喜び、家族相互の協力への感謝等を込めた夕げをする。混飯、手料理、酒等を食べたり飲んだりして喜び合う(当時としては御馳走)夕食が早苗上りである。勿論その時には早乙女さん達をお呼びして一緒に食事をした。その時に田植中の失敗、困ったこと、楽しかったこと、今後の問題点なども話題になり、楽しい一時を過ごす。

時と場合によっては早乙女さん達に田植作業日には昼食や夕食を出して食べってもらうこともあった。

一家にとって、牛も勿論農作業の担い手であった。過労ぎみの時には麦を煮て食べさせたり、野菜物やみそ汁なども食べさせたり、飲ませたりもした。米のとき汁や米糠なども牛の常用飲食であった。子牛を受胎している時は余り無理をさせないようにして農耕に使った。



田の神祭り

野休み日に田の神祭りをする農家が大部分だったように思う。しかし、その家の早苗上りが終わったあくる日に田の神を祭られる農家もあった。

田の神祭りは一つ一つの田の水の取り入れ口(みなくち)のそばに菖蒲、やぶしゃか、たか草(山にある菖蒲のような多年草)、栗の葉や実のなりかけの枝、柊等の上に米の粉で作った団子、またはちまき(柏餅)等を供える。また竹か割り箸かに御幣(細長い木かその枝に細長い白い紙を切ってはさんだもの)をつけて、田の神に「この秋の取入れまで病害虫や風水害、野鳥等にやられないで豊作でありますように、どうぞよろしくお守り下さい。田の神様お願いします。」という豊作の祈願を込めて田の神を祭った。これが農家の田の神祭りである。

特に菖蒲は強いよい香を放ち、病気にかからないようにという願いと、菖蒲の長くて細長い葉の形が鋭利な刃に似ているために病害虫や野鳥や風水害等を刺したり、切り殺したりして田を守ってくれるという願いの象徴でもあった。また栗の葉やいが、柊の葉は尖った部分で病害虫を刺したり、食い止めて稲を守ってくれるという農民の素朴な願いでもあった。菖蒲は男の子の節

句と言葉のあやで「尚武」^{しょうぶ}をかけ合わせた意味もあった。

家の子供達は父（祖父）についてまわり、田の神様祭りや祈願が終われば、その団子等を頂戴して食べた。子供達の楽しみの一つでもあった。

当時としては肥料も農薬も殺虫剤等もない頃だから、藁をもつかむ農家の熱い豊作の思いを神頼みに託したのである。農家が段々と機械化され、各種の肥料や農薬等が出回りだすと田の神祭りも段々と影をひそめ、見受けなくなった（田の神祭りの写真は筆者の作爲的撮影による）。

野 休 み

その集落内の田植が全部終わる頃に区長さんと農会長さんが協議して、その集落内の野休み日を決める。勿論、今年の早乙女賃を一日いくらにするかも協議した。当時小野では「歩きさん」（集落内一軒一軒に集落内の大事なことを知らせてまわる人）がいて区長さんからの野休み日と早乙女賃を知らせた。野休みは一日だけだが、その集落全体が休日であった。

各農家は早乙女に来てもらった人への賃金の支払に回った。集落内一斉に早乙女賃支払日でもあった。農機具、道具、牛等を洗ったり、手入れする農家もあった。これで一切田植ごとが終

わったことになる。

これからは暑い日ざしの中で田返し（手押しの道具で、田の草を取ったり、田の表面を耕す器具）やうち肥（厩肥を田の中に入れていく）、田の畦やまわりの草を刈って肥料代わりに田へ入れるような作業を繰り返して、稔りの秋を待つのである。

終わりにになりましたが、今回の聞き取り調査に快くご協力下さった早川さんご夫婦に深く感謝申し上げます。

《第六集所載》



田返し

トチ餅をつくる

中 谷 こ め

トチは樹齢五十年、六十年から二百年以上の老木に実をつける。したがってどこにでもあるものではない。

実は普通直径二センチから三センチ位のこげ茶色をしており、外皮は厚く梨の皮のような色彩をしている。九月上旬から下旬にかけて熟して落果するので、同じ時期の栗の実と見違えることがある。

トチ餅を作るにはこのトチの実を十日から二週間くらい水に浸けて虫を駆除し、その後天日で十日程度干し上げ、これを保存する。

保存には風通しの良い網袋等に入れて、乾燥した場所を選んで吊り下げる。トチ餅をつくる時は干したトチの実を取り出し、水に一日から二日間浸けて元のトチの実に戻し、トチヘギという用具で皮をむく。「へぐ」というにはトチの実を圧縮してトチの皮をむくことである。

皮をむき取り出した実は二キロないし三キロを網目の袋にいれて流水（川）に浸ける。浸ける期間は一週間程度で最低でも四日間、それに流水（川）が必須条件である。

次に流水より引き上げた実の量一に對して一・二の割合で木灰を混ぜ合わせた上、鉄鍋かハガマ等に入れて九十度程度の熱湯でかきませ合わせながらドロドロになる程度にかきませる。それを一昼夜以上保管すればトチの実のアクが抜ける。

更に木灰でアク抜きした実を取り出して、水でトチの実を洗い上げる。これに使う木灰は上木の灰がよい。この実をモチ米と一諸に蒸してつき立てるとトチ餅が出来る。

このようにして出来たトチ餅はほろ苦く渋みがあり、その独特の芳香と淡白な歯ざわりは最高である。

トチ拾いの経験豊かな人のお話では、こんな「トチ拾い」の様子が聞かれました。

トチの木は、さがい（傾斜の急なところ）山や崖っぷちに多くあります。二百十日が来れば、「もうトチの実が落ちるぞ」ということで、よく拾いに行つたものです。

朝早く暗い内に山へ行つて夜明けを待ち、夜が明け出すと、大きな木の下の葉っぱの間や、木の株の周りなどに落ちていたトチの実を丹念に拾い、「コイズ」に手早く入れながら、目だけは次の実の方へ走らせ、一粒でも多く拾おうとしたものです。

朝、夜明け前に家を出るため、一人

では恐いので、二、三人連れ立って行くことも多く、それだけに、拾い出すと他の人に負けまいとして、夢中になることも多かったのです。

お年寄りから「トチの木の種類にはよくまむしがいるので気を付けえよ」と言われたり、魔除けに鈴を持って行くこともありました。

よく落ちていた時には、背負って来た「なんきん袋」に次々移して、一人で一斗ぐらいは背負って帰ることもありました。

また、トチの木の種類はみんな同じだと思っていました。やはり種類が違うのでしょうか、皮つきで落ちる木と、実だけで落ちるのがあったことが今でもしっかりと記憶に残っています。

それから今一つ忘れられないのは、春の山のあちこちに、大きな木に咲いた白にほんのりとしたトチの花の姿です。

昔から、レンゲの蜜に劣らぬ香りと味を持ったのがトチの花の蜜だと聞いたように思います。あの頃の蜂蜜は、自然の中で沢山の花の世界を自由に飛びまわって好きな蜜を採っていただろう。今はすっかり様変わりしてしまっ

も出るのが今の私の思いです。

《第六集所載》

雑魚とり

中岸 幸大

じゃこつり

私の子供の頃には四月から十月にかけて自己流の竹竿を作り、釣針釣糸に適切な錘をつけ、餌は畑のごみをかきわけ「みみず」を探し出して、缶詰の空缶か適当な入れ物に入れて川へ釣に行ったものである。

釣ったじゃこは川端の柳の枝か笹竹の下をまるめて、魚のえらから口へ通してぶらさげたり、布の袋等に入れて川を移動した。

釣れるじゃこは「やなぎずばい」「赤ずばい」「白はい」「青べん」「どろばい」等で、時々「いだ」や「いだこ」「ひらべ」等が釣れることもあった。

釣ったじゃこは家に持ち帰り、腹わたを出してから金網で焼いたり、竹串にさして焼いたりもした。時には煮たりもした。勿論食事のおかずである。また他の煮物のだしとしても使った。

ひらべ（やまめ）は美味しい。赤ずばい（川むつ雄）や青べん（おいかわの雄）、いだ（うぐい）等は煮物のだしにすることが多く、うまい魚とは

言えない。やなぎずばいや白はいは竹串にさし、焼いてから、藁束に刺し、保存食として食べることもあった。

ゆでさらえ

五月中旬頃になると田植準備の一つとして灌漑用水路を掃除したり、水漏れを補強するために、溝干しをする。これをゆでさらえといった。

このゆでさらえは子供にとっては一つの楽しみであった。水路にいる、いろんなじゃこが捕れるからである。学校から走って帰るなり、バケツか籠かそうけ等を持って、溝に入り、じゃこを捕るのである。

「やなぎずばい」「白はい」「どろばい」「あかにこ」「どじょう」「あたんぱち」「ひらべ」「うなぎ」「ぎぎ」「鮎」等が捕れた。鰻をとって自慢した子もいた。

量の多少はあっても、男女の違いはあっても、お互いに楽しみ、喜び合っていて、じゃこつりをしたものだ。

ぎぎ、あかにこ（あかぎ）、しまどじょうのひれの棘に刺さるとすごく痛く感じて手を離してしまう。男も女も大なり小なりさされた経験をもって、特にあかにこにはよく刺されたものである。女の子があかにこに刺されたと言って悲鳴を上げているのに、よく遭遇した。

引原ダムの工事以降、あれだけ沢山いたあかにこやあたんぱちの仲間がめっきり見えなくなった。

ゆでさらえで捕ったじゃこは家でコンロの上に金網を置いて焼き、食用にした。

小野では上ゆで、中ゆでがよくじゃこが捕れたように思う。

夜づけ

六月下旬から八月にかけて、「みみず」「どじょう」「ひる」等を餌にして、夕方に大きな石や護岸の石垣等のえた（鰻が住みやすい穴や場所）に夜づけを仕掛けて置く。自己流に夜づけをつけた場所に目印をして置くのだ。翌朝早く、仕掛けておいた夜づけを引き上げるのが大変楽しみだった。鰻がかかっている時の手ごたえや醍醐味は例えよりのない快感であった。鰻以外にぎぎやうしあたん（なまずの一種で小柄な魚）も捕れた。

捕れた魚は手作りの布袋に入れて持ち帰り、背中を切り開いてコンロの炭火で焼いたものである。夕食のおかずを提供して家族に喜んでもらうのが嬉しかった。当時は蛋白質源として、鰻は特に重宝がられた。

深い所では糸を長くして、大きな錘をつけ深づけをしたり、一本の長い糸に五、六本から十本までの短い糸をつ

け、両端に重い錘をつけた長づけ等もしたことがある。このつけ方には大きな鰻やぎぎ、鯉等が捕れたこともあった。

しかし、一匹も捕れなかったときはさすがと人目につかないように小走りですぐ帰ったものだ。

気象情報が十分でないので大雨、夕立などで増水し、仕掛けた夜づけを全部流してしまった苦い経験もあった。全く意気消沈で、家の人にも友達にも話さないようにした。

しかし、近所の大人から鰻が捕れたら、たとえ一匹でもわけてもらえないかという依頼が飛び込むこともあった。また、安賀や上野の食堂や店屋へ行って行けば買ってもらえた。よく捕る子は小遣金になった。私も何回か捕った鰻を買ってもらって、夜づけ糸や針を買ったこともあった。

籠づけ

夜づけをする時期に籠づけもよくしたものだ。直径六糎位で、長さ六十糎程度の竹で編んだ細長い籠の先に草を刺し込んで、籠づけが流れたり、動いたりしないように、石で左右や上からも押さえて置く。勿論籠の中の餌はみみずを詰め込んでおく。

鰻はみみずの臭いを嗅いで籠の中に入ってくることになる。籠の中の鰻は

一旦入ったら出られない仕組みのために出ることができないのである。

籠づけは川(引原川)でもしたが、溝でもよくつけた。籠づけの籠は自分では作れないので買ったものを使っていた。

天気予報はなかったもので、自分の思いや予測で籠づけをした。夕立や大雨等で増水して、籠づけや夜づけが一夜のうちに流されたこともあった。そんな時に落胆消沈。誰にも話さず一人反省と悔しさが何日間続いたものだ。

祖父に天気予測を聞いてから、籠づけや夜づけの準備をしたこともあった。万が一に備えて丈夫なひもで籠を縛り、流されないように岸の柳や草の根っこにしっかりとくくりつけるようにした。籠づけは二つに一つは必ず入っていた。籠を上げる時に、重く感じた時は太くて大きいか二〜三匹入っている時もあった。

籠づけの鰻は無傷なので、店で買ってもらう時には少し高く買ってもらえた。

小野の溝でもよくつけた。当時は溝の水量も多く、夏場はいろんな魚が多かったものだ。でも、大川(引原川)の方が鰻も大きめであった。

玄能打ち

水温が低くなった川ではじゃこ達は

石のえたに入って冬を越す。それをねらって玄能で石の上を打つと振動や衝撃でじゃこが麻痺して浮き上がってくる。これを捕るのだ。

厳寒の時だけに手足は勿論、体中が寒くなって、長い間辛抱することはできない。素手で、すねの下までの長靴しかない。浅いところではか玄能打ちができない。余り捕れるものではない。十糎以内のはいじゃこが捕れる程度であった。

わりっこ

太い目の真竹を一米位に切って、七糎のところまで、竹を細い目に割っていく。最初のところに竹の輪をかませて固定する。一番下の節に適当な穴を五つ六つあけて水が通るようにしておく。これを「わりっこ」といった。川の浅瀬に石や小石、砂などを並べて、川下を狭くしたところに、このわりっこをつけ、流されないように周囲を石で重しをして置く。

翌日、これを上げに行く。何匹かのはいじゃこやあたんぱち等が入っている。多ければ家に持ち帰るが、少ないと、また川に放置して帰る。

水泳して寒くなると、「オーイわりっこしようか。」と言って、友達や下級生も仲間に入れてすることもあった。じゃことり遊びの面白さと下級生に教

える楽しさもあった。

水泳時のじゃことり遊び

(1) 水中もぐり

男子でよく泳げる者や上学年になると、水中にもぐって「えた」の中に入るじゃこをひっかけ針でひっかけたり、やすで突いたりして捕ったものだ。

水中にもぐって魚を捕ろうという楽しみと友達仲間のライバル意識、それによる自慢やまわりからの羨望等、複雑な心理も働いたものである。

いだやいだご、たまに鮎を捕ることもあった。

また、適当な石を持って水中にもぐり、石と石をぶつけあって、玄能打ち式にじゃこを浮き上がらせたりもした。

また、水中のえたにいるじゃこを素手で握って捕ることもあった。

やす鉄砲もあった。青年や大人で魚とりの好きな人の持ち物であった。最上級生になった年は私もやす鉄砲を手に入れた。狙った魚の捕れる確率は高かった。しかし、取り扱いに十分気をつけないと危険で、自分や周囲の子に怪我があってはならない。学校からは禁止令が出ていた。そっと内緒でタオルに巻いて川へ持っていった。

(2) ガラス箱かけ

小型のガラス箱は上学年になると持っ

ていた。浅いところで、ガラス箱で水中を見て、ひっかけ針や、やすでじゃことりをした。しかし、ガラス箱を使っ
てじゃこに遊んでもらったというのが本音であった。

(3) そうけすくい

水泳して寒くなると男も女も川でじゃことり遊びをした。特に女の子は家のそうけを持ってきて、浅いところであ
たんばちやのんみんじゃこ（一糶ほどの小さなじゃこ）を掬い上げて捕る遊びである。

わりっこ方式の手法で、男女一緒にな
って、浅瀬に石や小石や砂等で川の流
れをつくる。そこへあたんばちを追
い込んで、その流れの下にそうけをう
けて捕る。この遊びが面白く楽しく時
間のたつのを忘れる。

家の大人に呼びに来られることもあ
った。

補足追加

① かきのたね

小野には道ガゼという呼び名の川に、
かきのたね（おやにらみ）という珍し
い魚がいた。現在もいるそうだが、極
少ないと聞いている。

大きくても五糶から八糶位までだ。
このかきのたねは引原川では、この小
野のこの場所あたりにしかいないと言

われている。当時時々学校へ持って行
き、教室の水槽に飼った。水槽に入れ
ると三〜四日で死んでしまう。お互い
に飼育法がわからなかったからだろう。
食用にならないが、観賞用になる魚で
ある。

非常に警戒心が強く、数も少なかっ
た。短い竿、短い糸、小さな釣針に小
さな餌をつけて、根気よく釣るしかな
かった。背びれやえらに刺があるかの
ように握るとクシツと痛く感じる。こ
の魚は繁殖率が少ないのか、成長が難
しいのか、謎めいた不思議な魚である。

② 子供の頃は戦時中

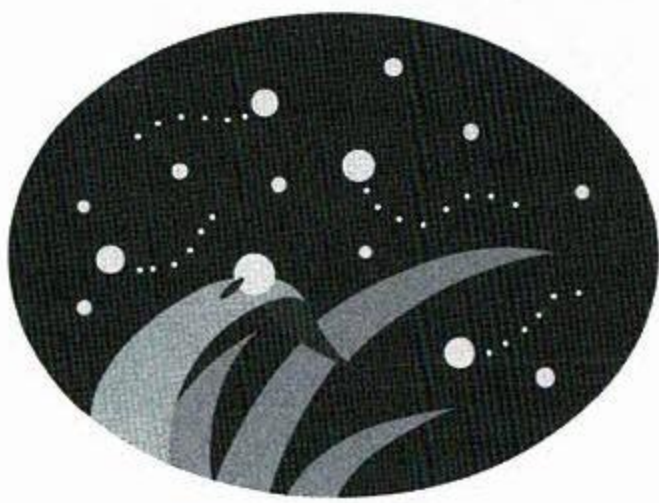
私は昭和十二年（日華事変）に小学
一年に入學した。十六年第二次世界大
戦、戦争は激しくなり、男性は兵隊に、
青年は志願兵や徴用に駆り立てられた。
私の父も兵隊に行った。

どことも集落の中は老人、女性、子
供が中心であった。私は田畑、草刈り、
牛の世話、山林等、あらゆる仕事を祖
父や母に教えてもらいながら大きくなっ
たようなものだ。従って、じゃことり
は祖父や集落内の上級生や同級生から
学んだ。じゃことり、水泳、川遊びは
土曜日や日曜日の午後が中心であった。
夏の川は子供の天国のようなものだっ
た。小野の区域の引原川を上から下へ、
下から上へと自由奔放にかけずり回っ

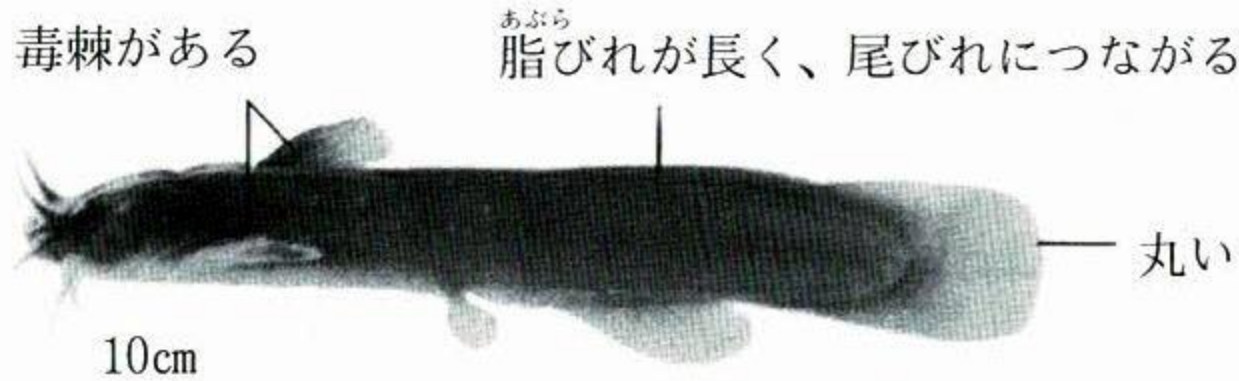
たものだ。今でも川の岸や土手に立つ
と、子供の頃のじゃことり、水泳、川
遊びが走馬灯のように甦ってくる。
終わりにになりましたが、今回の聞き
取り調査に快くご協力下さった片山さ
ん、上山さん、河野さん、また「ふる
さと歳時記」を発行された中山曉尚さ
んに深く感謝申し上げます。

子供の頃のたいそう楽しい思い出
ですね。「雑魚とり」は昔の子供にとっ
ては一番の楽しみだったかも知れませ
ん。今の子供は川遊び、魚釣りなどやっ
ているのかどうか…。

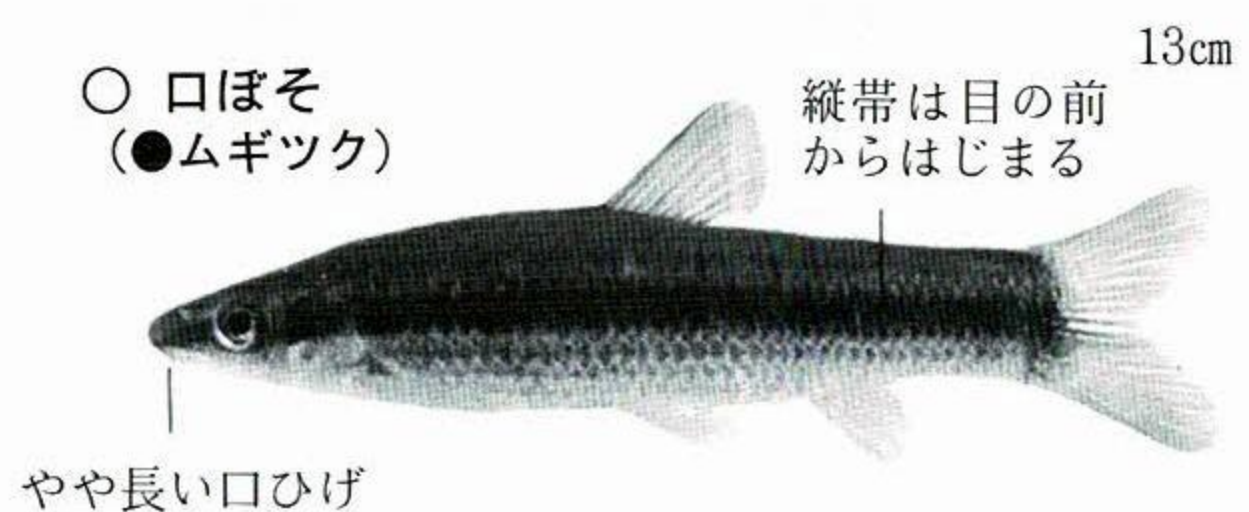
《第七集所載》



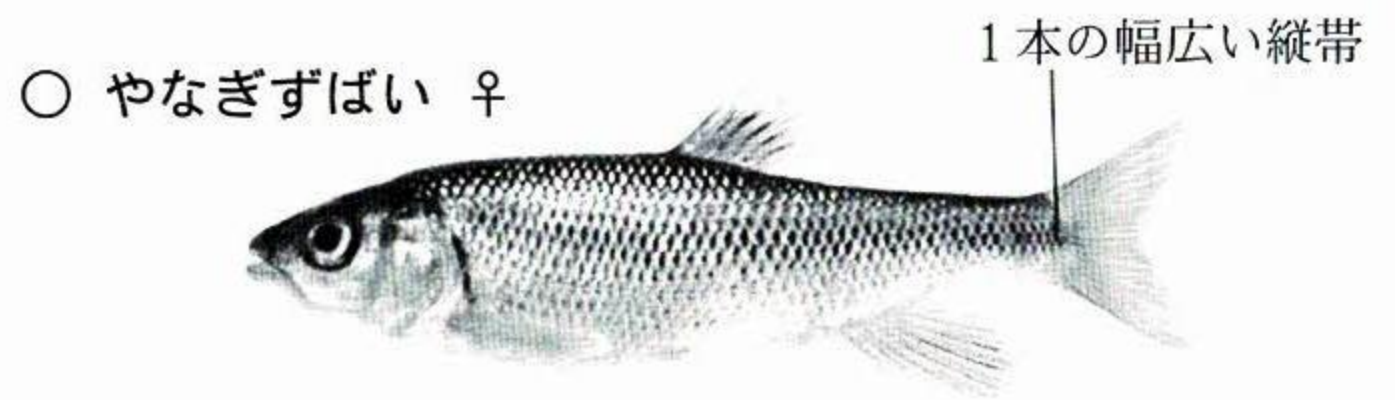
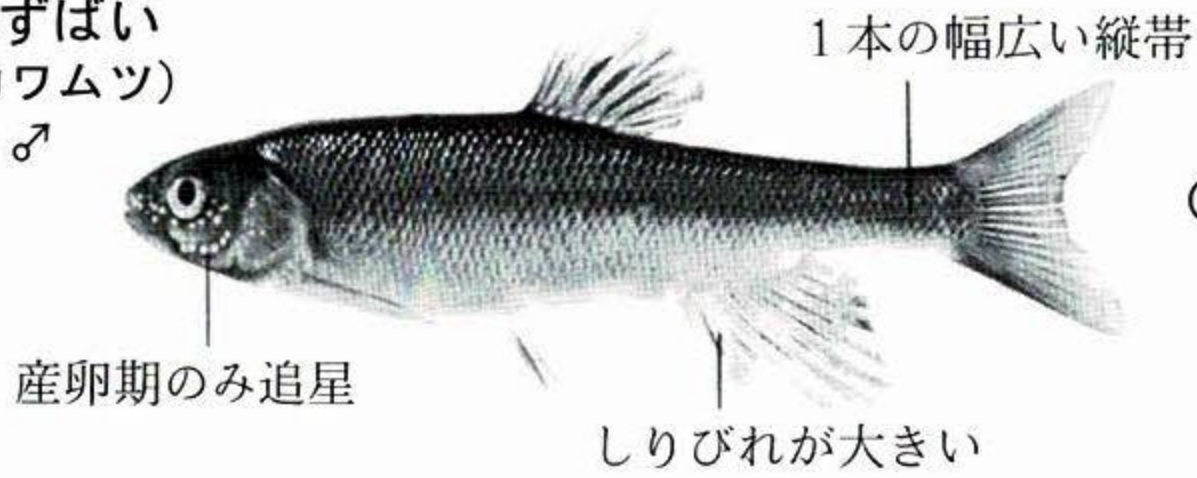
○ 赤にこ (●アカザ)



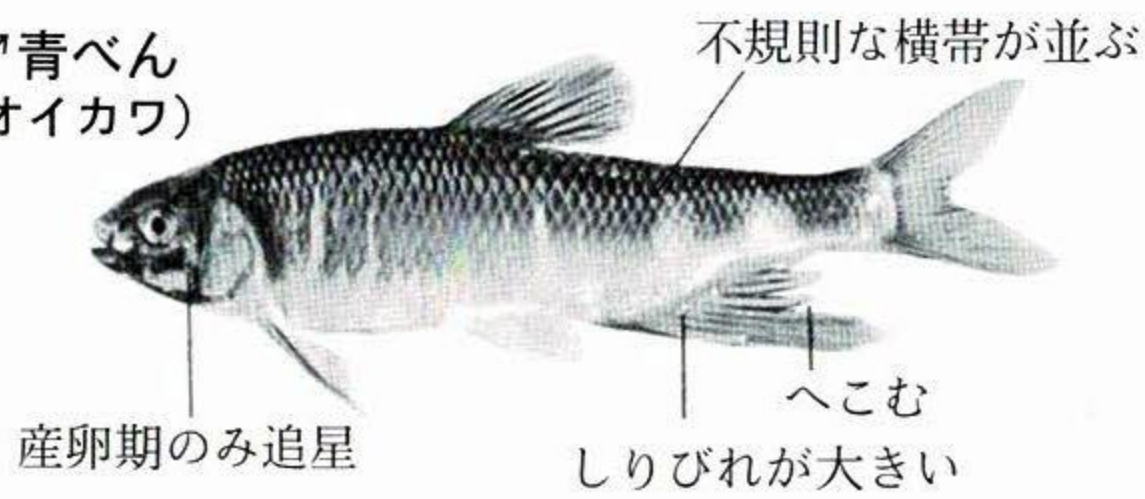
○ 口ぼそ (●ムギツク)



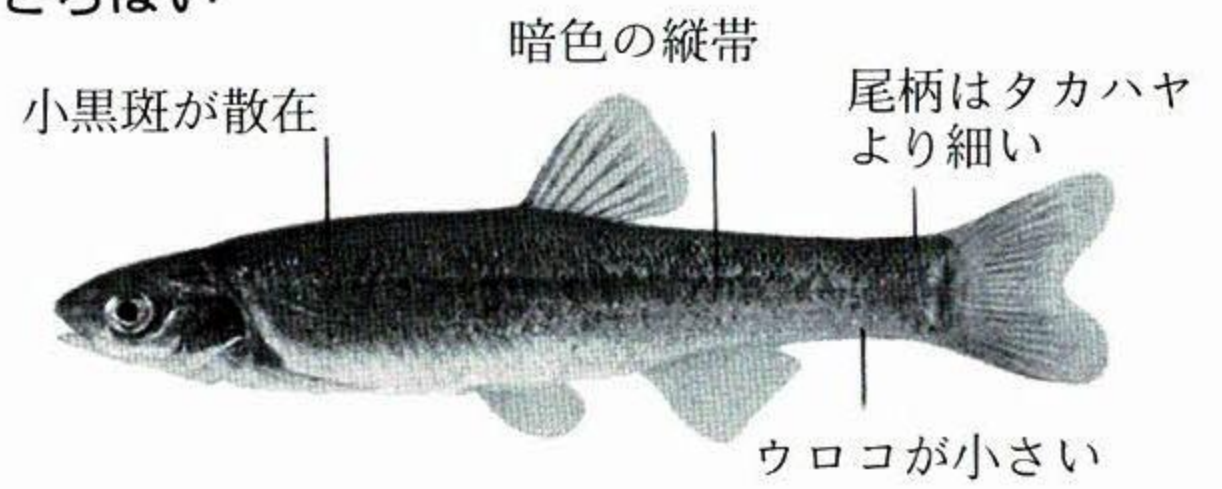
○ 赤ずばい
(●カワムツ)
♂



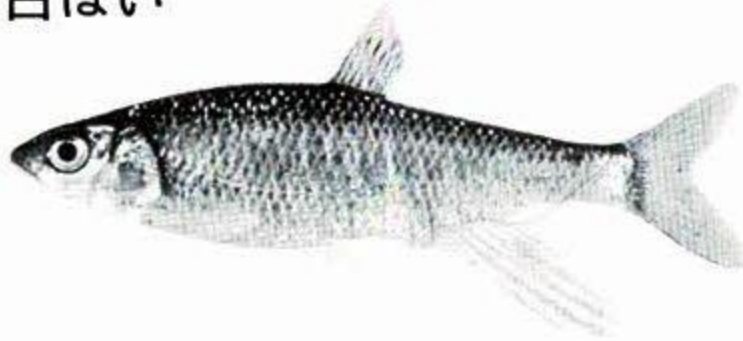
○ ♂青べん
(●オイカワ)



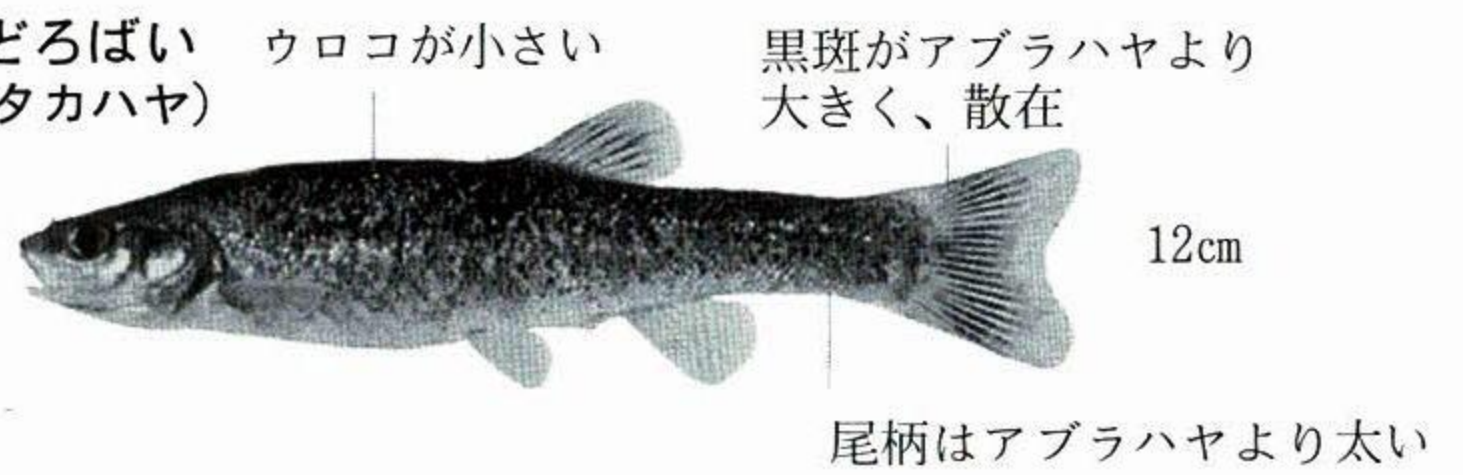
○ どろばい



♀白はい

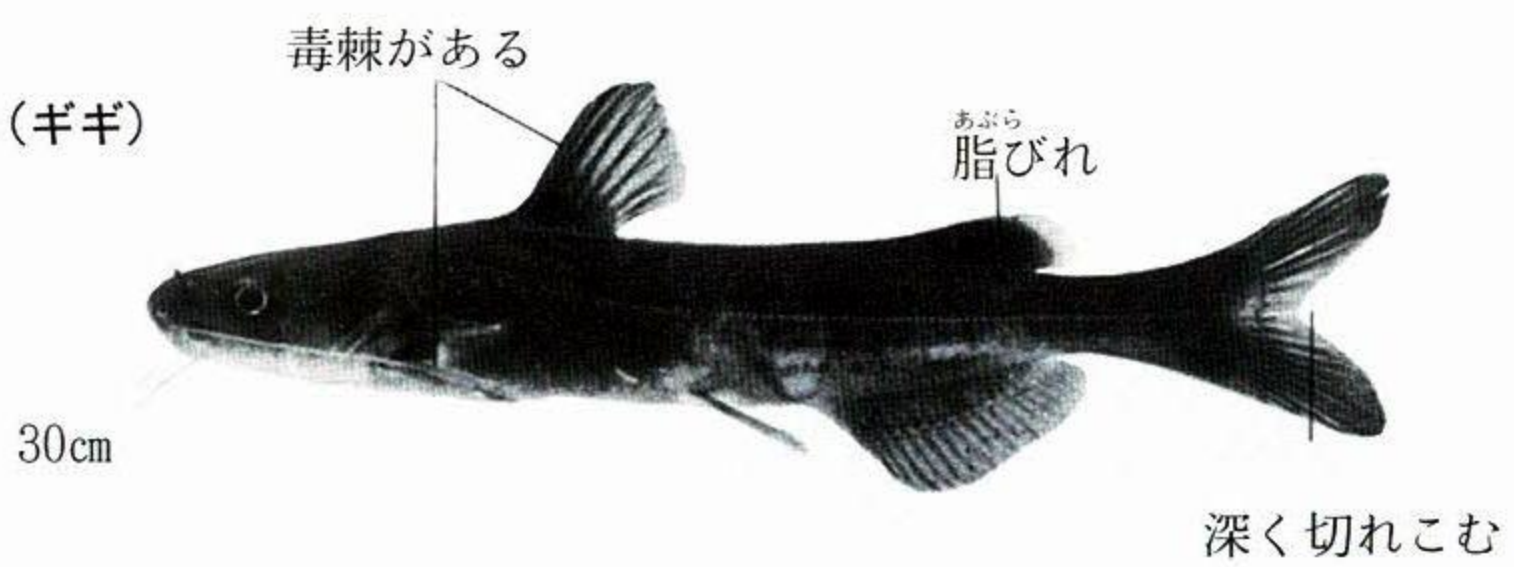


○ どろばい
(●タカハヤ)

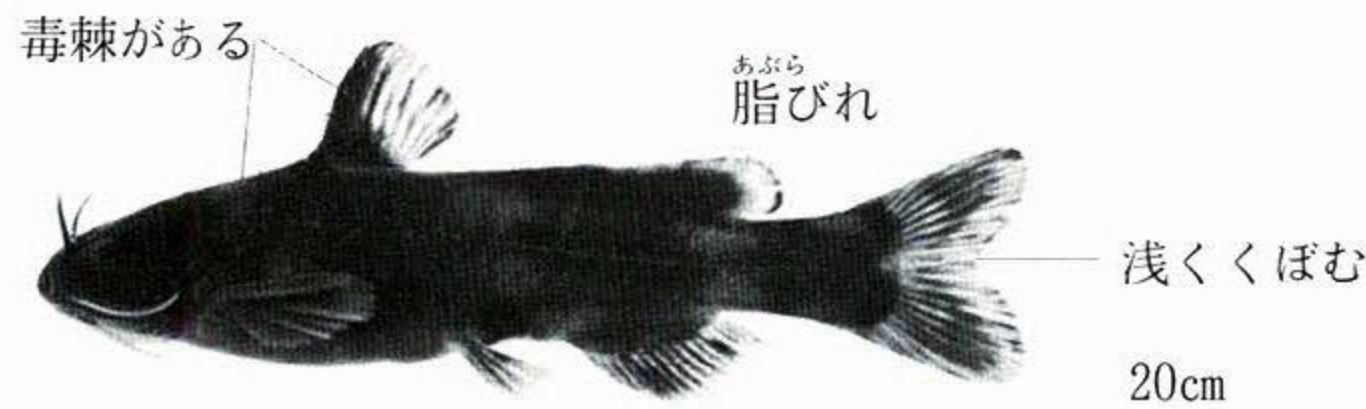


○ ぎぎ

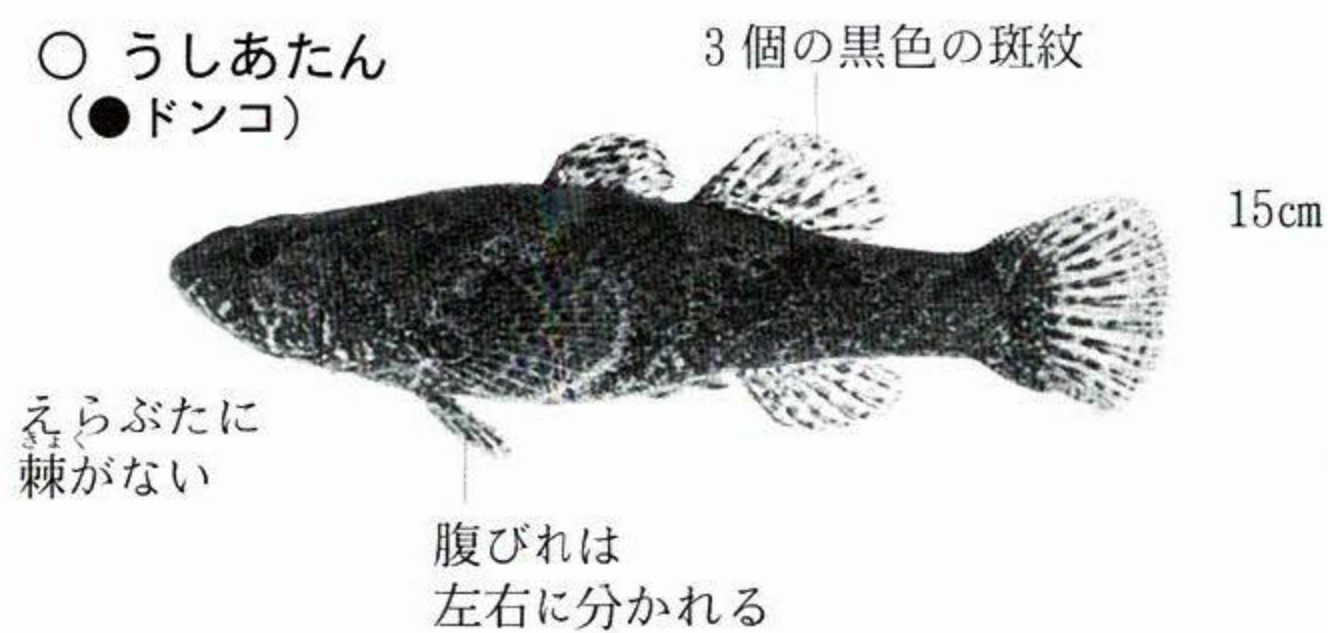
●ハゲギギ (ギギ)



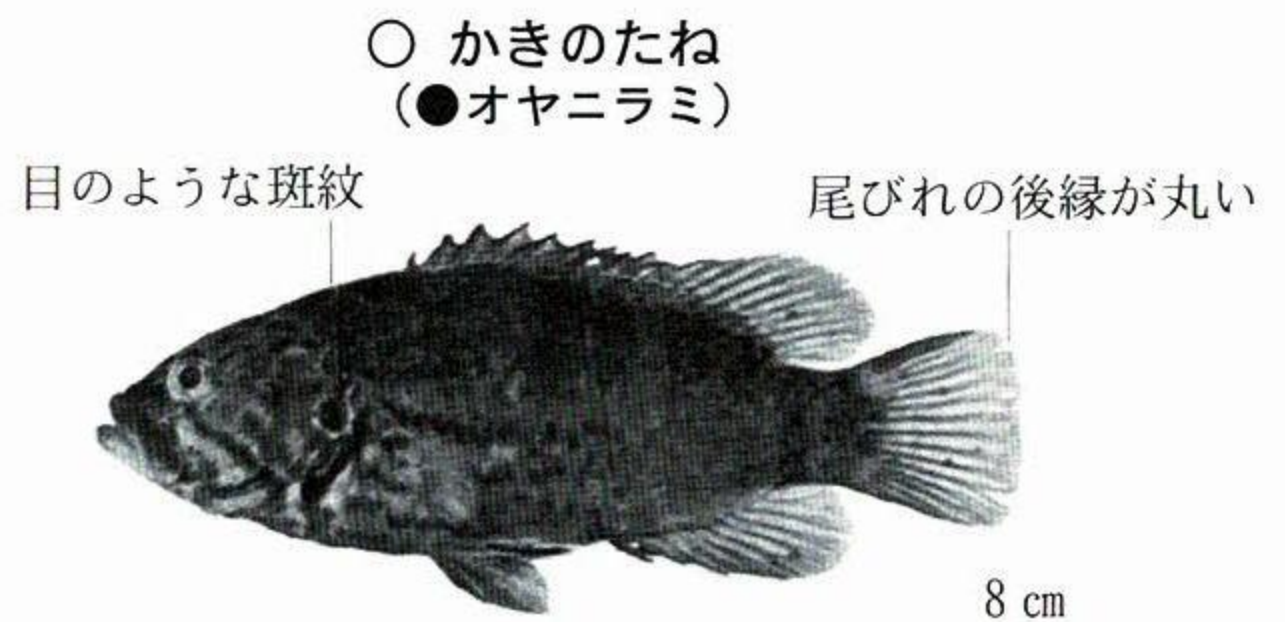
●ネコギギ (ギギモドキ)



○ うしあたん
(●ドンコ)



○ かきのたね
(●オヤニラミ)



※魚の大きさは写真通りではありません
※○は私達の呼び名です
※●は学名です

お産にまつわる風習

大成 みちよ

産育

妊娠の兆候は「腹が大きくなつた」とか「やや子が出来た」とも言う。

これは月がよんどんだり、つわりが始まったりすることで判断した。月は月経をさし、よどむとは止まることである。つわりは二カ月位からあり、気分が悪くなったりする。本人は何となく気分が悪いなど軽く考えていると、他人がい

帯の祝いはなから月(五カ月目)になつ

たら帯をしめる。帯は晒木綿一丈もの(三米)をした。これをちから帯という。昔は親父(亭主)の禪ぜんの古くなつたものを腹帯にしめるとお産が軽い等といったものがあるが最近の若いお嫁さんはそんなことはしないし、産婆さんが衛生上の立場から禁じた。

産

と産婆に診てもらふ。村の診療所に免状をもつた産婆がいて、妊娠中から出産までのすべての注意と世話を受けることになっているが昔は母親や、慣れた老婆を頼んで面倒をみてもらった。それでも出産の時に湯を沸かしてもらうだけで、あとはすべて産婦が自分で始末したといわれている。

昔は子供が出来ると眉を落とすに角にみえるから、角にみえないように剃り落としていたが次第に誰もが信じなくなり眉を剃り落とすことはなくなつた。

妊娠の禁忌は妊娠中には、いろいろと

忌まれる行為があつてかたく戒められていた。例えば次のようなことがある。

○妊婦が火事をみておなかを撫ぜる

と胎児にアザが出来る。

○妊婦には葬式の役をもたせない。

又妊婦のツレアイ(主人)もこの役に出てはいけない。

○妊婦は襷たすきなどの長いものを縫うてはいけない。

○妊婦は袋を縫うてはいけない。袋を縫うとフクロゴ(薄い膜をかぶつた子供)が産まれると言われた。

○妊婦はサンダワラを敷くと臀しりのないう子が出る。サンダワラに限らず俵かますや吠かますも同じように忌む。便所を綺麗にすると綺麗な子が生まれる。

○お風呂によく入ると垢ぬけした子が生まれる。

産

室は産室にはナンド(納戸)を使う。出産に際しては納戸に蓆むしろを敷き、ワランブ(藁のハカマ)を敷き、その上に紙又はボロ(古布)を敷いて分娩する。初産であつても実家へ帰つて出産することはない。かならず婚家で出産することになつている。たとえ祝言(結婚式)の前でも行儀悪く妊娠したよ

うな場合は男が承知するか、又は男の家から世話をさせてもらいたいと申し出があつたりして男の家へ出産した程である。

何人もの若者とかかわりをもつ

て妊娠した場合には、男たちが相談して引き受ける者を決める。決まればその男の家で出産の世話を

する。行儀の悪い娘には皆、手をひいて相手にならぬこともあつた。

そうならば止むを得ず実家で身二つ(出産)にするが、これは不名誉とされ、実の父親の家で子を産むのが当然と考えられていた。

分娩前後は産気づくことを「オナカガイタクナル」とか「ウミケガツク」ともいう。お産にはシオドキがあり、潮のさしひきによって産まれるという。満ち潮には人が生まれ、引き潮には人が死ぬと伝えられている。

以前は座つたままで分娩し、背中かますにふとん(農家では吠)をあて六日間(納戸の中だけの生活であつた。巢立ち迄の六日間は座つた姿勢を保っていたが、今では横になつて産むようになった。

臍へその緒は長く切ると小便が遠いといつて五、六寸(約十八糎)のところから缺で切つた。臍の緒は乾燥させて保存し、グイ(ソゲとかトゲ)がたった時に、男なら女の臍の緒を水にぬらし患部にあつてるとよいと言われ、異性のものを使つた。

て妊娠した場合には、男たちが相談して引き受ける者を決める。決まればその男の家で出産の世話を

アトザン（胞衣）は納戸のお産をした床下に埋めるか、又は屋根の下、便所の脇などにも埋めた。屋根の雨垂れより外へ出さぬものとした。

ヤヤコ（嬰兒）は産れるとすぐウブユ（産湯）を使わせる。

初めての子が生れた時に父親がいと次のお産の時にも父親が外出している間は産気がついてもなかなか生れずお産が長びき父親が家に帰ってこないと生れないときえ言われた。その反対に父親が外出している時に初めての子を産むと次のお産の時も外出しないと産れない等とも言われている。

産神様 安産を祈る神仏をお伝えします。

○子安地藏 原には本村のお大師堂にある。はじめは別に観音堂に安置してあったものである。

○舂米さん 鳥取県八頭郡菅野村大字舂米のお宮、この権現さんは安産の神様と言われた。

○塩釜さん 奥州の塩釜さんは、安産の神様と言うのでお花を立てて遥かに拝むことがある。

○その他に大工さんが棟上げの時に上げた日の丸の扇子を産婦の頭の上になる天井に吊るすと安産する

と言われた。

産後の作法 出産してから次のような

ことが行われていた。

○チチツケ（乳付け） 生れた赤児は三日間は乳を飲まさないで、露の根と甘草などを煎じて飲ませる。綿を白絹で包み、チチマメ（乳豆）程の大きさにし、これに煎じた汁を浸して吸わせる。

四日目に初めて乳を飲ませるが、生まれた子が男ならば女兒のある婦人の乳をもらって乳付けをする。異性の子の母親の乳を初めて飲むのである。

○スタチ 産後六日目。この日から産婦は枕を高くして横になり楽に寝る。この日から産室（納戸）を出て家の中や表を歩くことが許された。お産の忌みは戒がきつく、神主は「死にケガレはかまわぬが、生みケガレはゴツイ。」と言いつダチして産婦が外出するようになっても川は三十三日経たなければ渡れなかった。

○名付け 産後八日目。この日生れた子に名前をつける。名付け親は親類の者に頼む。以前はこのことをフデオヤとも言ったが一般には名付け親と言う。

名付けには赤児の髪を剃ってし

まう。男女とも同じである。この生髪は紙に包んで築地の陰等に捨てる。太陽にあてることを忌む。初めて髪を剃る時は父親の茶碗の糸じきに水を入れ、この水で頭をぬらして髪を剃ると次から子供が剃るのを嫌われないと言う。二度目から剃ったり、切ったりした。これを人に踏んでもらうと頭がかたくなると言われている。

産見舞 子見舞いと言って出産後、八日目の名付け迄に産婦を見舞い生れた子を見に行く。この産見舞いにはオコ（米の粉にしたもの）を持って行く、オコはウルチ米一升到餅米三合を混ぜて粉をひき、これで団子を作り、こうたけ（香茸）と一緒に味噌汁に入れて産婦に食べさせると乳の出がよくなると言われスタチ迄の六日間は何回でも食べるとよい。

初宮詣り 男児は生後三十二日め、女児は三十三日めにする。

初宮詣りとは氏神様へ詣り、氏子にしてもらうのである。川を渡る時には「橋買うて渡る」といって橋を渡る度にお金とお米を紙に包んで橋に供えた。これらは近所の子供たちが自由に持ち帰った

のである。

神社にはいつも神主さんがいないので思い思いに拝んで帰る。その他村中の神仏に詣る。子供には宮詣り着物を着せる。母親は五十三日間は忌みがかかっているのと一緒に詣らない。

食い初め 生後百日めに食い初めの祝をする。膳には頭のついた魚をつけてくる。又川原から丸い石を三つ拾ってきて膳に載せる。石のようにしっかりどっしりした人間になるようにとの願いからである。御神酒を箸の先につけ、赤ん坊の額につける。ご飯一粒は赤ん坊の口の中へ入れてやる。

初節句 生れて初めて迎える節句には二つがある。

○ヒナハジメ（雛初め） 旧曆三月三日の節句で女兒に限らず男児も祝う。初めての雛の節句には親戚から銘々に雛の掛軸を贈る。お金で祝うこともある。この日、贈り物を下さった親戚を招いて祝の膳を囲む。

○節句はじめ 旧曆五月五日の節句。この日は男児のみ祝う。母親の実家から鯉のぼりを祝う。この日には客は招かない。

初誕生日ニタイジヨウと言ふ。タイジヨウ

ウ餅を搗き、濃い親戚に配る鏡餅にし、これを切つて豆の粉をまぶしたりして贈る。昔は鏡餅をまるく一つずつ贈っていたが、米が乏しくなり、切るようになった。

この餅は切る前に一升ます枡に一重ねの餅をのせ、風呂敷に包んで初誕生の子供にワイガケに背負わせる。ワイガケとは肩から脇下へ斜めに通すことである。この餅を背負つて歩く子もあり、泣く子もある。

産の忌ニお産のあつた家は穢れる。産

婦は六日間は産室におり、家の中は歩いて神仏の前は遠慮する。スタチをすれば外出は出来るが川は三十三日経たなければ渡れない。更に五十三日めに宮詣りをする。これ以後でなければ神仏の事はさわらない。産婦の夫も穢れているので五十三日の間は家の火で炊いたものは供えられない。

産見舞いに来た者も、主として親類の義理で見舞うが、この人たちも産家で湯茶を飲むと、自分の家へ帰つてもその日一日は家の神仏の前には行かずお供えもしなかつた。翌日から普通となる。

哺

乳ニ母乳の出が悪い時は、粉をひいてノリを作り、これを飲ませた。はじめは薄く月が経つにつれて濃くする。

乳がよく出る食べ物としては何よりも餅米である。粉にしたり味噌汁に入れたりもする。

子守り

子守りニヤヤコ(赤ん坊)をフゴ(藁で作つた深い入れ物)に入れて育てることはなかつた。若い母親は仕事に出る時には子供を連れて行つた。国有林の仕事に行く時には連れて行かれないので家に残しておいた。子供を帯で括りその端を柱にしぼりつけておくこともあつた。

背負帯をコンズイと言ふ。普通は夫の帯を使う。子供を背負うのは日中だから、夫は働きに出ているので帯はいらないのである。夜は子供が寝るので一本の帯で兼用することが出来た。

又ベンケイ縞を買つてコンズイにした。このベンケイ縞が買える家は子守り女を頼むことの出来る程の家に限られていた。

子守り女はコンズイの端を袋にして栗を拾い彼岸の焼米をもらつては入れたものである。

子供を背負つた時に着せる着物はオイブトンとコオイキモノの二

種類がある。オイブトンは小さいふとん(座布団)に紐ひもをつけ背の子供だけを包む。コオイキモノは、ネンネコともいって負っている者も両の手を袖に通す半天のようなものである。

捨子慣行

捨子慣行ニ子供が生れても育ちにくい家があつたり、弱い子供が産れた時には捨て子をして拾つてもらふ慣習がある。捨てる時期は決まっていないが、子供が這い這いが出来ない前にするので大体生後百日までに行ふ。

道の四ツ辻等を打ち合せておいて捨てる者は四ツ辻に置いて後をみずに帰る。拾つてもらふ人とはあらかじめ約束しておるので待ち構えていてすぐ拾つてもらふ。巻きぶとん等にくるんで捨てるのでそのまま拾い一旦は拾つた者が自分の家に連れて帰り、すぐに実の親の許へ戻す。こうすると丈夫に育つという言い伝えがある。

産

着ニ子供の着物の背には背縫いをする。女兒には赤、男児には白の絹糸で紋をつけるあたりに色々の形を縫いつける。この背縫いの糸は長く垂らす。長ければ寿命が長いと言ふ。背縫いをした着物は四

歳の正月に紐通しをする迄着せた。紐通しには帯をしてやる。この帯は親から貰うが濃い親戚からも贈られたものである。

産育習俗雑事

○オトゴニ末の子

○ウマズメニ不妊女性

○セライゴニウマズメは他家から子供をもらつて育てると実の子が出来る。この子をセライゴと言ふ。

幼児がヤヤコあそび(座布団を巻いて子守りをする動作)などをすると次の子供が出来始めるといふ。

お腹の子の男女性別を予知する方法として、ソロバンを使って計算することがあるというが詳しいことはわからない。又手を握り拳の指のつけ根の節立ちを人指し指から数えて行き、節と節との間とを順次に辿る。産月の数にあたる点が節か間かにより判別するとも言われたがはつきりしていない。

十九前髪はや落しゃんせ

わしも落そか細眉を

娘かわいや白歯で身持ち

笹にふる雪 はをかくす

こなしかわい

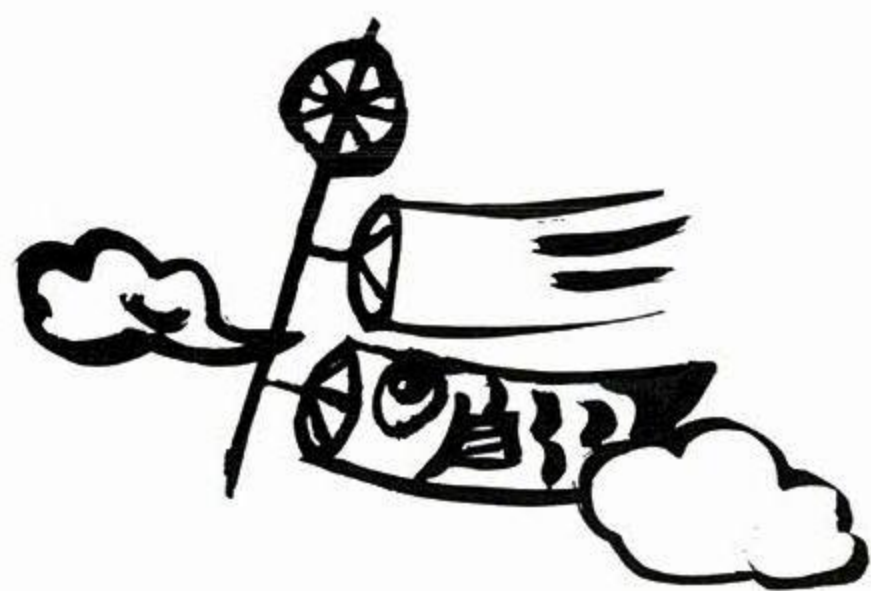
この世で楽な

死んで掘りやるか竹の根を
心中しましょか
髪切りましょか
髪は伸びます身は大事

以上のようにとても話好きの老婆が話の合い間合い間に俗謡をはさんで上手に説明されたそうです。このように俗謡を織り込んで語る話術もかつては広く行われていたものと思います。

この文は原の歳時記の中より引用転記させて頂きました。

《第七集所載》



柿渋と張りっこ

河野 トミエ

先日ある食堂で何気なくテレビを見ておりました、蛇の目傘などを売っているある傘屋さんでした。そのお店のご主人は、お客様に、「私は今でもずっと『柿渋』をつかっています。」と云っている言葉が耳に入りました。私は、まあなんと懐かしい言葉なんだろうと思つてテレビを見直しました。今でもまだ柿渋を使っている人達がおられるのだ。それならこれをヒントにして柿渋のことを書くこうと思ひました。

柿渋と言えませんが張りっこ張りの事が思い出されます。柿渋で何枚も何枚もの紙を張り重ねた張りっこはとても使いやすい農家の入れものでした。今ではあまり見かけなくなりましたが、古い家の蔵などにはまだあると思ひます。

少し思い出しながら知っておられる方にお聞きしたことなど書いてみます。

柿渋の作り方

柿渋は山柿、つまり自然に山に生えている柿でその渋柿は渋が多くてよいと言われています。然し、山柿はあまりありませんので二百十日前後の台風

で落ちた青い柿の実を拾い集めてよく作っていました。拾った柿の実は良く洗つて「へた」をとり唐臼で搗きます。唐臼は昔はたいの農家の玄関を入つた土間や奥庭という土間にありました。唐臼はお米を搗く足ぶみの石臼です。その唐臼で柿の実をつぶし、大体つぶれたものをそのまま瓶か容器に入れて一週間程ねかせておきます。それをよくしぼりその汁を適当な瓶などに入れておきます。それが柿渋です。張りっこを張る時は藁楷わらしべで作つた刷毛で張りっこを張つてゆきます。柿渋は昔はこの家でも作つて張りっこ張りに使つておりました。

張りっこ

張りっこは、箆やそうけ桶などの穴の開いたものや、破れたものに新聞紙や障子を張り替えた古い紙などを四角に切つて何枚も何枚も重ね張りにして作りあげたものです。張りあげた張りっこはお天気のない夜に戸外に出して夜露をうけておくととてもよい光沢が出て張りっこも強いと聞きました。

張りっこの使い方

張りっこには秋に収穫した穀物類、豆や小豆とか、米を選別した時に別けた二番米やくず米などを色々な分量に応じて大きな張りっこや小さな張りっこに分けて入れて置くとても使いやすい入れ物でした。

私達の子供の頃は今のようにプラスチックのきれいな容器は無く小さな張りっこに焼き米が入れてあつてそれをほおばつて食ふるととてもおいしかったことが懐かしく思ひ出されます。

物の不自由だった時代は、誰もがよく考え工夫して物を造り、そして造つたものは、ほんとうに大事に使つたものです。今のようにちよつと壊れたり汚れたりするとすぐに棄て、その棄てられたゴミで川も山も汚れるといううなことは全くない時代でした。

藁楷の刷毛

先日散髪屋さんでふと見かけた藁楷の刷毛、散髪屋さんには聞きますと、このわらしべの刷毛が一番使いやすいと言われました。散髪後の毛をはらうのにナイロン製などよりもぐしぐしなくて良いと聞きました。改めて、自然の物の良さを思ひ知りました。

《第八集所載》

あの頃の結婚式

大成 みちよ

今から四十数年前迄の結婚式は殆ど新婦、新郎を迎える家で行ってきたものです。しかし最近では式も披露宴も家で行う人は皆無とっていいでしょう。大きな建物の中で思い思いの趣向をこらし人生の門出を祝福するようになりました。

そこで現在では珍しい家での結婚式の方法や披露宴、そして料理等についてお知らせします。

結婚式は夕方から始まります。婚家相手側よりお迎えがきて出立ちの祝膳を頂いて、タクシーとか徒歩とかで嫁家へ向かいます。双方の親族が提灯を手に手に持って迎え入れて下さいます。荷物も当日運び込まれますので長持唄とか荷受け唄等をうたいながら長時間かかって運び込まれます。近所の人々が大勢お嫁さんとかお婿さんを見に集まっておりますのでその人たちへお嫁さんとかお婿さんのお土産を差し上げます。(お菓子)

いよいよ家へ入ります。玄関からは入りません。表の縁側より上がり双方の親戚が向かい合って座りお茶(こぶ茶)を頂きます。そして仏前に仲人の

奥様と新婦又は新郎が詣りその後納戸に入ってからため(三三九度)の盃を交わします。新郎の両親と新婦と仲人が向きあって座り、陰謡として謡曲が謡われ、男の子が、「おさかなこれに」と元気よく掛け声をかけると三三九度の儀式が行われこれで結婚の儀は終了します。

そのあと披露宴が始まります。いつの間にか夜が明けてしまいます。後日新郎の勤務関係で何回も何回も披露宴が行われます。



大体夜ばかり家で開かれますので結婚式後はそのもてなしにおおわらわです。

結婚式を執り行うことに関しても、料理一切をとりしきるのはすべて料理人の采配によるものです。

結婚式前日より料理人を家に招き全てを任せます。

私が結婚式を挙げたのは昭和二十九年三月八日、料理人の書き付けがありますので記してみます。

意味のわかりにくいところもありますが書き出してみます。

式の部

床掛軸 松竹梅 日の出 鶴 花台

梅花 筒 水盤

輿入れ 介添人 先祖参拜

相会礼 来客 媒酌人 当家

茶 菓 酌人 山下八重子

おち着 吸物 白もち 色板きのめ

祝言 松竹梅 鶴亀りょうとんぼ

三宝 銚子・盃

魚 うめぼし こんぶ

かつお

指頭人 山下八重子

披露宴の部 本膳

生 盛 さらがうど にべきずし

ひらめ なたね お多福豆

さくらんぼ きゅうり

パセリ



御津保 ほうぼう 竹の子

えんどう あんおけ

千代口 生いか すみそ

お汁

めし

香の物 光南漬 奈良漬

二の膳

家喜物 本鯛 浜やき 笹等

御平 かんぴょう しいたけ

えんどう ぶりの白煮

菓子碗 本鯛 うま煮 やき玉子

やさい入り 新上

口取り 青色ようかん 玉子焼

ぶりの照焼き りんご

しじみ 切り出し桜

伊勢エビ

松の物 ありの実 ネーブル

りんご 籠草 りぼん

煮物 ぼら 竹の子

刺身 ちらめ まぐろ きゅうり

へぎうど パセリ

照焼 ぶり すばす

寿 し〓卷ずし 赤白にぎり 箱

伊達巻

茶碗むし〓人参 ごぼう あなご

色板 ほうれん草

おこわ〓栗 山芋

煮 豆〓黒まめ

煮しめ〓山いも 白板 こうや

しら和え〓大根 人参 ゴマ トフ

きずし 鯖

吸 物〓ほうぼう 青み

取 り〓本鯛 ろう焼

取吸物〓はまぐり 青み

三月八日

以上

二十四人前

料理人当村

西川 嘉一

後客会席膳

刺 身〓けん にべ わさび パセリ

煮出し〓ぼら ほうぼう 竹の子

千代口〓いか たこ

吸 物〓はも 青み

口取り〓りんご 玉子やき

ようかん ぶり 色板

寿 し〓卷ずし 箱ずし

茶碗むし〓ぶり 白板 青みあなご

栗 ごぼう 人参

照焼き〓はも すばす

家喜物〓連子鯛 浜焼き

三月十一日

十七人前

以上

料理人

西川 嘉一

お祝いの膳は夜の更ける迄行われ、
招客さんは充分に楽しまれ祝いのお酒
も朱塗りの盃、一升、五合、三合入る
酒盃になみなみと注ぎ廻し飲みをして
行きます。その酒盃が何回も何回もま
わってきて、お酒の好きな人は結婚式
の思い出として出会う度毎に喜びの言
葉が年月を経ても挨拶として交わされ
ます。家族、親戚、知人、友人が結婚
した二人を祝い、交際も続きます。結
婚式当日荷物を婚家へ運びながら唄わ
れる長持唄



ハアー今日はナー日もよし

ハアー天気もよいし

結びナー合わせてよ

ハアー縁となるガエー

ハアー目出度ナー目出度の

ハアー重なるときは

天のナー岩戸を

ハアーおし開くヨー

ハアー蝶よナー花よと

ハアー育てた娘

今日はナー他人のヨ

ハアー手に渡るガエー

ハアー芽出度ナー芽出度の

ハアー若松様よ

枝もナー栄える

ハアー葉も繁るガエー

ハアー昇るナー旭日の

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー勢こめて

ハアー案じナーしゃんすな

ハアー二親さまよ

お里ナーがえりにヨ

いざなおしガエー

ハアー門にナー門松

ハアー三階小松

かかるナー白雪ヨー

皆黄金ヨー

皆黄金ヨー



荷物を運ぶのには揃いのはつぴを着
て長持唄を唄いながら運ばれるので
が、鏡だけは夫になる新郎が持ちます。
お嫁さんの荷物が多ければ時間も相当
かかりますので、鏡を持った新郎は大
変です。

蝶よナーヨー 花よとヨー

(ハーヤレヤレ) 育てた娘

今日はナーヨー はれてのヨー

オヤ およめ入りナーエー

たんすナーヨー 長持ヨー

(ハーヤレヤレ) 七さお八さお

あとのナーヨー お荷物ヨー

オヤ 馬で来るナーエー

笠をナーヨー 手に持ちヨー

(ハーヤレヤレ) さらにと言え

重ねナーヨー がさねのヨー

オヤ いとまごいナーエー

さあナーヨー お立ちかヨー

(ハーヤレヤレ) お名残り惜しや

今度ナーヨー 来るときゃヨー

オヤ孫つれてよナーヨー

昔の人たちは嫁入りのある度に唄ってこられたので大体の人はこのような長持唄はうたわれていたようですが、近年は長持唄を唄ったりしないで結婚式の一週間前位には荷物を住む家へ運ばれていたりと、運送屋さんが直接運ばれる事が多くなったので、長持唄を聞く事も稀になり、又唄う人も殆どなくなってきたという現状です。

(写真提供 荒尾千鶴子氏)

《第八集所載》

とんど世につれ

○はじめに

一月十五日頃の正月行事を小正月という。その中でも「とんど」は代表的なもので左義長、とんど焼き、とんど、とんど焼き、ほじより、火祭りともいう。ところによって呼び名も、とんどづくりも、火つけ日もいろいろで、変わりながら受け継がれてきた伝承文化の一つである。

○とんどづくり

真竹の青竹三本から十本ほどを支柱にし、四角錐か、円錐状にして、対角線に四本の縄か紐を張ってつくっていく。とんどの背丈が十メートル前後になると、風圧でバランスをくずして倒れやすくなるので固定するためである。

波賀町内では集落のかたまり、地形、過去からの慣例等で、あちらこちらに分かれて、小さくても数多くのとんどが受け継がれてつくられてきている。

とんどづくりの材料は青竹、笹竹、樹木の青葉、藁、木材等でそれを縄紐等からためてつくっていく。注連縄、注連飾り、松飾り、裏白、譲り葉等も加えて飾り立てる地域もある。とんどの根元に二畳間ほどの空間をつくり、

中岸 幸大

その中で子供達が持ち寄ったお菓子やお供物、町内会、自治会、団体等からの「とんど作りご苦労さま、留守番ご苦労さま」のさし入れを分けあって食べながら、一定時間、その中で楽しく遊ぶのである。

とんども時々悪質な火遊びか、いたずらで焼かれてしまうことがある。

大きいとんど(親とんど)、小さいとんど(子供とんど)の二基をつくっている地域もある。子供とんどは親が子



供の健やかな成長を願う象徴としてつくられた。(これは姫路近辺に多く見受けられる。)

とんどづくりの場所は広い安全な川原、田んぼの中、集落内の安全な場所等が選ばれてつくられてきた。近年このとんどづくりは大人だけでつくるところが増えてきた。少子化、子供の怪我を警戒する親の意向がある。しかし大人と子供が一緒になって子供に教えながらつくっていく地域もある。

とんど日前の土曜日とか日曜日にとんどづくりをする。かなりの人手が必要なので、申し合わせた日時に集まって作業する。燃やす材料集めが大変である。藁が主要材料の地域はコンパインで藁を小さく切ってしまうので藁集めが大変な苦労となっている。地域によってはとんどの材料を各自が事前に持ち寄っているところもある。身近に青竹や燃やす材料が少ないところは集めるのに苦労が多い。親から

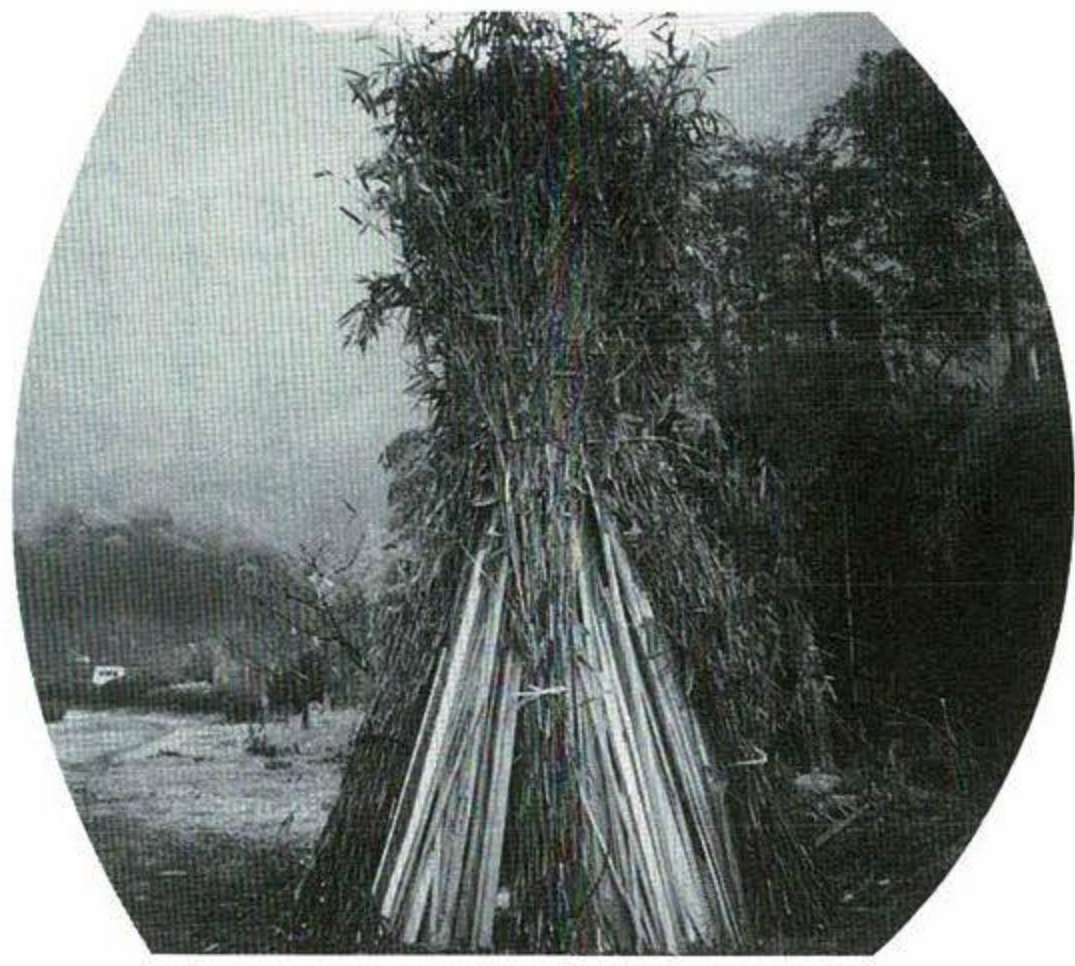
子へ、子から孫へと受け継がれていく
とんどづくりは地域文化の貴重な財産
だと思ふ。

○とんどの火つけ日

とんどの火つけ日は従来は十五日の
朝が多かったが、近年では十五日に近
い日曜日とか成人の日等におこなわれ
るようになった。また地域によっては
十四日の夕方（午後三時半頃から四時
半ごろ）に火をつけるところもある。

休業日とか休校日は各家庭は勿論地
域全体が気分的にゆったりと落ち着い
た気持ちになれるから多くの人が参加
でき、地域のふれあいも広がる。当番
かその地域の責任者の口上祈願で点火
される。

各家庭で祀られた注連飾りは勿論門



松等もこの時に燃やすこともある。

都市や地域によってはお宮さん、お
寺さんの広場で燃やすところもある。

点火の日時には深い根拠はなさそう
である。

○とんどにかける願い

とんどにかける願いは千差万別とは
言わないが、いろいろと言ひ伝えられ
ている。

○とんどの火にあたれば、その一年間
体が温かく元気で過ごせる。

○悪霊や悪魔を追い払ってくれる。

○無病息災で暮らせる。

○疫病を焼きつくす。

○魔除けになる。

○「ひび」や「あかぎれ」をしない。

○戸口に灰をまけば蛇や百足むかでが家には
いらぬ。

○灰を顔につけると病気をしない。

○とんどの灰をこたつに入れると火
（ぬくもり）が消えない。

○とんどの灰をかまどや炉に入れたら
魔除けにもなる。

○とんどで自分の書き初めが高く上っ
たら字（毛筆）が上手になる。

○とんどの火で焼いたお餅を小豆粥あずきかゆか
ぜんざいにして食べれば元気で病気
をしない。

○とんどの火で焼いたするめや鯛を食
べると元気で暮らせる。

○とんどにあたりながら酒を飲めば元

気がわいてくる。（大人だけ）

○とんどで焼いた鏡餅を「かき餅」に
しておく。雷がなった時に、そのか
き餅を焼いて食べると、雷が落ちな
い。

○とんどで焼いた鏡餅を食べると、長
生きをする。

唯一、今も記憶が蘇る書き初め上げ
について一寸付け加えておきたい。

私の子供の頃、正月の二日か三日に
書き初めをしていた。その中の一番よ
く書けた作品を学校へ提出する。その
次の作品三点ほどを、とんどの書き初
め上げに使う。

とんどが一番燃え盛っている時を見
計らって細長い笹竹の先に書き初めを
刺してさし上げる。上へ舞い上がって
いくことを祈りながら書き初め上げを
する。高く上がれば字（毛筆）が上手
になると言ひ伝えられてきた。子供同
志、同級生同志で競争したものだ。大
人も一緒になって「高く上がれ、高く
上がれ」と応援してもらった。今頃は
子供が少なく、書き初め上げの風景は
見られなくなった。

◎「ポーン」という大きな爆竹音が、
悪霊や悪魔を追い払う音だという。
縁起のよい音なのだ。

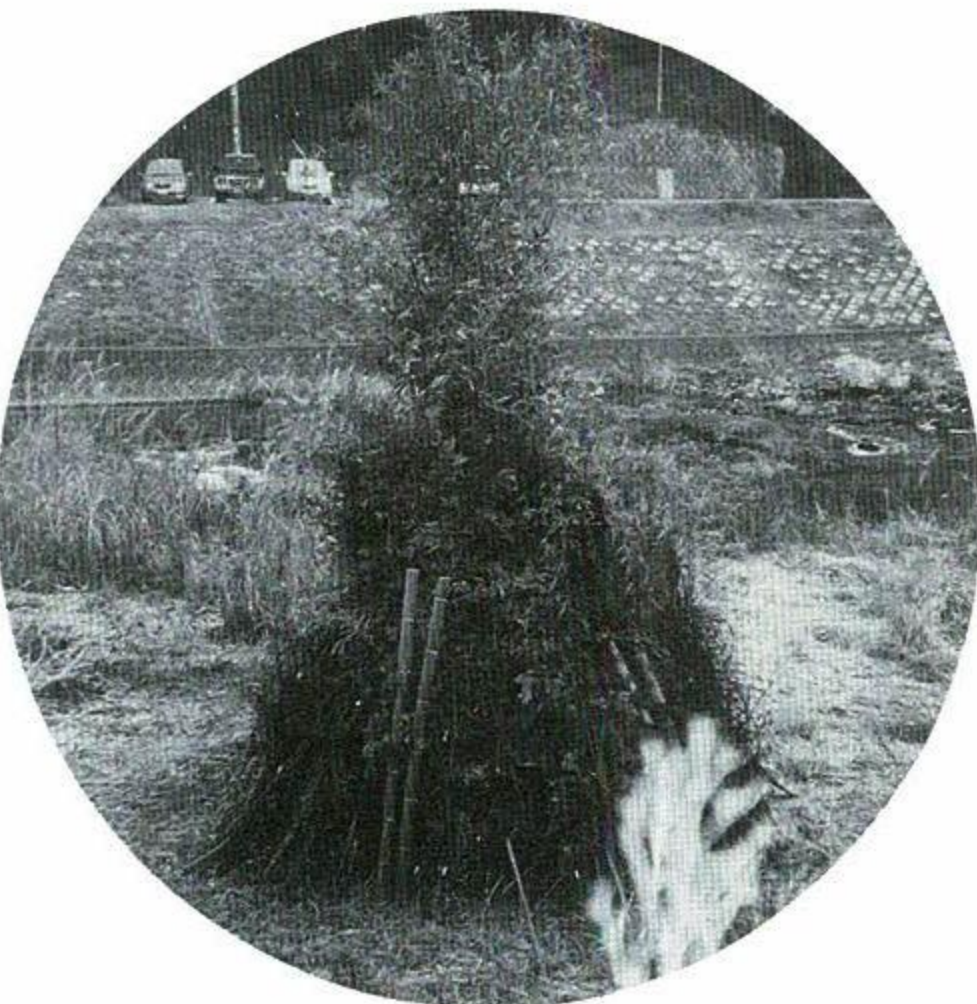
◎勢いよく燃えとんどは疫病や悪病
を燃えつくす火と考えたい。

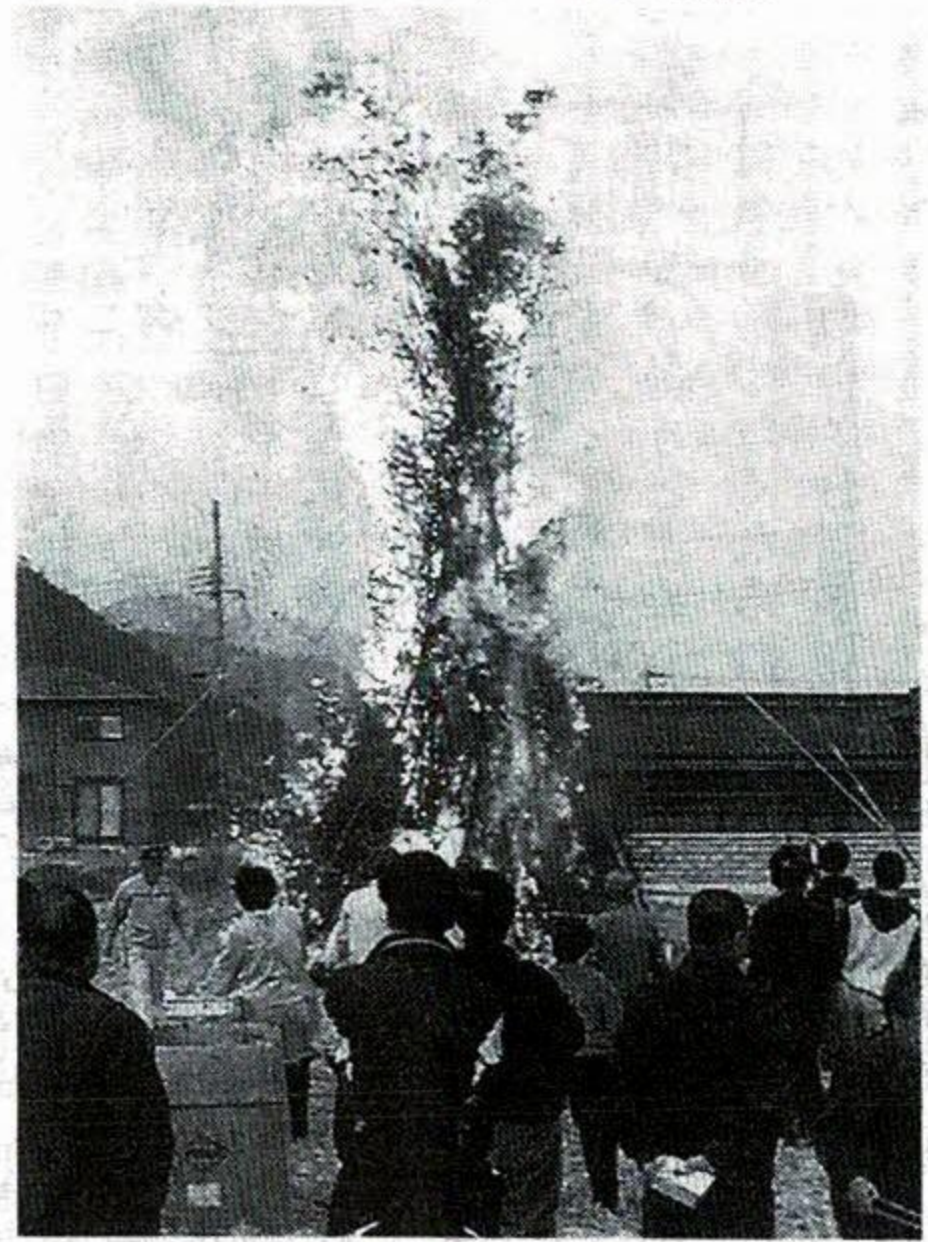
◎人間の体の芯まで温めるとんどの火
は人間にいろいろなエネルギーや元
気を与えてくれると思いたい。

◎人為的とは言え、自然の恩恵や崇拜
と深くかかわって、安心して長生き
のできることを願いつつ、一生涯を
終えたいのは人間誰しもの共通した
思いである。

○むすび

「あたる。あたらない。」「御利益ごりやくのあ
るなし」等は深く追及しない。一種の
呪いまじな、縁起、心の支え等によって、元
気が蘇よみがえったり、元気づけられることは
事実である。平安時代は宮廷で伝わり、
鎌倉時代以降は民間に伝わってきたそ
うである。とんどの年中行事即ち伝承
文化は非科学的であると言われようが、
今後も形や方法は変わるとしても、長
く続けて欲しいものである。





山崎 地域のきずな炎に願い

庄能地区の 2自治会 初の合同とんど祭り

山崎町庄能地区の庄能北、庄能南の二自治会がこのほど、住民のふれあい目指して、初の合同とんど祭りをを行った。

同地区の自治会は、もともと一つだったが、住宅、商業地域の南部を

中心に人口が増え、十一年前に二つに分かれた。以来、とんど行事も別々だったが、昨年春、地元とともに運営する「山崎ふれあいセンター」が出来たことから「手始めに正月のとんど祭りで交流してきた。

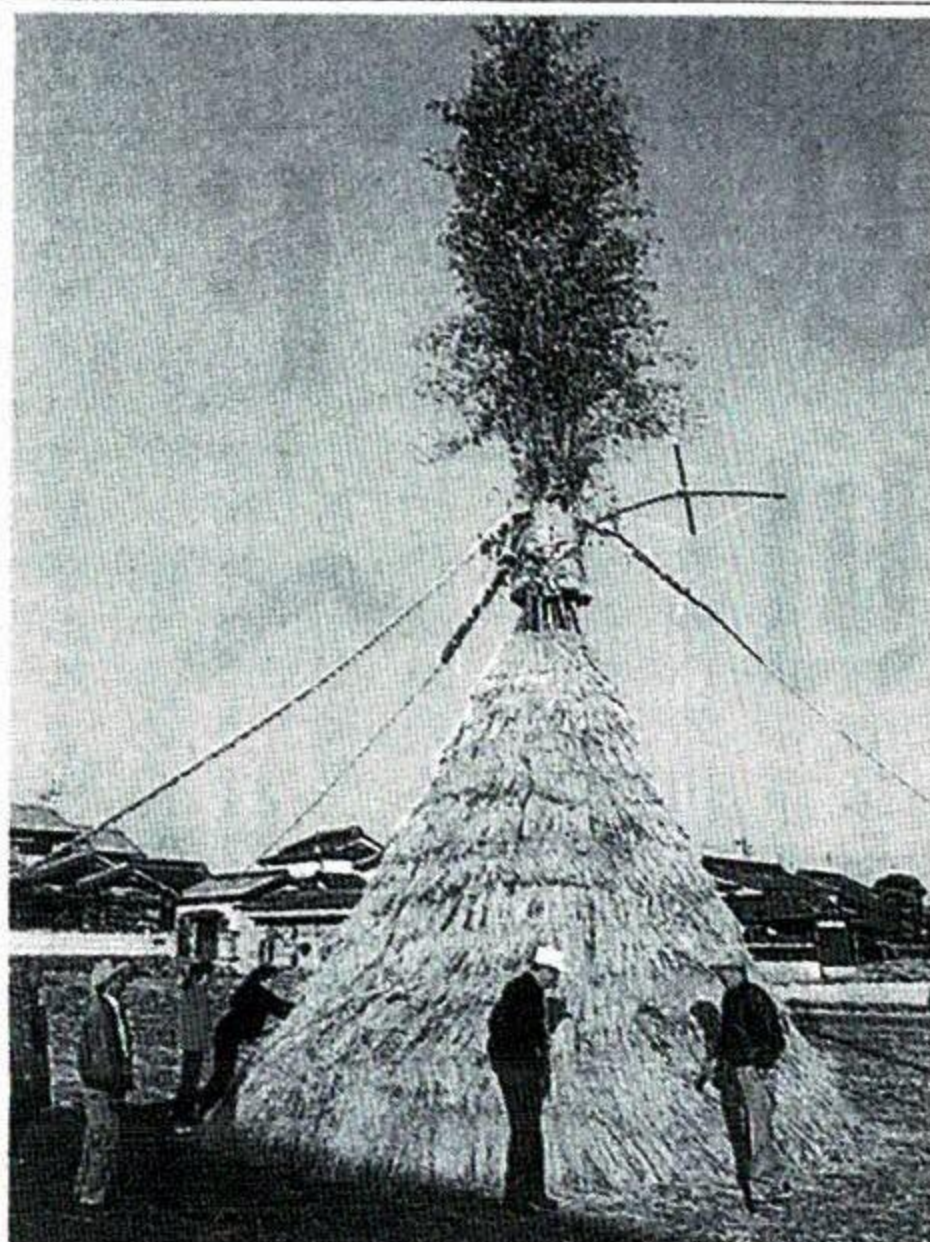
「戦後一時途絶えていたが、三十年ほど前、有志が復活させた。最後にもちを焼いたりし、伝統行事の楽しさを子らにも伝えていきたい」と山本会長。

ほとんど準備OK!?

西播磨各地 高さ10メートル超すものも

西播磨各地で、新春の五日に近い休日に実施する風物詩「とんど焼き」の準備が進められている。掛保川町市場地区では、市場自治会（山本正昭会長）の約五十人が半日ばかりで、青竹十数本やわらを使い、高さ十二メートルの巨大なとんどを農地に組み上げた。

とんど焼きは、正月のしめ縄や松飾りなどを燃やし、一年の無病息災を祈る小正月（十五日）の行事。祝日の「成人の日」が年によって変わるようになったため、近年は十



完成した「とんど」を見上げる住民たち
＝掛保川町市場

悪質火遊び？ とんど燃やす

太子町

十三日午後六時五十分ごろ、太子町山田の田に設置されていたとんど（高さ約十五メートル）が全焼した。

このとんどは、地元の山田自治会が設け、十四日朝から燃やす予定だった。近くに火の気がなく悪質ないたずららしい。十二日にも姫路市内で、同様のいたずらとみられる火事があったばかりだった。（龍野署調べ）

平成14年1月神戸新聞より

水車小屋の風景

中田光子

はじめに

精米の技術も今では随分進んで、電気のスイッチを入れれば、玄米もすぐにきれいな白米になって出てくる時代です。

お米は農家の自給自足の最たるもので、古くから収穫したお米を白米にするために色々な工夫がされたものと思われまふ。石の臼からうすに入れたお米を杵で搗いたり、足で唐臼からうすを踏んで搗いた時代から、水の落ちる落差のエネルギーを利用する水車の技術が生まれたのは、西洋では紀元前後にまで遡るとされているので、日本でもかなり古くから水車が利用されていたものと思われまふ。水車は溶鉱炉の送風、製粉、鉦山の排水、水田への揚水、現在では大規模な発電用のタービンなどその原理は広く活用されています。私の村でも古くから精米のために水車が利用されて来ました。その様子を調べて、書きとどめておきたくて、今はもう数少なくなられた明治生まれの方々を中心に聞きしたことes纏めてみました。

一、水車のいろいろ

水車には谷川の水の流れを利用するため、その水量や水流の位置によって大体次の三種類がありました。

イ、胸掛け水車

水流の位置が低いために、手前から水車の胸に水を掛けて、手前へまわる水車。

ロ、上掛け水車

水を箱桶で水車の上を持って来て上から水を落とし、向こう側へまわす水車、これは水の落差が良く最も力強くまわるので、一番良く利用された。

ハ、下掛け水車

水量が多いが、水位が低く、上から掛けることが出来ず、下方の水流を利用した水車で谷川では出来ないもの。

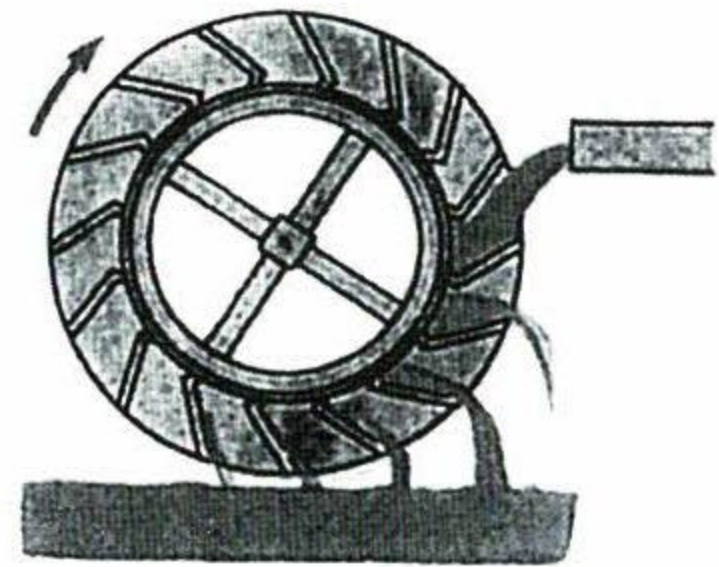
二、水車小屋の場所

今も昔も私の村では水は特に大切にされています。

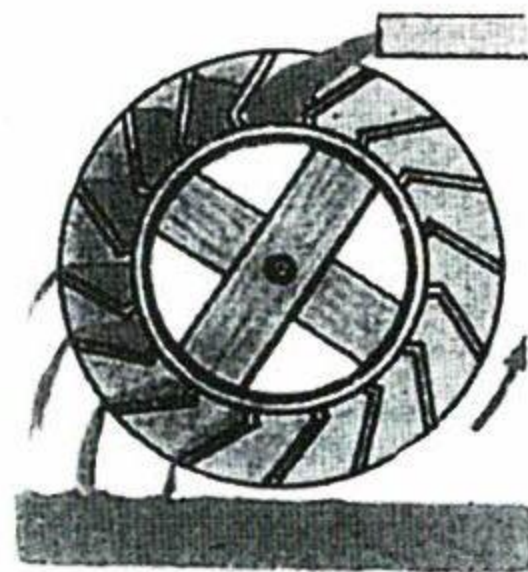
急な斜面の土地柄で、水の溜まる場所がなく、すぐ流れてしまうからでしょう。

それでも生活に欠かすことの出来なかつた米搗きのために、ささやかな谷

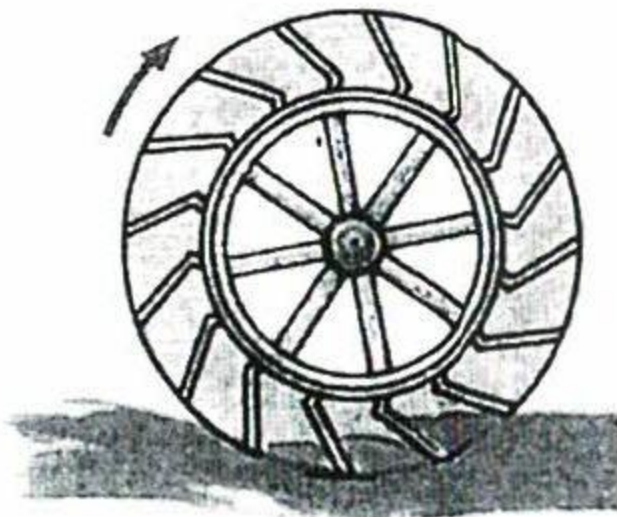
水車の基本形



胸掛け水車



上掛け水車



下掛け水車

間の水を利用して、いたる所に水車小屋がありました。

山からの出水の、あちこちの水が寄り合つて、村の南側に岡谷川と呼ばれる小川が流れています。その小川に添つて作られた水車が三〜四箇所はありました。

又それより少し北側の神明社の横にも細い谷川があり、この谷筋にも三箇所水車が作られていました。

古老のお話によれば飯見の水車は八箇所以上はあったとのことes。

三、水車作り

その昔草深い田舎の村々で、コットンコットンと褐色に年季を積んで水的光を放ちながら回っている水車小屋の風景を思うと、長閑のどかで、どこか懐かしくメルヘンの世界を思わせます。

水車は近所同士とか、隣保とか、気の合つた者同士、など共同でつくられました。しかし水車を組むには、かなりの技術が要ります。

水とたたかう物ですから、釘は使わずに、しっかりと組み合わせ、腐らないように檜など強い材質のものが必要です。

船大工などのように、水車大工という特別な技術の人もあったようですが、この地方の大工さんは誰も、その技術を持っていたようです。

水車小屋は、畳二〜三枚位の広さで、まわりの水を防ぐため、鎧止めといった工法で板が下から上へと、重ねて張ってありました。

普通二つの石臼が埋めこまれて、一段高くしてあり、水車の回転力を伝える六角の横軸に、強い矢を埋め込み、これが二本の杵を交互に、臼に落とし込むように仕掛けられていました。

四、米搗き作業

私の家は、遠い岡谷川の一番下の水車を利用していたようです。

水車小屋の扉の、鍵のついた大きな、木の札に戸主の名前が順番に書いてあり、月に二〜三度その札が廻って来ます。

その日は、一昼夜米や麦を搗きました。布の袋や、カマスにお米を入れ背負って運びます。

米搗きは、女や子供の仕事でした。一回に五升〜八升ぐらい入れ、早く搗けるように、石粉や水を少しずつ入れたり、途中水車の水を止め、糠を篩で取り除くこともありました。

お米の搗きこぼれを防ぐため、蔦で輪を作り縄を巻き、臼にはめると、お米が輪の外から中へ中へと、こぼれ落ち循環して搗けるように工夫がされていました。

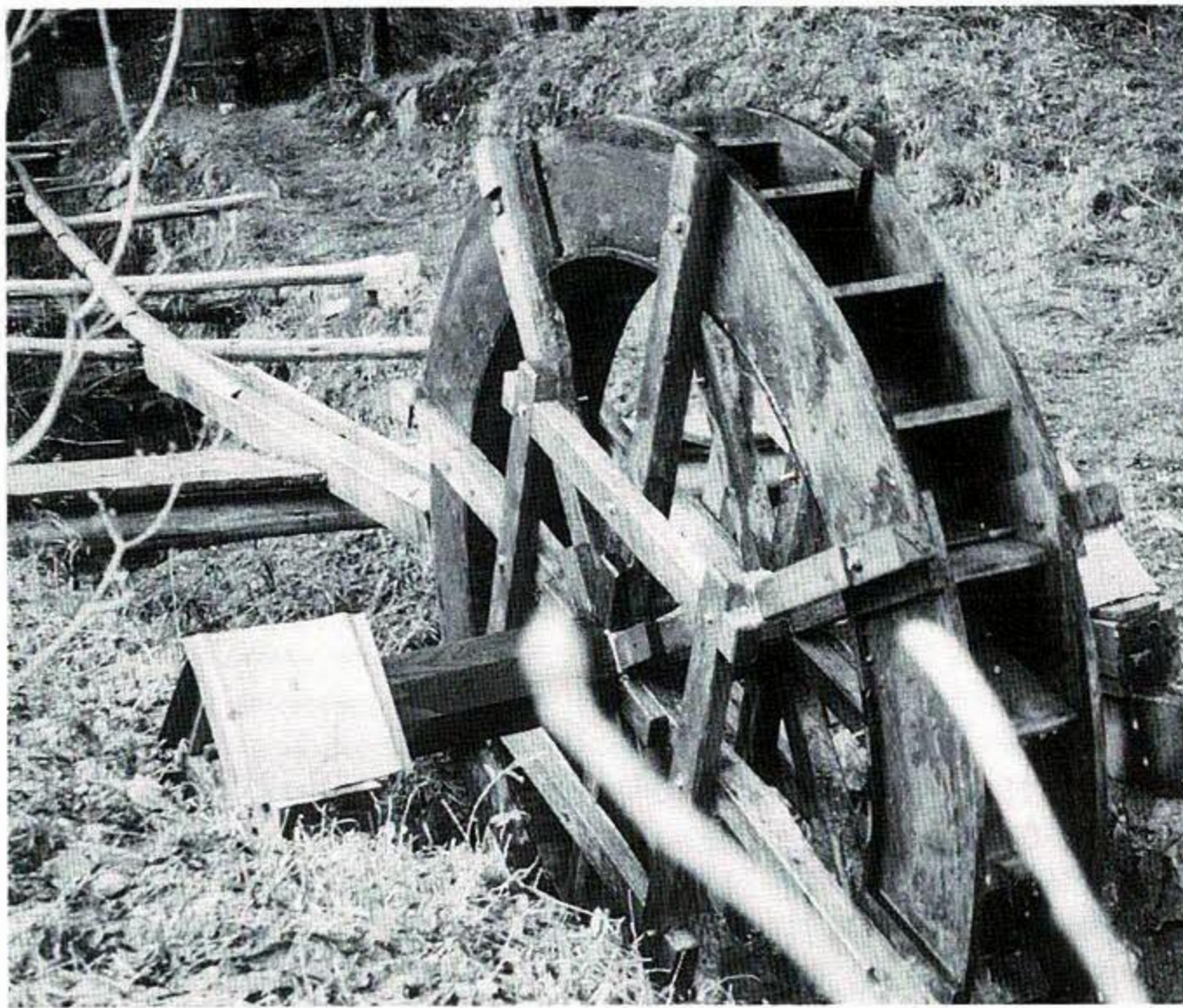
現在のように、真白ではなく八分搗

きでしたが、それでも一臼搗くのに五〜六時間はかかり、気長な米搗きは、夜業になるのは普通であったようです。

途中搗き具合を見に行くのに、提灯をさげ狭い田畑の畦道を通り、大きな水車の音だけのする暗闇の中がとても、こわく子供の頃見に行くのはいやだったとか：：

米搗きは、秋、冬と春先まで田植が始まると、水が少なくなり上流部の水車は休止となります。

搗いたお米が底をつくと遠く上野に一カ所あった精米所へ、お米を背負って行ったり、又どの農家にも台所の片



隅に作っていた唐臼をつかっての米搗きでした。

天井から下げられた取手につかまり、足で杵を踏み上げては落とす。この作業は、かなりの体力がいります。三升ほどのお米を搗くのに千回は踏んだそうです。

子供の頃、田仕事に出かける父母から「晩までに、このお米を踏んどいて」と言付けられたのに、友達に誘われて、川遊びに行き、夏休みなどの川は賑やかで、楽しく時の過ぎるのも、お米を踏むのも忘れ、夕方に帰ると、夕食のお米はなく、母にきつく叱られた思い出は皆にありました。

又唐臼を踏みながら、居眠りをしたことなど、とても懐かしいと語ってくださいました。

最後の水車は、昭和三十五〜六年頃までは、あったようです。

村の人々は、飯見橋を渡り砂利道を登りつめ、この水車の音を聞くと、やれやれ帰って来たと気持ち落ち着いたのでした。

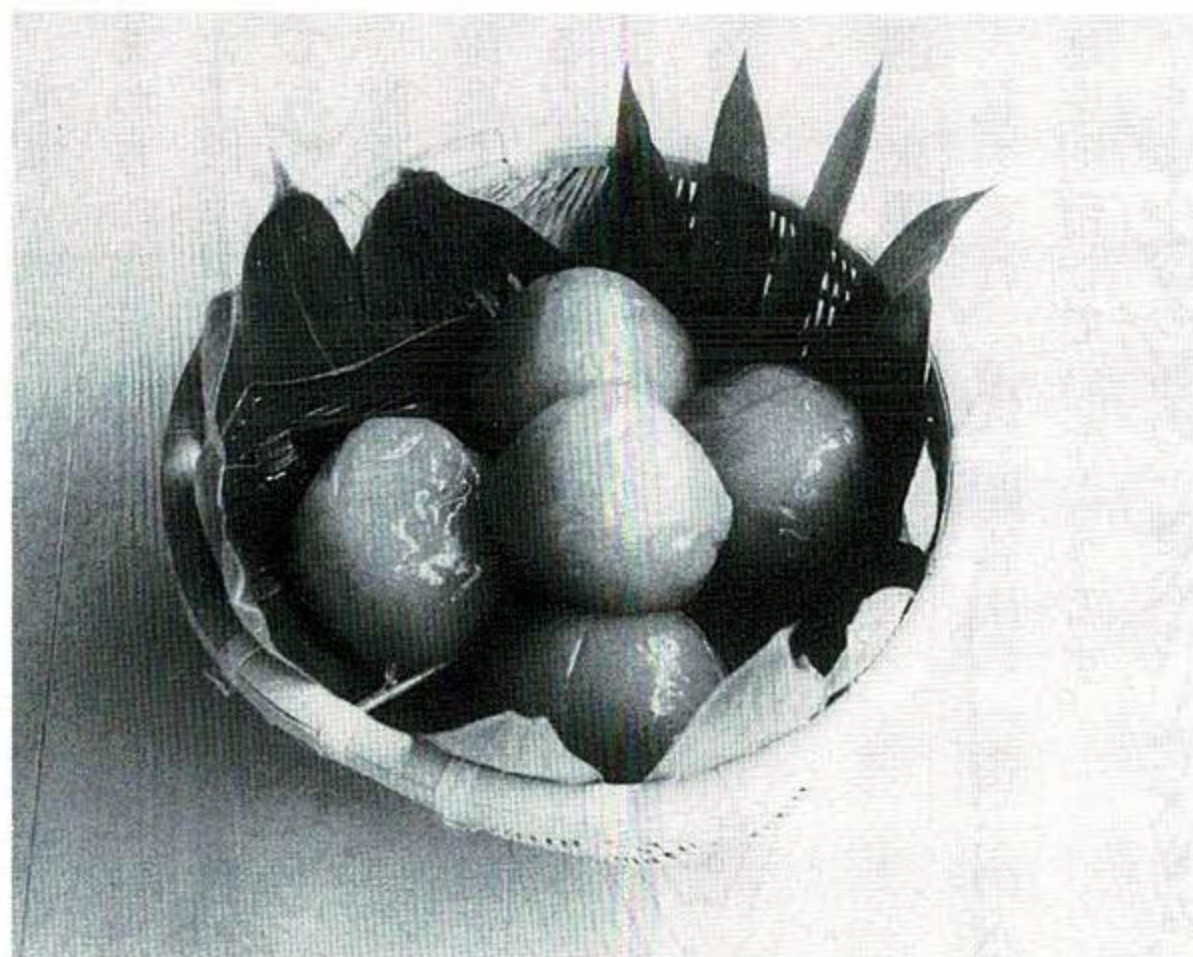
《第九集所載》

こんにゃくづくり

大谷 幸子

義母の高齢と私が仕事（パート）に出始めたことも重なって、今では作らなくなりましたが、ほんの十年前までは、わが家でも自家製のこんにゃく芋で手作りのこんにゃくを作っていました。今回はこの家庭でもかつては作っていたこんにゃく作りについて書いてみます。

今はダイエット食として人気のあるこんにゃくですが、以前は祭りやお正月の料理として各家庭でよく作っていました。



その基本はなんといっても、こんにゃく芋です。今は改良されて三年か四年もすれば人の頭ぐらいの大きさになる品種もあります。しかし私は昔から栽培をしておりました品種の方が歩合が良いように思います。

毎年秋に畝より掘り取って少し乾燥させておいて春に植えかえ、夏には荒い草を沢山入れます。そうすると、良質のこんにゃく芋が収穫できます。西谷村、奥谷村の時代には、こんにゃく芋を栽培し生計を立てていた方もあったそうです。

次に実際の作り方ですが、秋に掘り取って乾燥させておいた、こんにゃく芋をよく洗って厚さ一センチぐらいの輪切りにし藁すべが通るくらいまでゆがきます。

乾いたこんにゃく芋四キロに対して熱めのお湯十三・五リットル、灰汁七十ccを目安に用意します。

我が家は昭和が終る頃まで、ずっとご飯はかまどで炊き、風呂は薪をくべ、こたつには、その炭を入れておりましたので、その灰で良い灰汁が何時も簡単に手に入っていました。又近所にも

分けておりました。年をとった方は「あの灰汁のおいがるのが美味しい」と言っておりました。

次にゆがいたこんにゃく芋を、用意しておいた、お湯といっしょにミキサーにかけます。ミキサーのない頃は、餅臼でつぶしていたので、なかなかの重労働でした。つぶした芋は大きな容器に入れて、そこに先ほどの灰汁を加え、よく混ぜ、しばらくしたらお椀のようなもので片方からすくってなめらかにしながら、沸騰したお湯のなかに入れて固くなるくらいまで煮ます。それででき上がりです。

灰汁の効きすぎたこんにゃくは固いし、反対に効かなければ固まらず、丁度よい加減のこんにゃくを作るのはむずかしいものです。

家庭でこんにゃくを作るとき今では、ソーダー（炭酸）を使っている場合がほとんどです。

やはり家で作ったこんにゃくは灰汁のにおいがするし歯ごたえも良くて、作り立てを田楽にしても大変美味しいです。私も仕事をやめたら、こんにゃくや豆腐など、手作りの添加物の入らないものを作って楽しみたいと思っております。それが家族の健康にもつながると思います。



こんにゃく芋畑

《第九集所載》

年桶行事あれこれ

中岸 幸大

○はじめに

私は昭和十八年に小学六年を卒業した。子供の頃は正月、お盆、祭という、心わくわく早く来ないかと指折り数えたものである。なぜならば、腹一杯御馳走が食べられ、また僅かでも小遣い銭も、もらえたからだ。子供なりに気を遣い祖父母の言うことも素直に聞き、進んで家の手伝いや子守り等もして、みなの機嫌をとったりした。衣服、肌着、履物等も新調してもらった。ともあった。元旦には登校して講堂で式典があり、教育勅語を聞き、正月の歌も歌って下校した。

(1) 年桶

年桶とは年の瀬の押し迫った大晦日の十二月三十一日に家庭で代々伝わっている木製の丸い桶(直径二十糎前後、高さ三十から四十糎位)の年神様を祝うための器である。

祝い込む物は家庭によって多少違いがあるが、主な物を列記してみると、
①鏡餅(重餅、小餅なら十二個) ②米一升二合(一合二勺) ③お金は千二百円または一万二千円 ④串柿 ⑤黒豆十

二個⑥だいたい(みかんか柚子) ⑦栗(家族の人数分)等を入れて蓋をする。桶のまわりの飾り付けは注連縄を巻いたり、藁を垂らしたり、御幣を着けたり、また羊歯(裏白)や譲葉、榊等を結び付ける家もある。

これらの飾り付けは神様が宿り易いようにという意味と神様の鎮座でその家が栄えるという(その家を守って下さる)ことも含まれている。

この年桶行事はその家の新しい年の幸福と家内の健康安全と五穀豊穡を年神様をお願いする大事な行事である。

このように伝統行事を推考すると年桶の祭る場所が推測できる。各家庭で年神棚が設けられる所は、床の間、祖先の霊前の横、または愛好した諸道具や器具等の前など家々で異なる。

以下個々の謂れについて述べる。
①鏡餅

正月と言えば餅を連想するくらい餅は正月の祭事の重要な物である。餅は望で、満ち足りるという意味を含んでいる。

円形で大きく平たい、めでたい縁起と結びつけて鏡餅という。二個重ねて、

日、月を表わし、一重ねという。鏡にうつる自分を見て、自己反省や感謝、戒めや誓いの意味もある。

供え方や供え場所も家々によって多様である。木の器やお盆に半紙を山形に折って鏡餅を置くだけの家、みかんとか干柿等を上に載せる等。

供える場所も、神棚、床の間、仏壇の横、愛好の道具や器具等の前等、家や人によって感謝や念願成就が結びあっておればよいと思う。

② 串柿

串柿は剣を意味し、護身物と結びついている。これは串柿の竹串が深くかかわっている。

また、数字のゴロ合わせから、両側の二個ずつはいつも、にこにこ、中の六個は仲むつまじく、健康安全で、安楽な家庭を願うという意味も持っている。

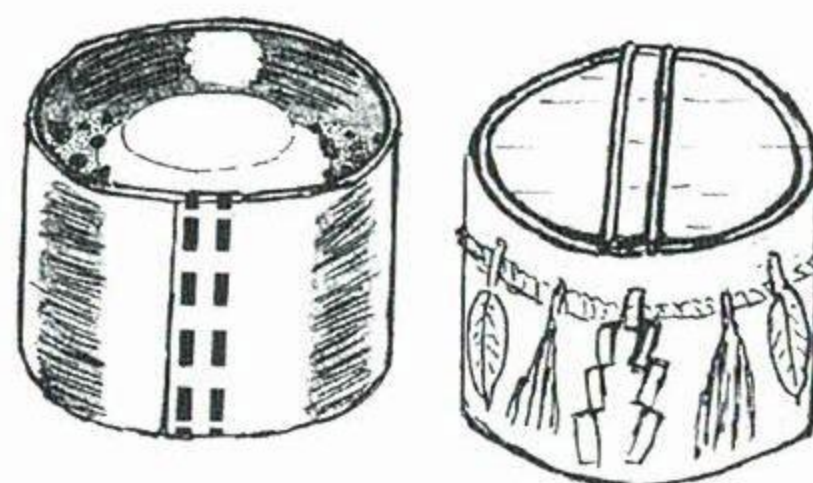
③ みかん

以前は「だいたい」であったが、近年はみかんとか柚子が使われている。だいたいよりみかんの方が手に入りやすいと言われている。

ここで一言、今七十歳以上の方で戦前に日本の歴史(国史)を学習された方なら、ご存知と思うが、日本の皇位のしるしとして古来から伝わる三種の神器(宝物) (一)ヤタの鏡、(二)アメノム



(年神棚)



(年桶)



(一家の元旦の祝い朝食[昭和初期])

ラクモの剣、(三)ヤサカリのマガ玉、この三種の特別な縁起物と、この年神様に供える鏡餅、鏡、串柿、剣、みかん(だいたい)玉として神器に結びつけて考える地域(地方)もあるのとことだ。

④お金

お金は十二支の関係から、百二十円か、千二百円か、または一万二千円を入れることが広まった。一月一月毎にお金が貯まるという願いから来ている。一万六千六百六十六円入れられる家もあるとか。金種別とゴロ合わせが縁起よい。

⑤黒豆

古くから五穀の一つに数えられ、米麦等と共に重要な食糧とされた。豆類全部を含むが、特に黒豆が栄養豊富で、また縁起やゴロ合わせから「くろぐる」とまめにすごしたい「一石二鳥の豆だ」と言える。



(若水桶とうす)

⑥栗

栗は「くりくり」と元気で丈夫に育つてほしいという親や家族の熱い思いから来た言葉と物のニュアンスが結びついたように思える。

⑦米

米は日本の主食であり、一番重宝がられた食糧である。そういう意味で古くから大事に取り扱われてきている。

(2)雑煮

正月料理には雑煮がつきものである。このことについても、一寸書き添えて置く。

雑煮には①餅を中心に、②雑魚(にぼし、または昆布)③焼き栗、④焼き豆腐、⑤芋(山芋か里芋)、⑥人参か大根(または青野菜)、⑦みそ汁仕立てか、すまし汁仕立て等の食材を混ぜた食べ物である。

正月の三が日に戴き、新年を祝う習慣が続いている。

雑煮は神仏に供えるだけでなく、以前は、かまどや、井戸等にも供えていた。

私の子供の頃は祝膳に黒塗内紅の椀を使って、家族全員が揃って、新年を祝ってから戴いた。子供の頃は男の子なら、自分の年の数だけ餅を食べると、元気で丈夫に育つと言われものだ。元旦の式典出席の登校中に、何個食べた、食べなかったと言いながら学校へ行った。

たものだ。
(3)若水・年男

元旦の日の出までに、木の桶に木の杓で新しい真水を汲み込んだ。その水をこの若水と言った。

この若水は正月三が日のお茶や雑煮等をつくる水に使われた。

また元旦の朝、神仏への礼拝の手洗い水としても使った。

その水汲みは一家の主人の役目であった。これを年男とも呼んだ。(家の事情で長男が代行する場合もあった)

○おわりに

私達人間は自然の営みと、月日の流れと共に、いろいろな節目がある。

この節目がその人の人生や一家の身の上、感謝の気持ちを抱かせたり、自己反省を促したり、勇気や奮起を与えてくれた。それが日々の充実した生活のもととなるのである。

この一つ一つの伝統的な年中行事を自分なりに主体的に捉え、健康で明るい人生を送りたいものである。

※参考文献は

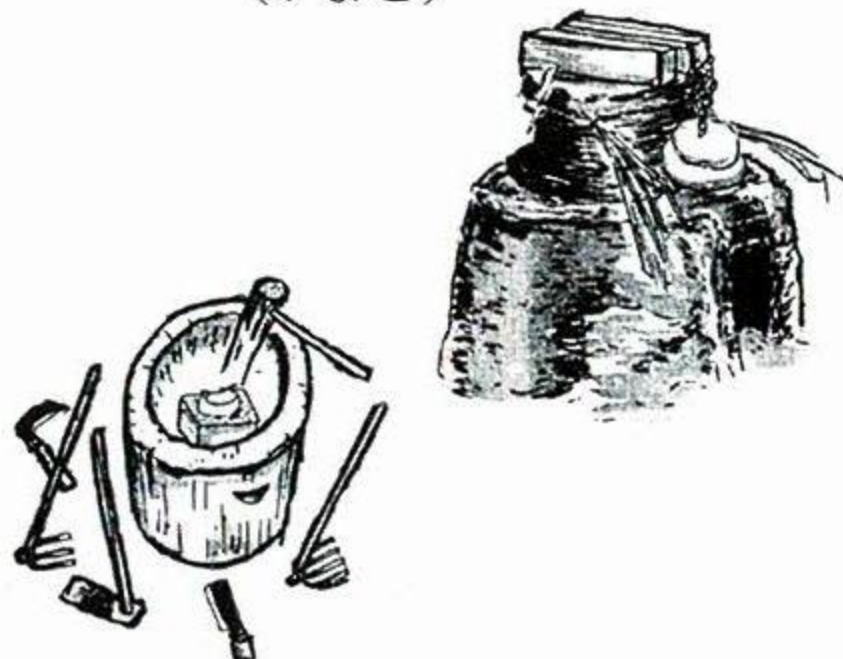
○『ふるさと歳時記』 中山 暁尚

(住所 一宮町伊和)

○『年中行事図説』 柳田 国男 監修

(発行所 岩崎書店)

(かまど)



(道具への感謝[年取り])

季節のならわし しきたり

山村 フサ子

日常生活の中には、さまざまなきたりやならわしがあります。一般的に、それは古くさいものと考えられがちですが、ならわしは決して単なる因習ではなく今も生き、未来へ生きていくものと私は考えます。

私達は祖先や父母から教わり、時代を越えて、伝えられてきたことの価値判断をし、正しく理解して、次の世代にそれを伝え残して行くことが私達の務めだと思えます。

一月 睦月

睦み合う

つまり人々が仲良くする月

元旦

元日の朝 あるいは元日のこと
年の初めの月の、さらに初めの日であることから一月一日を元旦とよぶので

七草がゆ

正月七日の朝 その年の豊作を祈り、冬場に少しでもビタミンを補い、同時に疲れた胃を休めます。

ごちそうを食べ過ぎて酸性になったからだを中和するのに効果があり、これらの風習から私達は先人の知恵を学びます。

七草揃わなくても、あり合わせのほうれん草、みつ葉、小松菜で代用できると思えます。

鏡開き 年桶おろし

お供えしていたお鏡餅をおさげして、それを雑煮か、小豆粥にして食べる行事。

由来は、新年の行事の一つで、十一日になると鏡餅をさげました。年神さまのおさがりを食べると一年間が無事息災で過ごさせていただけなのです。本来は刃物を使わずに手またはつちで叩いて割るしきたりです。切るということばを嫌い、開くとめでたいといえます。

お正月の終わりを意味し、これも大事な行事です。

小正月

昔は一月十五日を一年の最初とする暦でしたがその後、元旦が一年の初日

だという考えになり元旦を大正月、十五日を小正月とよぶようになったのです。この日には小豆粥を炊いて一家の健康と無事を祈るならわしが残っています。

とんど焼き

小正月の火祭り。火の燃え盛る様子から、この名がついたといわれます。地方によっていろいろなよび方があるようです。

めいめいの家の門松、しめ縄、しめ飾り、書き初めなどを持ち寄って燃やし、この火をからだに当てると若返るとか、餅を焼いて食べると病気がないとか、書き初めの灰が高く上がると字が上達するなどいわれ、年神さまはこの煙に乗ってお帰りになります。

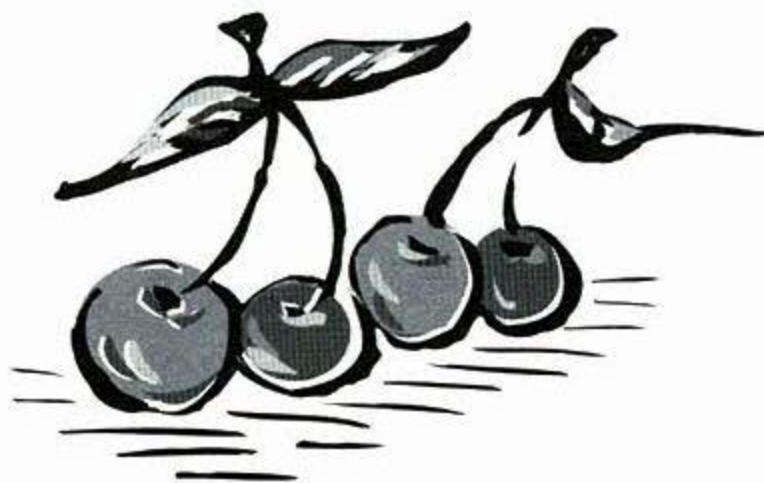
私たちは子供のころ親や周囲人々がしておられることを見習いそれなりに分かっているつもりになっています。

しかしいざ子供に問われてみると、その意味など知らないこと、曖昧なことに気付きまごついてしまいます。年配の方より改めて、教えていただいたり、本より抜すいして、書き綴りました。

日本の伝統の風習、習慣の中から日本のあるところを理解していまの暮らしに生かしていきたいものです。四季を通してさまざまな習わしがありますが、それが社会生活をする上で大切なルールであり、人と人とのつながりを深め、四季折々の生活にめりはりを与えてくれるのです。

世の中が目まぐるしく動いて、私たちの生活も忙しくなり、ところに余裕やうるおいがなくなると古いものが忘れられていきます。ただいくら科学が発達し、文明が進んでも、人間というものには小さな生きものに変わりなく、せめてお正月ぐらいは自分が今日あることを静かに振り返り、明日の幸せを祈りましょう。お正月とは、このころのお祭りです。

《第十集所載》



ふるさとの歌

中谷こめ

からすがカアカア鳴いている

一、からすがカアカアないている

すずめもチュンチュン

ないている

障子が明るくなってきた

早く起きぬとおそくなる

二、着物をきかえ帯をしめ

おちようず使いにいきましょう

たらいに水を汲み入れて

ようじを使い口すすぎ

三、顔をていねによく洗い

手先もていねによく洗い

きれいになったらおはようと

朝のあいさつ致しましょう

四、ごはんを静かに食べまして

紙や手ぬぐいを忘れずに

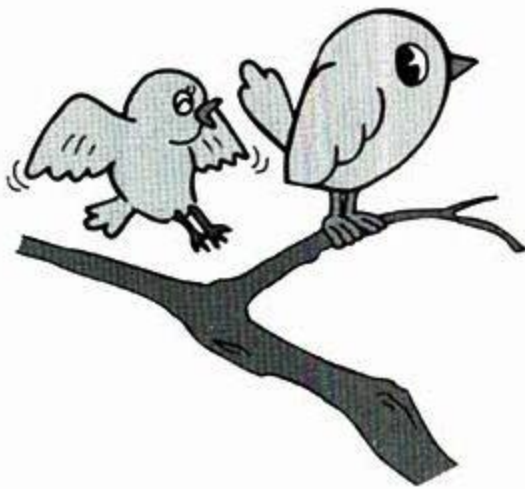
持ったらいきましょう学校へ

さっさと歩いておくれずに

五、今日も遊ばん連れだって

よき歌うたいおもしろく

ゆうぎのいくつも



いたしましう

好きなおけいこも

いたしましう

大正時代に母達が教わり歌ったもの

と思います。平凡な母でしたが、一生

懸命に働きこんな歌を歌っていました。

又大正時代に女性のハイカラな髪型

が流行したようです。聞くところによ

りますと毛たばなど入れて髪を大きく

ふかして結び襟足のきれいな人は美し

かったとお聞きしています。

野尻小学校運動唱歌

清き流れの揖保の川

その水上に位置するは

これぞ我等の住居する

楽しい故郷の奥谷よ

春はウド堀りワラビ狩り

夏は川辺に水遊び

秋は山路に栗拾い

冬は勇まし雪合戦

空にそびゆる大甲おおごんの

変らぬ姿影高し

それに劣らぬ我等には

高き雄々しきのぞみあり

活然の気はここにあり

高潔の気はここにある

その気集めし学び舎に

こまれる我等幸多し

蛍の光窓の雪

積みし古人のその事こと

倦まずたゆまず努めなば

遂には到らん人の道

元氣よく行進しながら歌って出て行きました。勇ましかった棒倒しなどをなつかしく思い出します。時代と共にこの歌も消えてしまいました。

《第十集所載》

